
ある少年の物語

ぼろくそ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある少年の物語

【Nコード】

N5575N

【作者名】

ぼろくそ

【あらすじ】

一人の少女とのたった数分の邂逅によって性格が歪んでしまった主人公。

10年間を無意味に過ぎた末に少女との再会をはたすが、それは日常の崩壊への始まりだった。

ある物語の序章（前書き）

前書き 作者の僕自身よくわからない話ですが、読んでくれると嬉しいです。

残酷な描写はなるべく少なくするつもりですが、必要なところは深く書くので気を付けてください。

ある物語の序章

嫌な人間だと自分でも思う事がある。

この10年というものの、誰かに感謝する事も好意を寄せる事も無く至極無意味に生きてきた。

困った事があれば世話をされる前に放り投げ、知人が出来ればただ知り合いのまま接し続けて離れていった。

友人も無く、親にも見放され、体はボロボロになってしまったが特に気にしていない。

もともと、俺だって最初から今のような人間だったわけじゃない。俺の成長に多大な影響を及ぼした出来事があった。

小学校に上がってすぐの事だった。

幼い頃の曖昧な記憶の中にあって、ひとつだけ今なお鮮明におぼえている記憶。

その日、俺は殺人鬼に会った。

その日は初めての社会科見学だけあってか、どいつもこいつもキラキラと目を輝かせながら訪れた警察署の中を歩き回っていた。

先生達は何やら難しい顔で話し込んでおり、かわりにクラス委員の

角倉^{かどくら}が口うるさく注意しているが、聞こえていないかのように皆騒がしく落ち着きがない。

まあ、かくいう俺もその一人で、若い婦警達がアレコレ説明しているのも聞かずにフラフラと列からはみ出しては迷ってしまった。

運の悪い事にその日は大きな事件があつたらしく、人が少ないうえに皆慌ただしく働いており、俺に気がついてくれる人はいなかった。

警察官といったってこんなものなんだ。ああ大人って大変だなー。

などと思つたかどうかはおぼえていないが、30分近くさまよい続けたせいで俺の心身は疲労し 子供が元気の塊だなんて思つたら大間違いだ フラフラと空いていた部屋に入り込んだ。

狭い部屋だ。

六畳も無かろうという小さな空間の中に、格子のついた窓とこれまた小さな机が真ん中と隅にひとつずつ。所謂『取調室』と呼ばれる所である。無論、その当時はその部屋がどういふ場所かは知らなかったし、何よりそんなこと考える間もなくそこにいた少女に俺は目を奪われていた。

少女。

少女である。俺よりも少し年上くらいの。

お世辞にも清潔感があると言えない埃っぽい部屋にその少女はいたのだ。何かめっさ拘束されまくって。

手錠、足錠、指錠、腕錠、腿錠、腹錠、腰錠、首錠……首から下の考えられるあらゆる箇所には錠をかけたのではないかというくらい、その少女は体を拘束されていた。

「こんにちはあ、はじめましてー」

しかし、そんなもの気にもならないとでも言うかのようなのどかな声で、少女は俺に話しかけてきた。

当然ながら、そんな少女に言葉を返せるわけもなく、俺は瞬きすら忘れて少女に見入っていた。そんな俺に、首輪で椅子に拘束されつつも器用に首をかしげる少女。

「あれえ、はじめましてじゃなかったっけ？」

「……いや、はじめてで間違いはないけど」

「そつかあ。よかったー」

おそろおそろ返す俺に屈託なく笑う少女。

何だこの状況？

そんな問いに答える者は当然おらず、少女は言葉を続けた。

「ああ、よかったあ。ずうっと大人の人とばかり話してたから退屈だったんだー」

「そっなんだ」

「それにほらあ、手とかこんなだから痒いところかくのも一苦労で」
そう言つてこれまた器用に拘束された手で耳の裏をかく少女。なんとも異様な光景にうなりつつも、俺は少女に聞いた。

「それ……何でいっぱいされてるの？いじめ？」

「ああ、これ？うーんそういえば何でだろう？」

「いや聞かれても」

「まあ、いっかー。ねえ、これ外してー」

ちよつと背中搔いてー、とでも言うかのように両手を差し出す少女にポカンと口を開いた俺を誰が責められよう。

「無理だと思うよ」

「大丈夫。そっちの机の中に鍵が入ってるからー」

何というご都合主義。

置いて行つた警察官の不用心さに呆れつつも、引き出しから束になつてゐる鍵を取り出した俺は、それを持って少女の前に立つた。

改めてみるとかなりの美少女だ。ふと長く伸ばされた黒髪からのぞく眼と目が合った。

異国の血が混じっているのか目が血のように紅い。その深い深紅の瞳に魅入りそうになっていた俺は、覗き込む少女の視線にハツとし

て顔をそむけながら錠をはずしにかかった。

後々思うが、その日の俺はとてつもない程に馬鹿だった。

何が俺をそうさせたのか？今考えても分からないが、俺は迷うことも無く少女の体をひとつひとつ解放していった。

カチリ。と、最後の錠が外れ少女は自由となった。

「これでいい？」

「うん、ありがとう」

立ち上がった少女はそれだけ言う俺に背を向けて窓の外を覗き始めた。

そんな少女に、俺はと言えば少し拍子抜けしてしまった。

俺の前に突然現れた少女。迷い込んだ部屋で全身を拘束されていた少女。深い深紅の目で自分を覗き込んだ少女。

その少女が解放されて何を始めるかと思えば、窓の外を眺めるだけか……。と、

「ああ、そういえば名前聞いてなかったねえ」

そんな俺の耳に少女の声とともに、

「まあでもいいかあ」

ガラスが砕け散る音が届き、

「すぐにバイバイするしい」

割れたガラス。その破片をナイフのように握った少女が俺の心臓を、

「じゃ、ばいばーい」

刺さなかった。

それはもう見事に予想を裏切るスルーで俺の前を通り過ぎ、かわりに部屋へ戻ってきたのであろうスーツ姿の男の腹を裂いた。

それは、見る人間によつては美しい光景なのだろう。鮮血が飛び散る瞬間というものは。

もともと俺の位置からはその光景は見えず、ただ肉が地に落ちる音だけが耳に響いた。

振り返つて最初に見えたのは白いスーツを紅く染めながら死んでいく男の姿。幸いにも顔は見えない。

どんな表情で死んだのか。どんな表情で彼女は男を殺したのか。もし見ていたらそこで吐いて倒れていたかもしれない。

だが幸運にも俺は立っていた。そのまま歩き、何事ともなかったかのようにクラスメイト達と合流し、先生のお叱りを受けた。

その後すぐ社会科見学は中断。パトカーの護衛つきで学校まで戻った。

その日の事は誰にも話していない。誰も話そうとしない。

後になって聞いた事だが、その日、とある夫婦殺害事件の容疑者が逮捕されていたらしい。容疑者は殺された夫婦の娘　当時8歳の少女。

脱走を繰り返し拘束されていたが、担当のカウンセラーが目を離したすきに脱走。カウンセラーの男性は死亡。少女はまだ捕まっていないらしい。

ある選択と再会

何でこんな事になったのだろうか？

額に大粒の汗を流しながら。俺、唐木涼夜^{からきりようや}は考えた。

無駄にデカイ不良（見た目30代）に追われながら溜息をつく。

きっかけは何でもない事だったはずだ。絡まれている女の子を助けたとか、カツアゲされている同級生を助けたとか、ましてや黒ずくめの男達の怪しげな取引現場を目撃したわけでもない。

ただ歩いていて肩がぶつかったただけだ。世間ではそれが原因で重傷を負った人もいるらしいが、冗談じゃない。

そんな事を考えている間に人気の無い路地の角を曲がり、左右二つに分かれた場所に出た。

右、大通り通行人数多。左、大型駐車場人通り皆無。右だな。

その間0.26秒（俺主観）による人生でも上位に入る反応速度でターンを決めた俺は、しかし、向こうから来た人影によって逃げる道をふさがれた。

そういえばもう一人いたんだっけ……。

悔む間もなく、俺の体は真正面から受け止められた。

ナイフを持った手で。

「あ、れ……？」

何と間抜けな声だろう。いや、実際間抜けだ。刺す気も無かった相手の刃物に自分から飛び込んだんだから。その証拠に相手の男もポカンとした顔で俺の事を……、ん？

「ごめんなさーい、大丈夫ですかあ？」

変だな。男のわりに妙にハスキーボイスなような、小柄で手が小さいような、顔が可愛いような……。そして何より、刺された筈なのに何故こんなに意識がはっきりとしているのか。

……ああ、何だ

丸々三拍ほどおいて俺は分かった。腹刺されてこんなに思考がスムーズな理由なんて一つしかない。

「夢か」

「さっさと起きろっ！」

ひどい寝起きだ。

そんな事を考えながら、ズキズキと痛む後頭部を押さえつつ俺の意識は覚醒した。

教科書（縦）で後頭部をぶっ叩かれたんだから当たり前だろう。平

穏と無関心さが蔓延した現代日本でこんな事をするのは一人しかない。

隣で凶器（教科書【古文？】）を隠そうともせず立っているソイツに、俺は文句を言った。

「なあ角倉^{かどくら}よ、俺はあれか？昭和のテレビかなんかか？たたけば直ると思ってるのか？お前馬鹿なのか？」

「授業中に寝言まで言いながら爆睡してるのが悪い。先生だって授業が進めずらくて困ってるんだから。ね、先生」

顔の角度を変えず、目だけを動かして、黒板の前にいる教員へ視線を向ける角倉。

いやいや、先生いきなり話ふられて困ってるから。

唐突に話を振られた教員（20代女性）は、何と答えたものかわからずに、俺と角倉を交互に見ている。

しかしながらこの女 角倉^{かどくら}夕月^{ゆづき}は、いつも事後承諾で人の事殴っ
ておいて教師のせいになっているにもかかわらず、学校内での評判は
無駄に良い。

何せ小学校から10年連続でクラス委員をやり続けているような奴だ。

今時珍しい正義感のある子だの、見ていてスカッとするだの大人も子供も手を叩きながら褒め称える。

そりゃ、見てる方は楽しいだろうさ。

40メートルの巨人が悪の怪獣と闘えばワクワクするし、ヘタレで女好きのポンコツヒーローがリングの上で悪魔超人を倒す様は痛快だろう。だからってやられる方はたまっ

たものじゃない。特に俺のような善良未満不良未満の宙ぶらりんには過剰戦力でいい迷惑だ。

そんな思考を俺が巡らせている間にも角倉の話は続く。

「だから、今時叩かれたくらいで更生できるなら私は嬉しいと思うし、叩かれる事も知らずに大人になっただけで碌な人間にはならないと思う。あと誰か叩かないと一日調子狂うし」

何かいいこと言った後にドS発言しやがった。だいたい教師のせいにして同級生殴るとかお前の方がよっぽど危ない人間だと思うぞ。昔はこんな事言う奴じゃなかったんだがな。

活発ながらも優しくあったあの頃の夕月よカムバック。

などと言ったらまた殴られるから、間違っても言わないが。

「あの、授業の途中なんだけど」

成り行きを見守っていた先生が恐る恐る声をかけてきた。

いや、あなたの方が偉いんだからもつと強気で注意しましょうよ。結果的に角倉は自分の席に 少々不満気味ではあったが 戻ってってくれたのだが。

そんな角倉を見て。

ああ、眠い。

懲りずにも俺は欠伸をし、落ちてきたあごをそつと手で支えた。

時間にして10分程だったろうか。そこまで我慢して結局俺は舟を漕ぎはじめた。

スーッと意識が引いて行くのを感じ、抗おうと体を動かすが、体の動かし方など最初から知らなかったかのように、瞼をピクリとさせることもなく俺の意識はどことも知らぬ場所へとその触手を伸ばした。

懐かしい夢を見た。

何度もうなされては飛び起きた夢だ。良いか悪いか今ではとうに慣れてしまったが、それでも見ていて楽しい夢ではない。

早く起こしてくれねーかな角倉。

ついさつき後頭部を強打されたばかりだというのに、俺はそんな事を思った。だが、俺の願望などよそに夢は進む。迷って一人歩き始めた。

そういえばこの頃はまだ角倉とよく話していたな。

現実逃避でもするように昔を思い出した。無駄な事だ。

顔をそ向けられるわけでも耳を塞げるわけでもない。何度もそうし
ようとしてはその瞬間を視続けてきたのだ。狭い部屋へと迷い
込んだ。

角倉の事、夕月って読んでたんだっけ。恥ずかしいな。

笑おうとしても無駄だった。

少女の笑う声が耳に届き、その時はきた。

「だから寝るな！」

ひどい寝起きだ。

嫌でも耳に響く声と脳を揺らす衝撃で俺の夢は砕けた。

妙なタイミングで起こされたせいだろうか、つい昔のように角倉の事を呼んでしまった。

「
たたく、
痛いだろ夕月」

「えっ」

あ、やっ
ちまっ
た。

幸か不幸か、今しがた見た夢を忘れる勢いで、俺はサーっと顔を青

くした。何ていうか、視線が痛い。

クラス中の 先生に至るまでが 好奇のこもった目で俺を、否、俺と角倉を見ている。

突然の事に停止していた角倉がカツと顔を赤くしながら復活した。しかし、したはいいが何としたものかパクパクと口を動かして何も出来ずにいる。

1000年は経ったかという永い沈黙を終わらせたのは、何とも和やかで聞きなれたチャイム音であった。

「あ、授業あんまり進まないで終わっちゃった」

困ったように教科書を閉じた先生の声が何とそぐわない事か。

しかし、言っちゃったものは仕方ないが、さすがにこの空気は嫌だ。耐えかねた俺は、まだ陽は高いというのにそそくさと学校を抜け出して帰路についた。

サボりなんて慣れたものだ。

小学校以来だったな。

思えばずいぶん角倉の名前を読んでいなかった。

些細なことで喧嘩し、中学では言葉を交わす事も稀だった。明日会

いづらい。

いつそ学校を辞めたいとすら考えてしまった。

くだらない。ああ、くだらない。

そんなくだらない事を考えている最中だった。二人組の男とぶつかったのは。

「痛つてえぞ、謝れよおい」

何でこんな事になったのだろうか？

その後の事はよく覚えていない。

男とぶつかって、殴られそうになったのを避けて、そのまま逃げて、学校で視た夢の通り大通りと駐車場の分かれ道についた。

もう一度言うが、何でこんな事になったのだろうか？

もちろん答える声はないし、考える暇もない。俺は選択の瞬間に来てしまったのだ。

大通りへ行けば俺は……。

無意識とも思えた。そのくらい俺はすんなりと駐車場へと曲がった。

そして殴られた。

痛い。

血は出ていないようだが頭を打ったせいでクラクラする。そんな俺を、殴った方の男が押さえつけた。そこへ追っていた方の男が追いつき、血を流して倒れた。

「さようならあー」

声が聞こえた。少女の声だ。

とても無邪気な声で、遊んでいた猫とバイバイするかのように、自分が殺した男を少女は弔った。

「・・・・・・・・」

俺も俺を押さえつけている男も声を出せなかった。男は混乱と恐怖で、俺はその少女の姿に懐かしさを感じて。

数分か数日か、時間の感覚が無くなるような沈黙を破ったのは男だった。

「うつわあああああああああ！」

壊れたように叫びながら俺を押さえていた手を離した。

それは逃げようとしたかったのか、あるいは死んだ男の仇をとろうとしたのか。しかし、何もすることなく、男は俺を離した直後に死んだ。

ほんの一瞬で、少女はそこにいた。

黒い髪に赤い目をした少女。

何の迷いも感慨もなく、俺のすぐ目の前で少女は男の首を薙いだ。

黒い髪に赤い目をした少女。

黒い髪は紅く染まり、赤い目が息絶えた死体を写す。

ああ、これがあの時見れなかったものか。

妙な感慨と満足感がうつすらと満ちるのを感じ、俺はハアと息を吐いた。そんな俺を少女が見る。

「あれえ」

間の抜けた、何とも無邪気で似つかわしくない声で少女は言った。

「あなた、死んじゃいますよお」

その声を聞きつつ、俺の意識は静かに閉じた。

ある実状と現状

両親がいなくなったのは中学に入っただった。

いなくなったと言っても、失踪やテロに巻き込まれて行方不明になったわけでもない。

おそらく探せば　それこそ電話一本で　見つかるだろうし、会おうと思えばすぐにでも会える。無論、向こうに会う気があればだが。

その日、俺の両親は何の前触れもなく、何の未練もなく、空っぽの家を残して出ていった。正確には家は既に不動産屋のものになっていたが。

まあ、いなくなったものは仕方ない。俺自身、特に会いたいと思う事はない。

碌でもない親戚に預けられた事は一発殴っておきたいが、特に不自由した事はない。

もしどこかで会ったなら、あんたがいなくても困らず育ったよと言っただけでいい。

そんな事を考えていた俺に、

「やあ、起きたかい」

何とも不快な声が届いた。

消毒液の独特のにおいが鼻孔に入り、閉じていた感覚が徐々に開き始めた。誰かが俺の顔を覗き込んでいるのが分かる。

目を開けたままぼんやりしていた俺の視界に、くたびれた男の顔が映った。

「いやよかった。ちょうど閉めて帰ろうと思っていたところなんだ。あと10分遅かったら一晩手術室で過ごすことになってたよ涼夜君」

その男の印象を一言で言うならば、胡散臭い。

まだ若いはずの顔は、常に疲れが溜まっているようにくたびれて10年は老けこみ、埃ひとつついていない白衣は、清潔感があるはずなのに本人はどこか不気味で近寄りがたい。

黒木深夜くろぎ しんやというこの男は残念なことに俺の親戚であり、現在世話になっている身元引受人だ。

お役所の職員いわく、両親の親戚の中で唯一同じ市内に在住で、開業医という優良かつ高収入な仕事についている優良物件とのこと。

ついでに言うと、ひとつ返事で俺を引き取ってくれた慈善家らしい。

その時の俺は全く信じていなかったし、今だっても信じてなどないのだが。

と、まあ、それはさて置き。

「何で手術室に寝かされてんだ？」

部屋の中心にある手術台の上で体を起こしながら俺は聞いた。

「倒れていたと聞いたからね。発作でも起こしたかと思ったんだよ」

「倒れて……ッ！」

男、駐車場、血、ナイフ、肉が落ちる音、悲鳴、黒髪、少女、赤い眼

その時の光景が一気にフラッシュバックし、俺はグッと歯を噛みしめた。ダラリと汗があごへと垂れる。

「なあ、俺」

「白瀬君（はせい）に感謝したまえ。君を見つけて運んできたのは彼女だからね」

「白瀬さんが？」

「はい」

「おわっ！」

気配も無く後ろから声がかかった。

振り返ると、この黒木診療所唯一の看護師である白瀬明美（しらせ あけみ）さんが立っていた。

まだ大学生ほども見えるが、俺が引き取られた頃には既に働いており、看護から事務までを一人でこなしていた。

何でこんな才色兼備な人がこの男の所で働いているのか実に謎だ。

つと、そんなこと考えてる場合じゃない。

「あの、白瀬さん」

「はい」

「俺が倒れてたのって……路地裏の駐車場でした？」

「そうでしたが、それが何か？」

周りに二つほど死体が転がってませんでしたか？ などと聞けるはずもなく、俺はいや……と言葉を濁した。

「何でもないのでしたら私は終業します。お疲れ様でした黒木先生」
ぺこりと頭を下げて白瀬さんは部屋を出て行った。それを確認し、黒木がさて……と切り出す。

「倒れたのは薬のせいかい？」

「さあな。でも最近眠気が酷くなった」

この男 黒木深夜には外科医としての顔とは違う薬品開発者としての顔がある。もっとも、本人は大人の趣味、俺は趣味の悪い趣味、

世間では医療の仕事ととらえられているが。

そもそもこの男が許可だの免許だのを取っているのか俺は分かっていない。今更怖くて聞けん。

この男の作っているものを一言で言ってしまうえば睡眠薬だ。もっとも、この男が普通の睡眠薬など作るはずもなく。飲むだけで頭の回転が速くなったり記憶力が増したりするという、もはや睡眠薬でも何でもない秘密道具の類を作ろうとしているのだ。

ちなみに成功率はゼロ。

暇な時に思いつきで作っているのだから当然と言えば当然だろう。

ちなみに、飲んだ後は決まって唐突に眠気や疲労、軽いめまい等が襲い、ひどい時には何の前触れもなく意識がブラックアウトする。命に危険がないのが不思議だ。いや、俺が気付いていないだけで、内臓が腐り始めていたりしているのかもしれないが。

まあ、とにかく。この馬鹿の実験が成功する日は永遠こないだろう。半分以上を飲んだ俺が言うのだから間違いない。

もっとも、この男には報告していないが、俺の予想の範疇　と言うか一般常識を超えた副産物を、俺は既に手に入れてしまっている。唐突に言うが、俺には過去や未来を観る事が出来る。というか、観れるようになった。

最初は唐突に過去の出来事を夢として思い出していただけだったが、だが次第に見た筈のないものを観るようになり、しまいには未来が

観えるようになってしまったのだ。

過去はもっぱら自分視点と他人視点、未来は自分視点で観ている。

無論、観れるようになったのは、この男の作る薬を服用するようになったからだ。それ以外に思い至るような　それこそ雷に打たれたり交通事故に会ったり　事など一度も無い。

ちなみに誤解している人の為に言っておくが、薬を飲むのは俺の意志であり、アルバイトだ。

治験というものがある。

薬品開発の為に人を雇って薬物投与の実験を行う事だが、普通は然るべき設備のある場所であるべき体制をとって行うべきであり、間違ってもある日突然飲まされて日常生活を送らせた後に「どうだった？」の一言で終わらすような事はないだろう。

というか、さらりと説明しているが、世間一般からして、そんな事をしている俺もかなり外れた人間だと思う。

捻くれていると言うには少々過ぎるかもしれないが、俺も大概困った性格だ。

そんな事を考えつつも俺は再び襲ってきた睡魔によって瞼を閉じた。結果として夜中の手術室の手術台の上で目を覚ます事になってしまったが。

親切なのか嫌がらせなのか　おそらく後者だろうが　置いてあった緑の光を放つ蛍光灯が本気で怖かった。

一晩明け、結局面倒になって診療所の中で夜を明かした俺は、現在暮らしているアパートへと戻った。

ちなみにこのアパート、黒木深夜の名前で借りてこそいるものの、家賃も敷金も礼金もすべて俺が払っている。バイトの金でだ。

命をかけているんだから当然かもしれないが、俺がもらっているバイト代は一流企業の月給並みに高い。学費や光熱費も払っているの
で楽ができていくわけではないが、子供が手にするには過ぎた額だ。

俺の知らない所で儲け口でも持っているのか、元からボンボンなのかは知らないが、あの男は金に関してはかなり気前がいい。一度住んでいるマンションに行った事があるが、地上30階の高級マンションだった。

裏で合成麻薬でも作っているんじゃないかと密かに思っていたりするのだが、真実を知る気はさらさら無い。

「学校サボりたいな」

汗臭くなったシャツを脱ぎながらぼやくが、習慣なのかその手はしっかりと新しいシャツと学生服を掴んでいる。

普通なら学校はおるか外に出るのも嫌になるような一日だったが、家にいても仕方ないので朝食と登校の準備を始めた。

自分でも理解しているが、どうにも俺は危険恐怖に対する感情が時

々希薄になる。黒木の薬を最初に飲んだ時もそうだった。あの男が驚くほど何の躊躇もなく口へと放り、意識が消えかった時も見事な動作でベットに入って眠ったほどだ。

こんな気味の悪い子供だったから親にも捨てられたんだろうか。

そんな事を考えながら、俺は朝食を食べ始めた。

学校は地獄だった。

別にゾンビがいたり人間とは思えない連中が闘っているわけでもない。ただ、360°囲むような視線が嫌でしうがないだけだ。

女子を名前で呼んだくらいで何でもここまで注目されねばならないのかわからない。相手があの角倉だからか？

その角倉と言えば、俺の事など気にするでもなく、机の上にマンガを並べている男子をガミガミと説教している。

あ、破った。もったいない。

結局俺は耐えきれず二時間目以降は屋上で暇をつぶすことにした。

屋上といっても学園ドラマに出てくるような洒落た空間じゃない。錆ついた頼りないフェンスとひび割れたコンクリートの足場でできたソコは、目下のところ廃材や廃棄される予定の教材を放置している場歩であり、立ち入り禁止になっていて誰も入れない場所だ。それ故に静かで見つからない場所なのだが。

誰にも見られないように階段を上り、ダイヤル式の南京錠が施されたドアの前へと立った。

『5963』

カチリという音とともに鍵は開いた。

ちなみにこの番号を知ったのも夢の中でだ。この能力があつて一番よかったと思つた瞬間がその時かもしれない。

雑多に積まれた廃棄物達の中へ足を踏み入れ、不意に俺は意識を失つた。

すっかり慣れ親しんだ感触に、慌てる事無く、受け身を取つた事だけを確認して俺は目を閉じた。

何か、楽しい夢だといいな。

味わい慣れた脱力感の中で、そんな事を思つた。

ある恐怖と悪夢（前書き）

用意しておいたストックが切れたので、更新速度がガタ落ちします。
スイマセン。

感想とかもらえると頑張れるので、よかったらお願いします。

ある恐怖と悪夢

上へ、下へ、前へ、後ろへ、右へ、左へ、登って、降りて、進んで、退って、上がって、下って、飛んで、潜って、現れ、消えて
ようやく周りが形を成して一つの夢が俺を迎え入れた。
セカイ

再び意識が戻って来るのを感じ、子宮を脱した赤子の様に、五感と四肢を確かめ、未知なる場所に対する不安と好奇心を胸に口を開いた。

「……デパ地下かよ」

はたしてそこはかなり見知った場所であった。

何か甘い匂いがする。

リンリンという鈴の音とともに軽快なリズムが人々の心を揺らす。

子供達は夜が来るのが楽しみなのか、親の手を握りながら飛んだり跳ねたりを繰り返している。

所謂クリスマスモードまっ盛りだ。

俺とて少々ヒネてはいるが高校生。立派な青少年だ。飾り立てられたツリーや豪華なクリスマスケーキを見て心ときめかないわけがない。
い。

ああ、いいじゃないかクリスマス。学校は休みだし美味しいごちそう食って素敵なプレゼントをもらう。素晴らしきかな聖夜。

毎年クリスマスは白瀬さんが張り切って準備をする。一見クールに見えて騒がしいのが苦手そうな白瀬さんだが、実はパーティー大好きだ。

ケーキは手作り、プレゼント自作、ツリーも自分で持ち込むという徹底ぶりだから恐れ入る。

ただ残念な事に人付き合いが苦手らしく、知り合いのパーティーに呼ばれても断ってしまうらしい。ちなみに恋人はいないそうだ。

まあ、おかげで野郎二人の灰色のクリスマスに華が出てくれるのだから俺としては嬉しい限りなのだが。

そんな事を考えている時だった。不意に景色がずれた。

いや、正確には動いたのだ。もっとも風景がではなく俺がなのだろうが。

およそ人の歩く速さで俺の体が進んでいく。何かに引きずられるかのようだ。萎えた。

いい夢なんてこんなもんだ。この夢は、俺に何を観せるんだろうか。

この『まち』は駅を境にして二つのエリアに分かれている。

古くからある商店街や住宅街からなる『町』と、真新しいビルや建物が立ち並ぶ『街』だ。

どうやら俺は『街』へと向かって動いているようだ。楽しそうな恋人達や余所行きを着た親子連れをすり抜けながら、俺の体は進み続けた。

どれほど経ったのか、すっかり日は落ちて辺りは人口灯の光によって白く照らされている。

気付けば俺の前には一人の女性だけが残されていた。

何処にでもいるような若い女性だ。明るい色のコートを着て人気のない裏道を歩いている。

不意にゾワリと背筋に寒いものが走った。感覚など無く、俺に危害を加える者などこの夢に^{セカイ}にいるはずなど無いはずのに、俺は弾かれた様に辺りを見回した。

誰もいない。

猫やカラスさえも。

自分と目の前の女性以外。

ゾワリとまた寒気が襲った。何か、思いだしそうになって頭を押さえた。

「まさか」

一度至った結論を振り払うようにつぶやくが、すぐにそれは起こった。

ヒツという短い悲鳴が女性から上がったのだ。それを聞いて俺は確信した。

これは過去。

この小さなまちを震撼させている恐ろしい事件。一昨年のクリスマスイブから続く連続殺人事件の最初の犯行の瞬間を俺は観ているのだ。

女性越しに誰かが近づいて来るのが分かる。女性は凍りついたように動かない。いや、動けない。俺ですら動けない。

今、目の前でこの女性を殺すであろう者は俺が想像だに出来ない程の何かだ。およそ人間が理解できる範疇を超えた何かが今、目の前で人を殺そうとしている。

イヤダ、オレハ観タクナイ。

目をつぶる。無駄。

耳を塞ぐ。無意味。

ここから逃げる。不可能。

嫌だ嫌だ嫌だ。誰か俺を夢から出してくれ。

すぎるように俺は願った。

そうだ、角倉はどうした？何時ものように俺を起こせ。起こせ、起こせよ。

角倉、早く、頼む、夕月

「えーいつ」

メキヨリという恐ろしい音とともに、俺の首が限界を超えた場所まで一気に回った。

「　　ッ痛えー！」

首を押さえてうずくまる俺に、後ろから声がかかる。

「ああ、ごめんなさーい。うなされてたみたいだったんでついー」

可愛らしい掛け声とともに人の首をねじ切ろうとした張本人は、これまた何とも可愛らしい声で謝った。

声からして女子だ。しかも角倉とは反対の意味で罪悪感を持たないタイプの。

涙で歪んだ視界を振り払い、悪魔のような女へと俺は振り返った。

「こんにちわぁ」

「……えっ」

何とも間抜けな声が上がった。もちろん上げたのは俺だ。

長い黒髪越しに、紅い眼が覗き、あの時のように目が合った。

振り返る前の勢いは何処へやら、痛みは止まり、涙は引っ込み、高揚していた心は永久凍土に埋められたかのように綺麗さっぱり姿を消した。

「お久しぶりでーす、探しましたよお」

にこやかに笑いながらソイツはいた。どうやって侵入してきたのか、私服のままで堂々と立っていた。昨日見た服のままで。

「ええつとお、私、お話したい事があってー」

なんとも愛らしい声と仕草でソイツは続けようとする。だが、そいつが続けるよりも早く。

「……」

停止していた思考が再開するよりも早く。

「あれえ？」

記憶がフラッシュバックするよりも早く。

俺は逃げた。

階段を駆け下り、向けられる視線に気付きもせずに学校を飛び出した。

なったものは仕方ないじゃないか。それが俺の出した答えだった。

世の中にはいくらでも仕方ない事はある。

親に見捨てられた、一方的に恨まれた、変な能力に目覚めた、学校に行き辛くなった……。仕方ない、しょうがない。

紛争地帯にサンタは来ないし、生きてるだけで体力は減る。現実なんてそんなもの。仕方ないものはしょうがない。

それだけあれば開き直るには十分だった。

あの時、男の人が死んだのは俺のせいだ。昨日二人死んだのも俺のせいだ。俺の知らない何処かで誰かが殺されたのも俺のせいだ。で、もしようがないじゃないか。仕方ないじゃないか。

俺は6歳であいつは8歳だったんだ。誰が予想できる？俺には無理だった。それだけの事だ。

そう考えると楽だった。だから、そう考えることにした。

おかげで人生が無意味に思うようになったが、まあ、しょうがない。

10分ほどでとうとう息が切れた。俺にしてはよくもった方だろうと称賛してやりたいが、そうもいかない。振り返ると赤い眼と目があつた。

「ハアハア……もう、いきなり逃げるなんて……ゲホッ……酷いですよー……ゼエゼエ」

結構涙目だった。

フラフラとした足取りで俺の肩を掴むが、その力は何とも弱々しい。意外だ。てつきりター ネーターみたいな無限の体力や怪力を持っていると思っていたのに。見る限り普通の女子と変わらない。

「ああ、悪い。ちょっと気が動転しててな。大丈夫か？」

「大丈夫ですよー。でもちょっと疲れたので休めるところに行きましようか」

そう言うなりそいつは俺の手を掴んで歩きだした。

仕方ない、なるようになれだ。

ある説明と受難

はて、何で俺はこんな所にいるのだろうか。

俺が腰かけているのは大の男が三人は並んで眠れるサイズのベッド。隣では件の少女が届いたばかりのルームサービスを美味そうに食べている。

部屋は簡素な造りで、周りはテレビとクローゼット程度しかなく、更にその周りを囲む壁は防音素材で完全防備されている。所謂ラブホテルという奴だ。

家、学校、診療所と半月に一度のスーパーしか行動範囲の無い俺にとっては、まち自体が無縁の場所だ。何故来たかと言えば、無論隣で早めの昼食（あるいは遅い朝食）をとっている少女に連れ込まれたからだ。

途中で若い男を連れた中年女とすれ違ったが。「まー不良ザマス、不潔ザマス」という目を向けられた。思い出したら泣きたくなった。

さて、しかし、いつまでもこのまま進展なしでいるわけにもいかない。かと言って俺からは聞きたい事も話したい事も無い。

いや、あった。

ひとつだけ、どうしても確認しておきたい事がある。

「なあ、俺達前に会った事あるよな」

唐突に少女の方を見て俺は聞いた。

「はい、お久しぶりですー。あなたも憶えてたんですかあ？」

「ああ」

10年も前に一度会っただけの事を憶えているなんて、考えてみれば凄い事だ。しかし現に俺は覚えている。

整った顔も、長い黒髪も、紅い眼も。成長こそしているものの、何もかもが憶えている通りだ。

10年経って尚、改編もせず色あせもせず、その記憶は俺の中にある。まるで、10年間その日を繰り返しているように、はつきりと。

いや、実際に繰り返しているんだよな。夢という形で。

「どうしたんですか？」

急に黙りこんだ俺を少女が覗きこむ。

つか、いい加減こいつの事を少女と呼称するのもにも限界が来たな。

そんな事を思い、俺は聞いた。

「なあ、名前なんて言うんだ」

「朝あさですよ。あなたのお名前は何ですかあ？」

「涼夜」

そっけなく言った俺の名前だったが、

『ほう、涼夜と言うのか。かっこいいじゃないか』

何故かいるはずのない第三者に褒められた。

振り向けば隅に置かれていたテレビ（地デジ非対応）。その画面上に声の主たる女性はいた。

『おお、中々良いボケ顔じゃないか。急いで電話をつながせた甲斐があつたぞ』

あまり上品とは言い難い笑顔で、ハハハッとその女性は笑った。

第一印象はメガネをかけた美人。周りを囲む豪華な部屋に負けず劣らず、華やかに、かつ豪快に笑う人だった。

しかし、そんな人が何故ラブホテルの一室　それもテレビ画面の中から自分に話しかけているというシュールな状況に、俺の頭は一瞬フリーズしてしまった。

そんな俺を再起動させたのは隣にいる朝だった。

「ヘヴンさんこんにちわあ、お久しぶりですー」

『まったく、お前は相変わらず厄介事を増やす奴だな朝。……まあいい。さて、ハジメマシテだな少年。私はヘヴン。エデンの統治者の一人サ』

「……………」

白い歯を見せながら、笑顔で自己紹介するヘヴンと名乗る女性に、俺はどう応えていいものか言葉を発せなかった。

『ああ、見事に何の説明もせずに連れてこられた口か。フッフ、まあいい私が一から説明してやろう。質問も発言も受けんから、鼻呼吸だけしながら聞くといい』

豪快かつ尊大に、ヘヴンは腰かけていた椅子にもたれかかり、俺の顔を見ながら話し始めた。

『さっきも言ったが、私はエデンの統治者の一人であり住民。そして朝もまた住民であり一員であり会員であり構成員。エデンとは国であり機関であり結社であり邸の名前だ』

「いや、何だよその曖昧な」

『質問は受け付けん』

「え？」

『疑問も受け付けん』

「あの……………」

『発言も受け付けん』

バツサリと俺の言葉すべてを叩き斬り、何事もなかったかのようにヘヴンは言った。

『エデンが何であり何処にあるのかは貴様には関係の無い事だ。ただ黙って必要な事だけ聞いていろ』

睨まれた。しかも横で朝が「逆らっちゃだめですよ」と忠告してきた。どうしようもないので押し黙る俺をよそにヘヴンは続ける。

『エデンとは文字通り楽園サ。ただしソコにいるのはどれもマトモな人間じゃない。奇人、変人、狂人、異常者、その他まともな社会では生きていけないような連中の為の最後の楽園。それがエデンだ』

何とも突飛で現実感に欠ける話だ。しかし、今の話でまた一つ疑問が解けた。

朝が10年間も捕まらなかったのはそんな所にいたからなのか。しかし、という事はヘヴンもかなり危ない人間なんだなやっぱり。

『少年、お前、失礼な事を考えていないか』

「まさか」

『言うておくが私はその殺人鬼のようにバツサバツサ人を殺した事なんか一度もないぞ』

意外だった。てっきりその類の人かと思っただが。

『ま、人をいたぶるのは少々好きだがナ。今も机の下で男の顔を裸足で踏みながら喋っているゾ』

「・・・・・・・・」

『冗談だ。ブーツくらい履いている』

踏んでいる所を否定してほしかったんだが。

内心でドン引きしている事など知る由もなく、ヘヴンは話を続けた。

『さて、エデンは異常者の集まりであり世界中のから忌み嫌われる存在なわけだが、実は世界中の国々から必要とされている組織でもある』

「矛盾してないか？」

『では一つ例を上げよう。今君のマチで連続殺人を起こしているのも私達と同じ、異常で狂人で変態的な趣向の持ち主だ。そして、それ故に警察は解決できずに半年近くも時間が経ってしまった。おそらくまともな人間では一生かかっても解決できんだろうよ』

「何でだ？異常者って言ったって、ただの人間だろう」

走った後の朝を見る限り身体能力は普通の少女に思えた。それでも何人も人を殺して来たのは、精神の異常性によるところなのだろうが、訓練を積んだ警官と正面から戦って勝てるとも思えない。

『じゃ聞くんが、警察がどういう捜査をしていると思う』

「？ドラマなら指紋とかDNAとか調べたり、人間関係とか調べたり……」

『まあ、そんなところだろう。では想像してみる。指紋もDNAも知られないような出生や生き方をした人間がいたとしたら？何の脈絡も動機も無く人を殺してしまう人間がいるとしたら？幽霊のように彷徨って目についた人間をランダムに殺すような奴をどうやって捕まえる？』

なるほど、そういう事か。

確かに捕まえる事は可能でも見つけることが不可能なら一生解決は無理だろう。いかに強固な網を張ろうと、何処からともなく落ちてくる針を絡める事は出来ない。

『理解したか？』

「ああ、確かにまともな人間じゃ無理だろうな」

『そう、故に私達が必要とされる。同じく異常で狂ってサイコで変態で破廉恥でクールな私達が助けてやって初めて世界は平穏で豊かな暮らしが出来るのサ』

ずいぶん大きな話が出たもんだ。世界の平穏なんて、俺にとっては言葉に出すことすら一生ないであろう言葉だというのに。

「じゃ、あんた達は世界を平和にする為に活動してんのか」

『そんな訳ないだろう』

だよな。

キツパリと否定してきたが、全く驚かないむしろ予想通りだ。路上でいきなり人を殺すような連中に平和が作れるとは思えん。

『そりゃ私だって平和で優雅で退廃的な生活を送りたいと思っているサ。だがな、世界が平和になんかあったら今度は私達が追い立てられる番だ。私達が望んでるのはエデンの平穏。その為には、キツチンの排水溝のように臭くて不潔で薄汚れた世界でいてくれないと困るのサ。……ところで朝の奴、妙に静かだな』

「ああ、寝てる」

俺に寄りかかりながら気持ちよさそうに朝は寝ている。食べたらず寝るとは何とも単純思考な事だ。

『……まあいい続けるぞ。もうわかったと思うが。朝が少年のマチへおもむいたのは、件の連続殺人の犯人の駆除だ』

「でもどうやって見つけるんだ？似た波長でも出し合ってるのか？」

『ああ、それに近いな』

近いのかよ。

『朝に限らず殺人鬼のような死に近い連中には面白い能力が合ってるな。一つは人を殺した事のある人間を見分ける能力。体面上、趣味での人殺しは禁じているが、そういう連中に関しては殺したきや殺していいと取り決めている』

昨日朝が殺した二人の男を思い出した。

危ない奴らだとは思ったが、人を殺していたのか。

『そしてもう一つ、死期が近い人間を見分ける能力』

「えっ」

不意に昨日朝に言われた言葉を思い出した。

「あなた、死んじゃいますよお」

「死ぬのか俺」

『意外とあっさり受け入れるな。信じていないのか？』

「いや、何か死ぬとか今更だなと思って。思えば眠るたびに次起きれる保証が無いようなもんだし」

『……少年、お前本当にノンケか？改めてみると変人オーラ出てるゾ』

「あんたらと一緒にされたくないな」

『言っておくがな少年。世界人工の3分の2はエデンにいるアナキー共の仲間入りしてもおかしくなくらい病んでいると私は思っている。お前もお前の知り合いも、いつ何時に壊れて狂いだすかもしれないから気をつけろ』

豪快な笑顔から一変。真剣な口調になってヘヴンは俺に言った。

意味深な言葉だが、特にどうとも思わない。俺には関係ないと思っ
ているからなのか、そんな事とつくの昔から知っているからなのか、
その両方なのか。俺には分からなかった。

『……所で、何でお前にここまで説明したか分かるか？』

そう言えば疑問だ。朝が人を殺す所を見たからと言ってこんな事を
聞かされる理由にはならない。口を塞ぐなら殺せば速いのだ。

情報を与える……いや、共有する理由があるとすれば、それは……。

「協力？」

その問いにヘヴンは答えず、真剣な表情のまま言った。

『朝の死期を見る力は少し特別でな』

嫌な予感がした。理由はないが、とてつもなく嫌な予感がした。

『事故や病気で死ぬ連中はまるで見えん。おまけに見える範囲も数
日中が長くても13日以内に死ぬ奴だけだ』

まるで、今日屋上で観た夢で感じたような第六感。

『こいつが唯一見えるのは、誰かに殺される奴だけサ』

「まさかとは思つが」

『ああ、長くても二週間以内に連続殺人の新たな犠牲者にお前はな

る。だから協力しろ。餌として』

冷たく殺風景だった俺の日常が泥沼に沈んでいくのを俺は感じた。

ある休日と幕間

余命最大13日（死因・他殺）を受けて3日が経った。

だからと言って別に何か起きたかというところ、全く何もなかった。
： いや、あったにはあった。

先日、角倉の名前を呼んだ事によって非常に登校しずらくなったのだが、二日と立たずに生徒達からその話題は消えた。

消えたと言うか、別の事件によって全校生徒の意識がそっちに傾いた事によってフェードアウトしてくれたのだ。連続殺人事件再発というニュースによって。

去年のクリスマスイヴの婦女惨殺を皮切りに始まり、19人の犠牲者を出した末に先月からピタリと止まり、ひよっとして終わったのでは？と思い始めた矢先の出来事に、まちは再びその話題一色となった。

誤解を招かない為に言っておくが、先日朝が殺した二人の事ではない。

ヘヴン曰く、連絡を受けて2分で処理したらしい。処理が何なのかは聞かなかった。今後聞く気も無い。

ちなみに今日は日曜日であるが、黒木診療所で雑用をさせられるのが日課の俺にとって、休日は労働の日だ。

「それが終わったら使用済みの注射器を縛っておいてください」

「……………」

テキパキと働く白瀬さんに比べて、俺の動きは実に散漫である。

もともと一人暮らしの条件として出されたものである為、やる気がないのは仕方ない。仕方ないんだが、

「いやー、日曜は眠たくなるねえ」

「どうぞコーヒーです」

「ありがとう白瀬君」

俺よりも圧倒的に仕事量が少なくせに、白瀬さんに優良待遇されている黒木を憎む気持ちを誰が止めよう。

そもそも、俺が手伝うほどこの小さな診療所が忙しいかと言うと、そうでもない。休日だというのに、待てど暮らせど患者は一人も来ない。患者は、であるが。

「こんにちは先生」

「ご機嫌いかがかしら」

「おひさしぶりですわ」

簡素な待合室の中央に、何とも似つかわしくないマダム達の姿は会

った。

待合室と言っても普通の待合室とは違い、長椅子や雑誌類などは無く、木製の椅子と丸テーブルという一風変わった造りだ。

別にデザイン性等を求めて揃えられたわけではなく、リサイクルシヨップで安く売っていたのを買って来たのだと白瀬さんが言っていた。

それだけ見る分にはまあまあ洒落ていて良いのだが、壁に張られた『紫外線は光学兵器』『献血でささやかな優越感を』等のポスターが何とも言えない違和感を与えている。

何故そんな異空間に着飾ったマダム達がいるのかと言えば、美容と健康について黒木に相談しに来ているからだ。最もそれは建前であり、黒木そのものが目的なのだから驚きである。

曰く、笑顔が柔らかで好印象。ミステリアスで惹かれる。知的で白衣が似合っている。

是非とも脳外科で脳を殺菌消毒する事をお勧めする。

ひょっとしたら黒木が作った薬が何やかんやで変な効果を發揮しているのかもしれない。

「コーヒーが入りました」

そんな事を考えていると、白瀬さんがコーヒーを淹れてくれた。ちなみに黒木も白瀬さんも極端にコーヒー派な為、コーヒーメーカーを6台も完備している癖にお茶っ葉一つ置いていない。

「お疲れ様です」

「ありがとうございます」

淹れ立ての良い匂いがする。コップ越しに伝わる熱を感じながら、ゆっくりと口を付けようとし、突然感じた眠気にパッと机に戻した。

ツイて無い。今日は実にツイていない。

コーヒーの黒い水面が視界いっぱいに広がって俺の意識は途切れた。

ちなみに朝とはあの日以降会っていない。

「勘弁してください」

何年ぶりになるかともしれない頭を下げるという行為をしながら俺は懇願した。

24時間体制で俺を監視して殺人犯を捕えると言われたのだ。なりふり構ってられようはずがない。そんな俺の懇願であったが、

『ん、じゃしょうがないな』

えらくあっさりと受理された。

「いいのかよ」

『言っただろ？私達は世界の平和なんてクソクラエだ。楽しんで良い結果ができればそれでよし。ミスって何人死のうが知ったこっちゃない』

「……………」

誰か死んだら俺のせいだろうか？

ふとそんな事を思い、すぐに首を振って否定する。関係無い。いや、仕方ない。今回も、あの時も、結果なんて誰にもわからないものなんだ。

『まあ、死にそうになって助けてほしくなったら朝の携帯にでも掛けるんだな。番号は』

という夢を見た。

そんなよろしくない夢見の後にまず目に付いたのは、これまたよろしくない不機嫌な顔で俺を見る白瀬さんだった。

「おはようございます」

「……………おはようございます白瀬さん」

怒ってます？怒っていらっしやいますか白瀬さん？

冷や汗をかきながら目線を逸らして仕事を再会しようとするが、ポツリと白瀬さんが言った言葉に手が止まった。

「嫌な夢を見ていたんですか？」

「えっ」

「そんな寝顔でした」

「ああ、ええ、まあ、熱いコーヒーで火傷する夢を」

適当に誤魔化し、飲めなかったコーヒーを取って一気に飲んだ。

「熱っ！」

噴いた。

「さっき淹れなめましたから。凄いですね正夢です」

「……どうも」

ああ、ツイて無い。

最大余命がどんどん減っていくというのに俺は相変わらずだった。

別に死ぬまでにやりたい10の事も無いし、死を回避する為に努力する気概も無い。もし明日その日が来ても、ただいつも通りの毎日の中であっさり死ぬだけだ。

ただ、以前夢で見た光景がそんな甘い妄想をすり潰そうとするのを感じてもいる。

夢だと分かっている筈なのに、ここから逃げたいと感じた光景。得体のしれない何か。死ぬ事よりも出会う事が怖いと思った何か。

いつそ朝とも会わずに、何も分からないまま後ろから刺されて死ぬのが一番いいパターンだったかもしれないと思いました。

そして日付の変わった月曜の朝、俺は小鉢マヒルこはちまひると出会った。

ある出会いと運命

基本的に俺が他人の名前を覚える事は無い。

角倉のような10年来の腐れ縁や、朝のような衝撃的な出会いをした相手や、黒木や白瀬さんのような日常的に会話する人ならば利便性から記憶するが。会話の予定も無いクラスメイトや、先生という単語一つで事足りる各教員の名前など、てんで憶えていない。

いや違うな。俺はまだ出会ってすらいないんだ。

ただ学校の一部、教室の備品、風景の一つという程度の認識でクラスメイト31人（角倉除く）を見てきたんだ。憶えるわけがない。

と、今更気付いた所でどうにもならないがな。

友達が欲しいわけでも無い。集団生活がしたいわけでも無い。

俺が朝や角倉と名前で呼び合っているのも何か強い力で仕方なくそうなっているんだと思う。

人が人が出会うという事はそれほどに衝撃的で運命的な事なんだろう。

でなきゃ誰かが悪戯に垂らした糸に絡まって踊っているだけだ。きつと。

最初に目についたのは燃え盛る炎だった。

錆ついたドラム缶の中で、大小不揃いの木材を燃やしながら火の粉が踊る。それだけならいい。自然法則的になんら問題は無い。ただ、それが学校の屋上と言うのが社会的に問題だ。

そしてそれを挟んで俺と向かい合っている少女もまた社会的に問題のある人間だ。それだけは分かる。

「・・・・・・・・」

体感時間にして5時間は経っただろうか。どうしようもない空気の中、俺も少女も額に汗を流しながら固まっていた。

見覚えのある少女だ。人の顔など憶えない俺であるが、特徴的な褐色の肌は見覚えがある。

今時珍しく膝が隠れる程の長さのままのスカートに、上は制服ではなく体操着のジャージを着ている。その制服はと言えば、少女の手の中で広げられて炎に炙られている。

「あ・あの……ごめんなさい」

先に口を開いたのは少女の方だった。とりあえず善悪の判断はできるらしい。

「いや、いきなり謝られても俺も困るんだけど」

「そう、ですよ……私、あの、制服をを乾かそうとして歩いてて……人の邪魔にならない所を探してたら、こっちの校舎に来てしま

って……。どうせなら太陽に近い所の方がいいかなと思って……。それで上に来たら、屋上の鍵が開いているのが偶然見えて。入ってみたら、よく燃えそうな木が転がって……。炎に当てたら早く乾くかと思って……。それで、あの、別に学校に放火しようとか思ってた。ただ制服が……」

要約すると制服を乾かしていたらしい。よく見たらスカートの方も一部水を被っている。何があったんだ？

「あの……」

「ヒッ」

こちらから話しかけたらビックリ肩を震わせて後ずさった。

「あ、ごめんなさい……」

申し訳なさそうに謝る。何今の？

「あ、私出て行きます……」

「いや、この炎をどうにかしてからにしてほしいんだけど」

「あっ……」

一転、今度はこの世の終わりのような顔で固まった。

「す、すみません……。今消します」

そう言つと素手でドラム缶を掴んだ。だめだろう。

「きゃっ」

予想通り悲鳴を上げて少女は手を離れた。そりゃ熱くなってるって、しかも手に持っていた制服は、炎の中にこそ落ちなかったものの、長年積った泥や何にもろに落ちて汚れてしまった。

「ああ……」

もはや人類最後の瞬間を迎えんばかりの悲壮な顔に、仕方なく俺は手を差し伸べた。

「ヒッ」

またしても悲鳴を上げて怯える少女。何か虐めてるみたいだ。

虐め……ああ、虐めか。

不意に少女の制服が濡れているわけに至り、溜息をつく。

他人と交わりたがらない俺からすれば、わざわざ嫌いな相手と接触を持つ虐めという行為自体が謎だ。無論したことも無いし、クラスの一員にすらなっていない俺は、された事すら無い。

故に俺は虐める側も虐められる側の気持ちも解らない。

だからこれは同情じゃない。何かの縁だ。

「ほら」

桁が4つ書かれた札を数枚少女に渡した。

「え」

何が起こったか分からない少女に、無造作にそれを握らせて俺は言った。

「校門出て右行った所のコンビニの裏にコインランドリーあるから。そこで洗ってきなさい」

「えっ？」

「こっちは俺が片付けとくから」

「えっ！」

「あ、もう二度と屋上来るなよ」

「えっ、ちょ、ちょっと待ってください」

雨水の溜まったバケツを掴む俺に少女が叫ぶが、俺は知った事じゃない。

「こ・こんな大金を借りるだなんて私……」

「貸したんじゃないよ。あげたんだよ。金有り余ってるし」

「もっといけません」

「寄付って事で」

「だめです。……明日、いえ、今週中に返します。あの……ありがとうございました」

貧乏なのかなこいつ？

そんな事を思う間に少女は行った。

珍しく良い行いをした。これで死んだら天国に行けるだろうか？
いや、無理だろうな。俺の罪はこの程度でチャラに出来る程軽い。
ない。

少女を再び見かけたのは授業中だった。

洗いたての制服を着て入ってきた彼女はどうかやらクラスメイトだったようだ。そういえばそうだったな。

授業中、暇だったので少女を見ていたが特に何も無かった。まあ、角倉がいるから堂々と虐めをする者もないだろう。ひよっとしたら少人数が偶にちよっかい出す程度なのかもしれない。

しかし、そう思った俺の考えは甘く、目を離れた間に少女の制服にはインクと思われる小さな染みがいくつか出来ていた。

もったいない事を。

「……なあ、角倉」

「ッ！」

何年振りだろうか？自分から話しかけるといふ偉業をやった俺に、10年来の腐れ縁は10000年ぶりに復活したミイラでも見るかのような目を向けた。

「何だよ」

「別に、驚いただけ。ゴメン」

「いいけどよ……。クラスにさ、肌黒い奴いるだろ？さっき遅れて入ってきた」

「ああ、小鉢さん」

何か複雑な顔をして角倉は少女の名前を言った。

「小鉢マヒルさん。どうせ名前憶えてないんでしょう」

よくわかってらっしゃる。

「私の見ていない所でいつも虐められてるの。気付いてる？見てら
んないったらありやしない」

「正義の味方も大変で」

「……………」

「何だよ」

人の顔を覗き込むように見てくる角倉に、後ずさりながら聞いた。

「おかしい、不自然、奇妙、異常、ありえない、非現実的。あんたが私に話しかけたばかりか女の子の事聞くだなんて」

「自分でもそう思う」

俺と小鉢マヒルはただ出会っただけだ。

俺にとっては出会うという事自体が凄い事だが、だからといってあいつを気にする理由にはならない。

「まさか、好きになったの？」

「それは無い」

屋上で炎焚く女なんか好きになってたまるか。

話を切り上げて帰ろうとするが、角倉に肩を掴まれた。

「友達になってあげて」

「はあ？」

「見たでしょう誰にも相手にされてないの。あんたなら一緒にハブられる心配なんてしないでしょ」

まあ、既に完全孤立状態だしな。

「話し相手だけでもいいから。よろしくね」

気持ちのいい笑顔でそう言うと、俺が返事をする前にそそくさと歩きだして去って行った。

しょうがなくねえ。何かむかつく。

しかし断る気は無い。やる気も無いが。

放っておいても向こうから来るのだから、どうするかはその時決めればいい。

出会いは縁、そこから先は運命だ。

ある訪問と女難

肉が千切れる音がした。

「ごめんなさい」

誰かが言った。

泣き続けた目は赤く腫れ、枯れ果てた声が空しく響く。

それでも、言い続けた。

「ごめんなさい」

鉄の匂いに吐瀉を吐く事も無く、その口からはただ懺悔の言葉だけが流れる。

「ごめんなさい」

数十分前まで人だったモノは、既に熱も無く。

蝇が集る肉塊となって尚かろうじて人の原型を保っているソレを、誰かがそつと地面に置いた。

祭壇に供物を捧げるように置かれたソレから目を離し、厚い雲で月も隠れた空に向かって言った。

「神様ごめんなさい」

夢はそこで覚めた。

酷い夢見だった。

蠅の集る音、血の匂い、枯れた声。B級ホラーの世界に生身で飛び込む日がこようとは思ひもしなかった。しかもこれが過去の出来事だというのだから恐ろしい。

相当狂った人間だったなあそれは。あんなのが平然と歩いていて、そんな人間がいる事を誰も知らないで生きている。平和は無知をさらしているって事か。

朝っぱらから何とも暗い事を考えている俺だったが、その思考は突然目の前に現れた朝によってさえぎられた。

「大丈夫ですかあ？汗びつしよりですよお」

「……………」

変だな、まだ夢でも見てるんだろうか。いや、そんなわけ無いな。よし、現実逃避はやめよう。

「とりあえず聞いとくが、どうして俺の家にいるんだ？」

「ヘヴンさんに死んでないか確認して来いって言われましたあ。この住所もヘヴンさんが調べてくれたんですよー」

実にいい笑顔で実に嫌な訪問の理由を言いやがった。

というか、こいつが出るたびに俺の夢見が悪くなっていると思うのは気のせいかな？

「俺は見てもの通り生きてる。出てけ」

「えーっせっかく晴れてるんだからお出かけしましょうよー。おつきい公園見つけたんですよ」

「一般人には学校つてもものがあるんだよ。お前も頑張つて殺人鬼探せ」

「むうう」

何をふくれっ面してるんだこいつは。何でそんな目で見るんだ。行かんぞ俺は。

「つーかホント出てけよ？俺帰るまでに出てつてろよ」

机に突っ伏しながら俺を見送る朝に念を押しながら、俺は早めの登校を始めた。

「小鉢さん家行くよ」

登校一番で寝入っていた俺の耳に、角倉の素敵な提案が届いた。寝たふりしたら殴られた。

「勘弁してくれよ。今日は俺、最悪の夢見の上に最悪の目覚めまで

しちまっただよ。つか何しに行くんだよ」

「小鉢さん今日休んでる」

「……………」

チラリとマヒルの席を見る。主無い机が寂しく佇んでいる。

普段虐められている少女が学校を休んですることと言ったら、自殺か引きこもりくらいしか浮かんでこない。あるいは角倉も同じ事を考えたのか。

「あんたも小鉢さんの友達なら心配でしょう」

「友達になった覚えはねえし、心配なんて欠片もしてねえよ。行くなら一人で行ってこい」

とか言ってみたら隣で騒いでいた男子数名が殴られた。

角倉がいるにもかかわらず、ゲームや雑誌を隠していなかったのは自業自得だから特に罪悪感はないが、

すまん。名も知らん誰か数名。

とりあえず心の中で謝っておいた。

「ああ、もうわかったよ。行きやいいんだろ行きや」

結局俺はマヒルの家へ行く事を承諾した。マヒルの家か……。親戚以外の家なんて幼稚園以来だな。

町の中心から外れた簡素な住宅街、自然に囲まれた一角に小鉢孤児院という名の建物はあった。

「あいつの家孤児院だったのか」

幼稚園児程の子供達が遊んでいるのを見ながら、俺と角倉は敷地へと入った。早く帰りたい。

「さつさとマヒル探そうぜ」

「名前で呼ぶんだ」

「……何だよ」

何か変な空気が俺と角倉の間に流れた。勘弁してくれ。

そんな俺を助けるかのように、タイミング良くマヒルが向こうから現れた。

「あ、いた」

「あ、唐木さん……。ひょっとして取り立てですか？お金は今用意している所ですから、あと少し待ってください……」

「誤解を生む発言はやめてくれ。後ろに危険なのがいるから」

「あ、角倉さんも……」

「こんにちわ」

何故だろう。笑顔なのに妙に圧迫感がある。

「学校休んだから心配して来たんだけど、どうしたの?」

「あ、すみません……。どうしてもお小遣……お手伝いをしないと
いけなくて」

今、お小遣いつて言おうとしたな。金稼ぐ為に休んだなこいつ。つ
か、俺のせい?

「へえ大変なんだ、家が孤児院やってるって」

「……あ、いえ、私は孤児の一人です。私に限らず、この孤児院に
預けられた子供はみんな、小鉢の名字をもらうんです」

「へ、へえ……」

一気に空気が悪くなった。もう厄日だな今日は完全に。

「あ、ごめんなさい……。せっかく来てもらったのに……ごめんな
さい」

「ううん、いいから。私こそごめんね」

「……あ、あの、場所を変えませんか?近くに公園があるんです」

「いいね、行こ行こ」

行きたくない。と、思う俺の気持ちなど無視して俺は首を引っ張られて連れて行かれた。

意外と広い公園だ。

ブランコや滑り台などの定番から何かグルグル回る変なやつなど様々な遊具があるが、ほとんど人がいない。穴場だな。

「いいところね」

「この公園……誰かと来たの初めてなんです。私、昔から容姿の事で仲間外れで……」

「そうなんだ」

ふわりと風が通った。帰らせると言える空気じゃ無いな。

「見た目で人を判断するなんて最低。クラスの連中には私が言い聞かせるから大丈夫」

お前の場合言うより殴る方が速いけどな。

「ありがとうございます。……でも、いいんです。私は、悪い子ですから」

「えっ？」

「……あつ、あの！よかつたら一緒に何かして遊んでくれませんか？一度大勢で遊んでみたかったんです」

「もちろん、三人で遊ぼ」

どンドン帰りが遅くなる事に何となく危機感を憶えるのは俺だけだろうか？

そんな俺を無視して何して遊ぶか相談し始める女二人。

「じゃ、かくれんぼをしましょう唐木さんが鬼です」

「勝手に帰ったら教室から突き落とすからね」

「へいへい」

本当にやりかねない為、渋々とうなずく。

さつさと終わらせて帰ろう。さすがにこれ以上は不幸も続かないだろう。

などという俺の甘い希望は、聞こえてきた声によって、ことごとく打ち崩された。

「ああ、涼夜さーん。奇遇ですねー」

紅い眼をした殺人鬼がそこにいた。

ある退場と中断

悪い事は重なるという。

運悪く倒れたドミノが前に後ろに連鎖して倒れるが如く自体が悪化していく様を言うそうだ。 違うか？まあいい。

この、地獄に慣れたと思ったら実は一丁目の角のすぐ手前までしか来て無かった事に気付いたかのような気持ちを言い表す言葉を俺は知らない。

まあ、知ってたからと言ってこの状況が良くなるわけでも無いのでどうでもいいが。

「何でデメーがいやがる」

額から大量に汗が流れ出るのを気にもせず、俺は朝に掴みかかった。

「最近よく来るんですよ。 広くてだいすきですー」

「そういう事が聞きたいんじゃないよ」

いつも通りの笑顔で返す朝にイラつく俺だったが、後ろからかかったマヒルの声で我に返った。

「……あの、唐木さんのお知り合いの方ですか？」

「知り合いじゃねえ」

「友達ですう」

「今会った」

「ずっと前から惹かれあってー」

「お前らも関わんな」

「ああ、良かったら友達になっててくださいー」

「仲が……よろしいんですね」

「……」

何をどう見たらそうなる？そしてお前は何故睨む角倉？

「あの、よかったら……一緒にかくれんぼ、しませんか？」

「はいー、朝かくれんぼ初めてですう」

もう嫌だ勘弁してほしい。 という俺の願望などお構い無しに、
ジャンケン（俺の負け）を経てかくれんぼは始まった。

「……で、何でお前は隠れないんだよ」

10数えて振り返ってみたら紅い眼があった。

「かくれんぼってどんな遊びですかあ？」

「先に言えよ。つか、何で参加したんだよ」

「楽しそうだったのー」

怒る気も失せるほど天真爛漫に笑う朝に、ハアと溜息をつく。

「一応言っとくけどよ。あいつら普通の一般人だから。物騒な事言ったり、したりして怖がらすなよ絶対」

「はい、わかりましたあ。涼夜さんの友達ですもんねー」

「……そういう事にしといてくれ」

どこまで本気で言っただろう。朝も、俺も。

角倉とマヒルの事をどう思っているのか自分でもわからない。考える気も無いのだから答えなど出ない。いや、既に出ているから考えずにいるのかもしれない。

あるいは、今の関係こそが答えか。

結局、いちいち教えんのも何かめんどくさかったので、俺達がやってる所を見学させて二回戦目から参加させた。気付けばかくれんぼももう七回戦目だ。

「楽しそうだな」

速攻で捕まりながらもニコニコと鬼（4回目）の俺の後を朝はついて来る。

「はいー、大勢で遊ぶのは初めてですう」

「大勢って…… 4人しかないぞ？」

首を傾げる俺に、いいえと朝は微笑む。

「二人以上は大勢ですう。だって、一人じゃ出来ないお喋りとか、じゃんけんとかが出来るんですよー。それは三人でも四人でも同じです。でも、一人じゃ絶対に出来ないんです。だから、一人は一人で、二人以上はみんな大勢って言うんですう」

「よくわからないんだけど。自分で考えたのかその理論」

「ヘヴンさんは教えてくれました。人は一人では個、二人以上で多。出会えば別れ、別れて会ったら久しぶり。殺さない事は生かす事、殺す事は救う事。他にもいっぱい教えてもらいましたー」

珍しく饒舌に喋った朝は、喋りすぎたのか深呼吸するように何度も深く息を吸い込んだ。

しかし静かになったのもつかの間、顔を上げて嬉しそうな顔を上げた。

「ああっ！マヒルさん見つけましたあ！」

見ると木の陰に隠れて様子をうかがっている褐色の影があった。

「目良いなお前」

「えへへえ。……あつ」

「ん？」

不意に声を上げた朝を見ると、携帯を見ながら残念そうな顔を浮かべていた。

「ううー、ヘヴンさんに呼び出されましたあ。5分以内にテレビ電話しないとお仕置きされますう」

「大変だな」

形だけ慰めるが内心は厄介事が減って安心している。よかったよかった。

「また今度遊んでくださいー」

「車に気を付けて帰れよ」

公園から出ていく朝を見送っていると、マヒルが後ろから顔を出した。何故か顔が曇っている。

「朝さん……帰っちゃったんですね。……私、何か気に障るような事をしたでしょうか？」

「いや、あいつの勝手な事情だ。気にすんな」

悲壮な顔をして落ち込むマヒルの肩を叩いてやる。

「何でも自分のせいにすんなよ。ネガティブに生きてたってしょう

がないだろう」

俺はポジティブな人間ではないがネガティブでもない。良くも悪くも考えず、一日が終わるのを待ちながら一分一秒ををこなすだけだ。

「すみません……。私、昔からこうなんです……」

気のせいかな、さっきよりも空気が重くなった。

「昔から何をやっても駄目で……人に迷惑ばかり掛けて……。全部私が悪い子だからなんです。こんな容姿なのも私が悪い子だから……捨てられたのも私が悪い子だから……」

「おちつけって。俺も昔から駄目な人間だったぞ。6歳くらいから」

「私が捨てられたのは4歳でした……」

やめて、聞きたくないんだけど。

「ほとんど憶えていませんが……私、不法滞在者の子供で……。戸籍も存在しなくて、身分証明も私を知っている人もいなくて……。それも全部、私が悪い子だから……」

「まてまて、何でも自分のせいにすんな。ほら、角倉探しに行こうぜ。あいつ放つとかれるとスネるぞ」

「はい……。すみません、いきなり変な事言いだして」

涙目で謝るマヒルを慰めつつ、一緒に角倉を探し始めた。

自分という存在について考えた事など無い。

自分のした事から逃げて何もしない生き方を選んだが、自分と言う存在を消したいとか、自分が許せないなどと思った事は無かった。無論、自分を正当化するような真似もしない。

朝起きた時も、夜眠る時も、昼に気を失う時も、当たり前のように俺は俺だったし。これからもそうあり続ける。

俺が許される事の無い悪人でも、俺は俺だ。

来週だろうが100年後だろうが、死ぬ時まで逃げて、避けて、隠れて、放ったらかして生きるだけだ。

マヒルに付き合うのもこれきりにしよう。

自殺しようが引きこもろうが俺だけのせいじゃない。仕方ないと言って逃げるだけ。それだけだ。

「……………何か言いましたか？」

不意にこっちを向いたマヒルに、いや、と応えて俺は歩き続けるが、マヒルは止まって耳をすませた。

「何か聞こえたんです……………」

俺の両親も、こいつの両親のように俺を捨てた。まあ、こっちは俺に明確な問題があったわけだが。養育義務を放棄した事に違いない。こいつも俺の事を嫌うんだろうか。それとも……。

「 アア！！！」

「あつ……」

「俺も聞こえた」

無駄に広いせいで聞き取りにくかったが、よく知っている奴の悲鳴が聞こえた。それと同時に俺の中で警鐘が鳴る。行けばとんでもない厄介事が俺を待っていると。

そんな俺をよそに、マヒルが声の方向へ走り出した。普段からは想像もできない速さだ。

しかし、そんなマヒルを見ても、俺の足は動かなかった。

頭の中でいつか見た夢がフラッシュバックする。およそ想像もできない何か人が殺し、懺悔するように死体を抱く光景。何を馬鹿なと思っても完全に否定できず、鉛のような足は動く事を拒否していた。

そんな俺の思考は、聞こえてきたサイレンの音で中断した。それと同時に、ゆっくりとだが足が前に進むようになった。

しょうがないんだ。あんなもの見たんだから。

心の中で無意味な言い訳をし、俺は悲鳴のした方向へ歩いた。

すぐに目に入ったものは、ごめんなさいと泣き続けるマヒルと蒼白になりながらもそれを抱きしめる角倉。そして、近づいて来るパトランプの赤よりも尚濃い紅……。

紅く染まった泥水の中に浮かぶ死体が一つ。そこにあった。

ある苦悩と苦痛

マヒルが落ちついたのを待ち、俺達は警察へと運ばれた。

もつとも、第一発見者は角倉では無いらしく、少し話を聞かれて親に連絡されただけですぐに解放となった。

ここに来たのはあの日以来二度目だ。

三人そろって大きな会議室へと通されたが、改装されたのか、中は記憶しているものとは違っていた。

紙コップに入ったお茶をすすりながら、ここに来るまでにあった一悶着を俺は思い出す。

俺がその場に着いた時、マヒルは壊れたカセットテープのようにゴメンナサイと繰り返していた。蒼白になりながら泣き続ける異様な怯え方に、警察も俺達もしばらく声をかけられなかった。

「……すみません。……私が、公園に行こうなんて……言わなければ。……ごめんなさい」

おちついたマヒルは、最後にそう言って頭を下げた。そのまま迎えに来た孤児院の職員に連れられて帰るのを、俺も角倉も何も言わずに見送った。

二人だけ取り残され、お互いにうつむいたままで角倉が口を開いた。

「ごめん」

「何でお前まで謝ってんだよ」

別に慰めているつもりは無い。本当に疑問に思ったから聞いたただけだ。

「無理やり連れてきたの私だし」

そんな事言い出したらきりがないだろう。断らずについてきた俺も悪い。悲鳴を聞いてすぐに動けなかった俺も悪い。

俺が遅れた時間は不自然なほど長かっただろうし、声一つかけずにここまで来たのだから、非難の一つ受けたって当然だ。男として最低というやつだろう。

「角倉」

重たく煮詰まったような心に吐き気を覚えながら、

「俺、マヒルともう関わらない。お前とも」

人として最低の言葉を口にした。

「・・・・・・・・」

角倉は、何も言わなかった。

またお互いに黙ったままの時間が流れる。今度は俺が先に口を開いた。

「俺も帰る」

「迎えに来てもらうまで待つ」

「来ねーよ。親もういないから」

「え？」

キョトンとする角倉を無視して俺は立ちあがった。これ以上一秒でもこいつといたくない。

しかしそんな俺の前でドアが開き、警官が一人部屋に入ってきた。

「唐木君にお姉さんのお迎えだよ」

「は？」

思わず馬鹿な声をあげてしまった。俺に姉はいないし、迎えに来る親もいない。親戚にインドア派のおっさんが一人いるだけだ。

首を傾げる俺の前に、見知った女性がフラリと現れた。

「迎えに来ました」

「なんだ白瀬さんか」

「不満ですか？」

「まさか」

一応俺も男なわけで、美人に迎えに来られれば嬉しい。隣で警官がチラチラと白瀬さんを見ているが、気にしないでおこう。

ああ、今日は色々あって疲れた。

「いやあ大変だったね涼夜君」

どつと疲れながら診療所に入った俺を、仕事などしていなかったかのようなだらけきった顔で黒木は出迎えた。やべえ殺意湧くわ。

「忙しいから白瀬さんよこしたんじゃねーのかよ」

「うん、今終わった所だよ。あ、白瀬君コーヒー」

マグカップ片手にぬけぬけと言い放つ黒木を睨みながらも、怒る気力すら空っぽの為、何も言わずに俺は座った。動く気力まで空のようだ。

何も会話が無いまま時間だけが流れた。

夕食を作ってくれた白瀬さんも帰り、うつすら眠気が襲ってきた頃、

「……………なあ」

「うん？」

「自分の死ぬ日が分かったらどうする？」

何を思ってたのか自分でもよく分からない。

前々から思っていた事なのか、不意に思いついた事なのか。ぼんやりした意識の中で俺は聞いた。

「ふむ、なかなか興味深い事を言うね。自分の死期……それを悟った人間が何をするのか」

何とも不気味な笑顔を浮かべる黒木。

「しかしいきなりどうしたんだい。まさか、自分の死期を悟ったとでも？」

「悟ったつつーか、聞いたんだよ」

「誰にだい？」

「誰でも……」

紅い眼と黒い髪、特徴のある話し方をする少女。

「……」

公園で死んでいた男を殺したのは誰だ？

連続殺人の新たな犠牲者と決めつけていいのか？

一番に疑うべきはあいつだろうに。

「俺には関係ない」

そうつぶやいて、俺の意識は落ちた。願わくば、夢の無い眠りを。

夢を見た。

いつもの教室で誰かが泣いている。見覚えのある少女だ。黒髪に褐色の肌　マヒルだ。

また誰かにいじめられたのか、汚れた教科書を拭きながら泣いている。

「大丈夫？」

不意に声がかかった。これも聞きおぼえがある声だ。見ると予想通り角倉が現れた。

「酷いね。やった奴殴つとくからもう泣かないで」

二人以外に人影は無い。別の教室へ移動しているのだろうか？いや、一人いた。

「だ、大丈夫です。あの、すみません」

「何で謝るの小鉢さん」

「すみません。でも、私に話しかけたら……角倉さんまで」

「気にしないで。大丈夫だから。駄目だよ一人でいたら。あいつみ

たいになるから」

そう言つて無人の教室で馬鹿面下げて寝入っている男子生徒を指さした。俺である。

全く記憶にないが、俺の知らない間にこんな事があつたようだ。

「唐木さん、いつも寝ていますね。誰とも話さないで」

「昔はこんなじゃ無かつただけどね……。小学校の時に突然何日も学校を休んで、やっと登校してきたと思つたらこんな風になつてたんだ。中学入ってから授業中に寝るペースが増えるし」

いつの間にか俺の話題で話すようになっていた。やめてくれ恥ずかしい。

「まあ、涼夜もきつと根は変わつて無いんだと思うんだ」

！

何気なく言つたのであろう角倉の一言が俺の頭に妙に届いた。

「何て言つかさ、臆病になつてるんだよきつと」

聞きたくないと思うが、いつも通り何も出来ない。

「自分のせいで誰かが傷ついた事があつて、それを繰り返すのが怖くて人と関わらないんじゃないかな。それさえ乗り越えればまた元に戻れると思う」

やめてくれと叫ぶが、すべて無意味だ。声が届かなくなるわけじゃない。夢が終わるわけじゃない。

「涼夜だってあの頃に戻りたいと思ってる」

何度否定の声を上げようと変わらない。

「毎日高校へ来てる事が何よりの証拠だよ。こいつも自分を変えた
いんだきつと」

違う。

違う。違う。

違う。違う。違う。

違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。
違う。違う。違う。

違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。
違う。違う。違う。違う。違う。

違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。
違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。
。

どれほど叫び続けたのか、どれほど泣き続けたのか、

気付いた時には夢から覚めた後だった。

ある終結と逃避

目覚めたのは陽が昇り始めた早朝だった。

「やあ、おはよう涼夜君」

覗きこんできた黒木に反応する事もせず、俺は黙って体を起こした。夢の余韻だろうか。何時間も泣き続け叫び続けたような疲労感がする。寝汗もひどい。

「……黒木」

「うん？」

「俺……このまちを出る」

「そうか、残念だなあ」

いつも通りの胡散臭い顔ではなく、本当に残念そうな目をしながら黒木は言った。

案外予想していたのだろうか？

「君の保護者になってもう四年近く……長いようで短かったなあ」

「止める気は無いんだな」

「もちろん」

そう言った黒木の顔はいつものム力つく笑顔だった。

「ところで涼夜君」

「ん？」

「もしも未来がわかったら君ならどうするかね？」

帰ろうと立った俺に黒木は聞いた。

「どうもしねーよ」

未来だろうと過去だろうと、知った所で何がどうなる事もない。一度は死期を伸ばしたが、それで良かったかどうかは未だにわからない。

例え未来のすべてを知ろうが進める未来はただ一つ。例え最善だけを選んだとしても、完全に満足できるかどうかは人によるだろう。いや、むしろ知れば知るほど不満を持ち始めるだろう。

「つか何だよいきなり」

「いや、最後にいろいろアンケートでもとっておこうかと思ってね。百問ほどいいかい？」

「帰る」

残念そうな黒木の声を見殺して薄暗い早朝の町へと出た。

夏が近いとはいえまだ肌寒い。

人がいないのは好都合だ。今は誰の顔も見たくないし、声も聞きたくない。

早朝の町は異様なまでに静かだった。

静まり返った町は車の音一つ無く、ジョギングする老人も犬の散歩をさせる主婦の姿も無い。

今の俺には嬉しい事だが、何か胸に靄を感じる。

風さえも死に絶えて音も熱も消えた世界。

こんな世界を何処かで見たことがある？

5分歩いた。

10分歩いた。

誰とも出会わない。

自分の靴の音が妙に乾いて響く。

何故誰もいないのか。何故何も感じないのか。

終わりの無い思考の海に潜ろうとしていた俺の意識は次の瞬間人の気配を感じ、ゆっくりと覚醒した。

男がいた。

何の変哲もないスーツを着た男だ。鞆とゴミ袋を両手で持って、早朝出勤にでも行くような。

音が聞こえた。

俺の心臓の音だ。ドクドクと早鐘のように高鳴って俺の耳に届いた。聞いた事のある音、警鐘だ。

それを理解し、俺は思い出した。

得体のしれない何かが人を殺す光景。現実から切り離されたような世界。ここはあの夢と同じだ。

気がつくと男との距離がすぐ近くに迫っている。

熱を感じた。

男の持つゴミ袋、黒いビニールの内側にある何かから感じる。

ポタリとゴミ袋から何かが垂れた。紅い何かが点々と道を作る。

完全に覚醒した意識の中で、俺は感じた。

鉄と、肉と、死の匂い。

男との距離がゼロになった。

ズプツ　　という布が切れる音が聞こえ、男の体が地面に倒れた。

「大丈夫ですかあ」

何とも場違いな声が届いた。

「朝……」

「はいーお久しぶりですう」

自分が刺した男の事など覚えてないとばかりにニコニコと俺に微笑む朝。さすが殺人鬼歴10年だ。

自然体の朝とは反対に俺はまだ放心状態で立っている心地すらしない。

そんな俺の前に、倒れていた男がゆっくりと立ちあがった。浅く刺さっていたナイフを引き抜き、ナイフと朝を交互に見比べる。

「驚いたな。僕みたいな人間が他にいたなんて」

浅いとはいえ刃物を突き刺されたというのに痛がるそぶりすら無い。それどころか子供のように目を輝かせている。

その不気味さに鳥肌がたつが、心のどこかで黒木に似ているなと余計な事を考えてしまう。そんな俺をよそに、朝と男は笑顔で言葉を交わす。

「突然お聞きしますけどー、その袋の中身はどなたですかあ？」

「ああ、これ？妻だよマイワイフ。五月蠅かったからついバラバラにしちゃったんだ」

「うるさかった……それだけですか？」

不意に、朝の笑顔が陰った。柔和だった目に若干の憂いが灯った。

「本当にそれだけですか？ 殺すように頼まれたとか、貴方を殺そうとしたとか、自分の子供を殺そうとしたとか、理由もなく誰かを殺そうとしたりとか、突然こわれて人を殺し始めたとか、昔たくさん人を殺していたからとか、虫は殺さないのに人を殺し始めたとか……。何か理由は無かったんですか？」

「えっ、無いよ」

普段から想像も出来ない早口で出た朝の問いは即座に否定された。

「よくある言い争いだよ。僕が人殺しだって気付いたら警察を呼ぶって叫ぶんだ。しかたないだろ？」

何とも自分勝手な理由で人を殺したものだ。

だが、そんな事よりも俺は男が最後に言った言葉の方が気になった。

しかたない。

この10年間毎日のように心の中で唱え続けてきた言葉。俺のささやかな逃避。

俺もこの男のように自分勝手に罪から逃げてきたのだろうか？

などと場を忘れて考え込んでいる間に、二人の闘いは始まっていた。

「残念ですう。理由があつて殺したのなら、友達になれたのにー」

「理由ならさつき言つたじゃないか。友達がだめなら死体になつてくれよ」

朝は男を刺したナイフとは別のナイフを両手で持ち、男は朝のナイフが玩具に見えるような巨大な鉈を片手で振り回している。

男女差と体格差がもろに出ているが、二人ともまだ傷らしい傷は負わずに牽制し合っている。が、それもわずかな間だった。

体力が無くなつたのか動きが遅くなり、言葉を発する事もなる。

ああ、終わるんだ。と何となく思った。

わけのわからないまま始まつた非日常が結局わけのわからないまま終わる。

誰にも気づかれずにまちは平和になり、朝は俺の前から消える。もつとも、すぐに俺も町から消えるから関係ないが。

そんな事を考える俺の前で、男が朝に向かって踏み込んだ。しかし大振り過ぎた一撃は50センチ近くも目標を外して空を切る。

今度は音も無く、伸びきつた男の腹にナイフが刺さった。

朝を下敷きにしながら男が倒れる。

終わった。そう思う俺だったが、朝はそれだけでは終わらなかった。
突き刺さったナイフを引き抜き、別の場所に刺した。

刺す、抜く、刺す、抜く、刺す、抜く、刺す。

男に押し倒された状態のまま、引き抜き突き刺しを繰り返し、ナイフが刺さらなくなると今度は男が持っていたナイフで刺した。

「……もう死んだんじゃないか？」

「ああ、そうですねえ。……すいませーん、重いので手を貸してもらっていいですかあ」

そう言った朝の顔が遠い日に見た朝の笑顔とかぶった。

「あうう、疲れましたー」

ベットを見つけた朝は一番に飛び込んだ。

「ばか、血で汚れたじゃねーか」

「ああ、すみませんー」

あの後、ヘヴンに連絡を入れた朝を連れ、以前とは違うラブホテルに俺は入った。

「とりあえず体洗ってこい。匂いで気分が悪くなる」

「むう、女の子にそんな事言っちゃだめですよ」

「半身血まみれの奴を女の子なんて思わねーよ俺は」

ここまで人に見られずにこれた事が奇跡だと思う。見られたらもなく新たな都市伝説が誕生するところだ。

羞恥心も無く真っ赤に染まった服を脱ぎ始める朝から顔を背けながら、ふと思った。

「ん、まてよ。体は洗うとして服はどうする？」

「あつそれならヘヴンさんが用意してくれてますよ。涼夜さんの分もお」

脱衣所からビニールに入った新品の衣類を持って朝が出る。本当に羞恥心てものが無いな。

渡された衣類を受け取り、朝に掴まれたせいで血がついた服と着替える。

しかし不思議だなと思う。

何で俺はこいつに対して自然に接しているんだろう。何故世話を焼くような真似をしているんだろう。

何かの縁　という奴だろうか？

全てが嫌になってこのまちから逃げる俺に最後に残った他人との縁。それが朝？

そう思うと恐ろしくなった。

もともと関わってはいらないものだったはずだ。あいつのせいで俺の人生は歪み狂った。

そして全てを捨てたいともかく俺を尚も放さない10年前に結ばれた縁。これからも俺に絡み締め付けるのだろうか。

「涼夜さんもお、シャワー浴びませんかぁー？」

ドア越しに届いた朝の声に応える事無く、俺は部屋を出た。

どう帰ったかは憶えていない。

気付いたら自分の部屋で眠っていた。

すべて夢だったらよかったのに。

ある本音と本当

珍しく何の夢も見なかった。

昼も終わる頃だ。寝汗が気持ち悪くて二度寝する気になれない。

今家を出ればちょうど下校時間と重なるので退学届をもらいに行く事にした。黒木に任せたりしたらふざけて失踪扱いにされかねない。

二人は登校してきているだろうか？

そんな事を考えて首を振る。俺にはもう関係ない。

人が本当の意味で誰かと別れるのはどれほどかかるだろう。

物を捨て、家を出て、町を移し、思い出を忘れ、記憶を封印し、何事も無く生活を送るのにどれほどかかるだろうか。そこまでしても何かの拍子に思い出す事を止める事が出来るだろうか。

ここ数日で起きた出来事を俺は忘れる事が出来るだろうか。

10年前の出来事を鮮明に憶えている俺が。

この罪から逃げ切れる日が、来るのだろうか。

驚くほど簡単に退学届はもらえた。

元々問題児の一人にカウントされていたのか、保護者も許可してくれていると言ったらすぐに出した。

保護者の署名と印が必要なので黒木の所に寄らなければならない。
何か嫌だ。

そんな事を考えていると、向かいからフラフラと歩いて来る女子生徒が目についた。遠目で分かる褐色の肌でマヒルだとすぐにわかる。何か探しているのか、しきりに辺りを見回している。

顔を合わせたくない。

回れ右して遠回りするのも癪なので近くにあった男子トイレに入っ
た。

先客が二人いた。窓のそばで何か話している。

その男子に見覚えは無かったが、その手に持つスポーツバックが気になった。学校指定の女子用スポーツバック。男子が持つには不自然だが、特別目に行くほどのものではない。

では何故そんな物に目が行ったのか、少し考えて思い至った。

汚れすぎている。いや、汚されすぎているのか。いつだったか屋上で見たマヒルのバックと重なった。

まあ俺は関係ないが。

そう思いつつ、男子二人を目から離さない。

「ごめんなさい」。そう言って泣くマヒルの声が不意に再生された。

いつそ考え方を変えてみるか。明日にはこの学校の生徒じゃ無くなるといふ事は、暴力事件を起こそうが問題無い。まあ、俺に暴力なんて出来る筈がないが。

そんな事を考える俺に気付かず二人組は話し続ける。

「やつぱこれ見つかったらやばくね？変態じゃん」

じゃあやんなよ。と、おもわず内心でツッコミをいれる。

「堂々としてれば大丈夫だって。メンドクセーけど」

面倒ならやめて帰れ。

「しかし汚いな。お前持てよ」

「やだよ。あ、もういつそこの窓から捨てようぜ」

気付いたら前に出ていた。

バックを捨てようと窓を開けた男子が俺に気付いて動きを止める。

近くで見るとバックに小鉢マヒルと書かれた小さなタグが付いていた。案外よく捨てられているのかもしれない。

「それ女子のだよな。いるんだな今時そんな男子」

見下すような視線を送ると、片方の男子が顔を赤くしながら「違いよ」と反論した。

しかし大声を上げたのが恥ずかしかったのか、更に真っ赤になりながら黙りこむ。それに代わってもう片方の男子が口を開いた。

「小鉢のだよソレ。お前もうちのクラスなら分かんדר」

同じクラスだったらしい。しかし分かつとはどういう意味だ？

「俺達だって別にやりたくてやったわけじゃねーんだよ。やんねーと部室にテレビ持ち込んでるのチクるって言われてな」

「知らねーよ」

「そう言つなよ。お前だってあいつ怖いだろ」

「あいつって誰だよ」

そう聞いた俺に、男子二人が驚いて顔を見合わせた。

丸々10秒が経った所で二人が俺に向き直った。困惑する俺に、二人が同時に言う。

「角倉だよ」

「は？」

蔑んでいた目を見開き、ポカンと口を開けた馬鹿面で俺は聞き返した。

「だから角倉だよ。角倉夕月」

「本当に知らなかったのか？あいつだぜ小鉢虐めるよう言いだしたの」

逆に驚いた顔で言う男子の声は耳を素通りした。

どれほど呆けていたのか。気付けば男子二人の姿は無く、窓の外に投げ捨てられたバックがあった。

しばらく探したが校内にマヒルの姿は無く、バックを持ったまま家に帰った。

帰って来てからどれほど経ったか。俺は寝転がったまま天井を見ていた。

正義感が強くて、世話焼きで、すぐに手が出る女。俺のわかる範囲の角倉夕月の限界。

知ろつとした事は一度も無く、むしろ一番に避けていたのがこいつかもしれない。それ以上を知りたくないと思って。

不意にインターホンが鳴った。

無視して寝ていると覗きこむ顔があった。

「寝るな」

「いいだろ学校じゃないんだから」

角倉がそこにいた。

「学校辞めるんだって」

「何で知ってんだよ」

「先生」

「この住所」

「先生」

そういえばこいつ教師陣に人気があつたな。優遇とかされてるんだろうか。

そのままとりとめのない話をした。もつとも角倉が一方的に話を振ってきたのに俺が応えるだけだったが。引き籠りが社会復帰を勧められているみたいだ。

俺を考え直させたいのか、最後に積る話でもしに来たのか、俺にはどちらも苦痛だ。追い返すのは簡単だが、その前に一つ確認しておきたい事がある。

「お前さ、マヒルの事どう思ってたんだ」

何の脈絡も無く俺は切り出した。

いきなり何を言われたのか分からない様子の角倉だったが、不意に何かに思い至ったのか、少し考え込んで答えた。

「嫌い」

考えただけで迷う素振りは無かった。

「じゃ何であんなにかまってるんだ？」

「待ってる」

「何を？」

「感謝されるのを」

素っ気なく出された言葉に面食らう俺に、角倉は続けた。

「私がどれだけ助けても優しくしてもゴメンナサイって謝ってばかりでアリガトウって言わないの。昨日初めて聞いたけど、あれはあんたと一緒だったからノーカン」

「それだけか」

「それだけ」

きっぱりと言い切る角倉に俺は何も言えなかった。

行動に見返りを求めるのは当然だろう。完全に善意で動く人間など

そういない。こいつはそつち側の人間だと思っていたのは俺の思い込みだったらしい。

しかし感謝の言葉一つでそこまでやるか普通。

そんな事を思う俺に角倉が聞いた。

「私が角倉さん以外の言葉で呼ばれたの聞いた事ある？」

無い。少なくとも俺の知る限りは、同級生、下級生、上級生、教員も全員そう呼ぶ。

「ずっとそう。カドクラサンが私の名前で、名称で、愛称で、呼称で、通称で、俗称で、役職で、階級だった。気付いた時にはそこから動けなくなってた」

何処を見ているのか分からない遠い目で話す角倉を黙って俺は見ていた。同情はしない。

俺はこいつの価値観がどういうものなのかわからない。どう理解してやればいいのかわからない。理解など角倉は求めていないのかもしれない。

そう思う俺だったが、次の角倉の言葉で思考は中断した。

「だから感謝の言葉くらい欲しいと思う。仕方ないよね」

仕方ない。 お前もそう言うのか。

同情しよう。

お前に同情しよう。お前も俺と同じだ。

今朝死んだ男にも同情しよう。あいつも俺と同じだ。

勝手な言い訳で自分を正当化しながら罪など無いと言い張って生きている。何て馬鹿で恥知らずで愚かなんだろう。

ひょっとして分かっていたのか角倉？俺がお前と同じだと。だからちよっかいをかけてきたのか？

「ねえ」

不意に角倉が俺の目を見据えた。

「夕月って呼んでみて」

その言葉で理解した。こいつが毎日俺にかまう訳を。呼ばれたかったんだ。角倉夕月と。

呪いのようにカドクラサンと呼び続けられる事に恐れ、唯一夕月と呼ぶ可能性の残っている俺に最後の望みをかけたんだ。

いったいいつからだろう。中学、小学　あるいは10年前から？

あの時既に俺意外に夕月と呼ぶ人間はいなかった？

「呼んでみて」

再びかけられた言葉で俺は思考を止めた。言うのは簡単だ。たった一言　ユヅキ。

「あいつを虐めたの怒ってるの？」

「いや」

「関わらないって言った癖に」

「関係ねえ」

「まあいいけど」

顔を背けたままの俺の後ろで角倉は立ち上がった。靴を履く音が聞こえる。

「あいつだって普通じゃないよ？昨日あんなに精神不安定で泣いたのに今日普通に学校来てたし」

そう言い残して角倉は出て行った。

ある白と黒

何もせずにいる事が息苦しく思った。

動いていた方が楽だと思い、退学届を持って家を出た。

気付けば陽は沈んでいた。

町は人気も無く街灯の灯が寂しく照し、遠くには街のネオンが活気を映すように鮮やかに輝いている。

同じまちでありながら駅一つ挟んだだけで何故こうも違うのかと考えた事もあるが、今はそうあって当然だと思う。

国と国、街と町、家と家、人と人、果ては一人の人間の中でさえ見えない壁に区切られた存在すらあるのだ。

同じ場所でも見る人間によって違いが分かれ区切りが出来る。落ちつく所に落ちつく者もいれば無遠慮に横断を続ける者もいる。人もまた分けられ比べられて選別されていく。そうやって産まれたのがエデンなのだろう。

例えばどれほど見知って見慣れた光景でも、見ているだけではそこがどんな所なのか完全には分からない。見ただけで理解している人間には尚更だろう。

俺は分かった気でいたのだろうか？

関係無いどうでもいいと目を背けていたのは、自分の周りの事を分

かった気になった上での言葉だったのか？

俺は何処まで馬鹿だったのだろうか？

まだ電気がついているのを確認して俺は診療所の中に入った。

黒木の性格故にここの診療時間は短い。しかも気分で早く閉める事があるから性質が悪い。

この診療所に来る人間は5割が白瀬さん目的の男共、3割が黒木目的のマダム、残り2割は白瀬さんの淹れる本格派コーヒーが好きな人達だ。半分以上白瀬さんで成り立っているから凄い。あの人がいなくなったら1月もたずに潰れるんじゃないだろうか？いや潰れるだろう。

何故あれほどの人が黒木なんかの診療所で働いているのか本当に謎だ。黒木が警察沙汰になるような事をやってない事だけを願う。

などと考えながら待合室を抜けて診察室へ入った。

妙だ。

いつもなら談笑する声か最低でも機械が動く音か何かが聞こえる筈だが、今は人がいないように静まり返っている。

静かだ。スリッパが床をする音が異様に響く。

奥にある部屋のドアを開けて入った。誰もいない。そう思って出よ

うとしてそれを見つけた。

黒木がいた。

だがいつものあいつとは違っていた。

音が無かった。声が無かった。熱が無かった。色が無かった。力が無かった。動きが無かった。精気が無かった。血の気が無かった。表情が無かった。中身が無かった。心が無かった。意思が無かった。打ち捨てられ、無造作に転がされ、何もかも抜け落ちて抜け殻になった。いや、亡骸になった黒木がそこにあった。

1分、10分、どれほど経ったか分からない程それを見つめ続け、後ろから来る人間に気付けなかった。

「涼夜君いらしていたんですか」

「……白瀬さん？」

振り返ると見知った人がいた。私服姿で少し驚いた顔をしている。あくまで、少し。

「すみません今片付けます」

そう言つて彼氏を部屋に呼んだ女性の様に慌ててゴミ袋を広げて拾い入れた。黒木を。

目の前の状況が全く理解できない俺の前で、いっぱいに膨らんだ大型のゴミ袋を縛り上げて白瀬さんは立ち上がった。こちらを向き、

何かを思い出したような顔をしてペコリと頭を下げた。

「本日午前8時をもって今回の心理実験の終了を決定いたしました。3年間実験にご協力いただきありがとうございます」

「は、はあ？」

何を言われているのか分からず、何を言っているかわからず、言葉にもならない声だけが漏れた。

「今回行いました夢による現実の浸食における反応実験は本来なら5年かけて行う予定でしたが、あなたの精神状態及び思考は常人のもの比べて異常と判断し、実験の中止を決定いたしました」

「ちょ」

事務的に淡々と語る白瀬さんに、俺はようやく声を上げた。

「ちょっと……待って、ください」

「はい」

「……どういう事か？」

「何がでしょうか？実験の詳しい内容に関しては非公開の為教える事が出来ませんが、言える範囲でよろしければお教えします。簡単に言えば夢で見た内容が現実で起きた時にそれをどう捉えどう行動するのかの観察です。夢で見た事を体験したと思いきませ、また起きた事を夢で見た事があると思いつまさせる等の方法をとらせていただきます」

「・・・・・・・・」

「安心してください。あなたが服用した薬品はあくまで睡眠を促すもので、記憶の改ざん等は全て暗示によるもので身体に影響はありません」

「・・・・・・・・」

「それともこれの事ですか？あなたが黒木深夜だと思っていたのはあなたを観察する為に私が用意した赤の他人です。お気になさらないでください」

他にありませんか？と聞く白瀬さんに俺は何も言えなかった。そんな俺を見て不意に近づき、持っていた退学届を掴んだ。

「退学届ですか。少々お待ちください」

スラスラとペンを走らせて俺に返す。黒木深夜とそこには書かれていた。

「改めて自己紹介いたしますが、黒木深夜くろき みやと申します。ご存知の通りあなたの母方の親戚です。偽っていたのは同性の方が会話がしやすく親密になりやすいと思ったからです」

「そうか、残念だなあ」

不意に今朝の黒木の言葉を思い出した。あの言葉にはどんな意味があったのだろうか？

いや、そんな事を考えるよりも一つ聞きたい事が出来た。

「……俺の」

「はい？」

「俺の両親が出て行ったのは」

「そこは不干涉です。あなたの事を知ったのは役場から連絡を受けてからです」

納得した。信じる信じない以前に受け入れていた事だ。やっぱり捨てられたんだな俺は。

他に何かありますか？と聞く白瀬 いや、黒木さんに俺は何も言えず。そんな俺を見て黒木さんは改めて頭を下げた。

「それでは私は引越しの準備がありますのでこれで失礼します。この建物は引き払う予定なので私物は持ち帰るようにしてください。一週間はアフターケアを受け付けますので何かございましたらこちらのマンションまでどうぞ」

住所と電話番号が書かれたメモを手渡して黒木さんは出て行った。

今日は酷い日だ。この人といい、角倉といい、知りたくも無い事が次から次へと明らかになる。

ゆっくりと椅子に腰かけた。足元には黒木（偽）の死体が残っている。まあ、女の細腕で持っていくのは無理だからな。

そんな事を思っている間に眠くなってきたしまった。

朝もあの人の仕込みなんだろうか？

あいつと会うのは夢で分かっていた事だし10年前に出会った殺人鬼と偶然再会するなんてありえない。まあ、どのみち二度と会わないからどうでもいい事だが。

目を閉じた。

どうしようもなく眠りたかった。

目も耳も塞いで誰の手も届かない場所へ行きたかった。

そう思っのはしょうがない事だろう。

ある感謝と謝罪

目が覚めたのは昼過ぎだった。丸半日以上寝ていたらしい。

腹が減っていたので冷蔵庫を漁って食事を済ませた。

足元には黒木（innゴミ袋）が残っているが腐敗臭の様なものはせず、食事が不味くなる事は無かった。

コーヒーを入れて時計を見るとちょうど6限目が始まった所だ。

ここへ来て3年余り。

自分勝手に気分やかな黒木に振り回され、物静かなのに意外と行動派な白瀬さんに驚かされ、そんな二人にいいように使われもした。

正月にこたつ持参で押し掛けられ。雛祭りには白瀬さんが自腹で買った雛壇を飾り。夏には得体の知れない熱中症防止薬を飲まされ。秋になっても扇風機をしまいたがらない黒木を白瀬さんと説教し。冬眠かと思う様な長時間睡眠をして心配された事もあった。

両親がいなくなり家族がどうあるものなのか忘れた俺には分からないが、きっとこういうものの事を言うのだろう。

愉快で、物騒で、楽しくて、騒がしくて、当たり前で、何気なくて、急に思い出しては百面相したくなるような思い出。悪くは無かった。が、終わった。

白瀬さん 本当は黒木さんだった は出て行き、黒木（本名不

明）は足元で死んでいる。

結局両親と同じようにこの二人も気付いたら遠くへ行ってしまうていた。

俺が悪かったのだろうか？

俺が普通の精神で白瀬さんの望む反応を示していれば後2年は今までの関係が続いたのだろうか？

考えた所で意味は無い。

思考を止めて時計を見ると下校の始まる時間だった。

「ここ来んのもこれで最後だ」

黒木に、あるいは建物、もしくはそこにある思い出に対しておれは言った。

「良かった。それだけは言える。行ってきます」

3年間通った場所を俺は後にした。

下校中の少年少女達とすれ違いながら俺は学校へ向かった。

学生でいるのも今日で最後だ。もう学校の様な不特定多数の人間が集まる場所に行く気は無い。

逆に人間不信にならなかった事が凄い。

途中でATMによって残高を見ると7ケタの入金がされていた。故障じゃないなら相手はあの人だろう。これだけあれば当分生活には困らない。

「え、ホントに持ってきたの？」

コーヒー片手に何とも可愛い表情で聞き返された。どうやら俺の悪ふざけだと思っていたらしい。

ポカン顔の先生に俺は退学届を渡す。

「ああ、うーん、ちゃんと書いてあるね。……マジかこいつ」

最後に小声で言ったのは聞かなかった事にしよう。

手に持った退学届を隅から隅まで眺め、しばらく固まった後にこっちに向き直って口を開いた。

「あのね、先生思うんだけど思いつきでこついうのよくないと思うの」

「思いつきじゃありません。前から考えて保護者納得済みです」

保護者もついないが。

「でも困るんじゃないかな？高校中退って世間の目が冷たくなるよ」
ズイツと身を乗り出し、何が何でも説得しようと試みる先生。

受け持つクラスの生徒が退学すると経歴に傷が付いたりするのだろうか。あるいは、善意か。

「生徒が悩んで出した答えなんだからさっさと受け取ってください」

「うーん」

頭を押さえながらしばらく唸った後、しょうがないとばかりに溜息を吐いて椅子に深くかけなおした。

「じゃ、こうしよう。明日明後日の土日の間にもう一度良く考えて考え直す気になったら取りに来て。これは先生が一時的に預かるから」

そこが最大の譲歩らしい。まあ、別にいいか。

しかたなくそれで了承し、しつこく渡してきたメアドと電話番号を受け取って俺は職員室を出た。

私物を取りに教室へ向かうと角倉とでくわした。

「今日は来てない」

聞いてもいないのに唐突に言われた。

そういえばマヒルのバックがまだ家だ。帰って持っていくか。

「……………」

「何だよ」

「別に」

不機嫌な角倉を気にしながら俺は荷物を持って教室を出た。

夕日が空を朱く染め始めた。

数日前に凄惨な事件があったばかりなせいか、その公園に人の姿は無かった。もっとも完全にではなく、横に広い性質故に通り道に使う人間はいるが、皆一様に早足に通り過ぎていく。

かくいう俺もその一人だ。

以前来た時は角倉の案内のおかげでスムーズに来れたのだが、半分の覚えの俺は見事に迷走。無駄に目立つこの広い公園を目印にやっと知った道に出た所だ。

公園を出れば孤児院はすぐそこにある。

そう思っていた。現にあった。当たり前、当然に。

だが忘れていた。当たり前だったものが俺の知らない間にぶっ壊れて何処かへ行く事が当たり前になっている事に。

思い出したのはマヒルと初めて会った時の事。

濡れた服を乾かす為にあいつは屋上で焚火を焚いていた。今思った

けどどうやって火を起こしたんだろう。

誰か教えてほしい。

今、目の前で燃えている孤児院に火を付けたのはどこのどいつだ？

夕焼けよりも赤く、天を焦がさんばかりに燃える炎。消防車が何台も集まって放水しているが、勢いが弱まる様子は無い。

その光景を子供たちが一団になって見ている。その中にマヒルの姿は無い。職員の姿もだ。病院に運ばれたのだろうか。

不意に風向きが変わった。

距離がある為煙が来る事は無かったが、風に交じって物が烧ける匂いが届いた。木、土、金属、ゴム、布、紙、プラスチック、硝子、生物。

「うえっ」

吐き気がするのを押さえながら俺は今来た道を戻り始めた。

嫌な汗が流れた。鼻に入る匂いが気分を悪くし、耳に届くサイレンの音がそれに拍車をかける。

誰かが歩いて来るのが見えた。

野次馬の一人かと思ったが違った。見覚えのある褐色の肌と制服の少女。俺を見て驚いた顔で口を開いた。

「だ、大丈夫ですか唐木さん？あの……とても気分が悪そうですよ」
そう言っただけにのばされた手を俺は避けた。

そのまま後ずさりしてマヒルから離れる。そんな俺を見て、その目に映っている自分を見て、ようやく気付いた。

自分の体が紅く汚れている事に。

夕焼けの朱よりも炎の赤よりもなお濃い紅に。

「あ、ごめんなさい……。服、汚してしまう所でした……」

申し訳なさそうにマヒルは頭を下げた。

「それ、血」

「はい……孤児院の先生の血です。すみません嫌なものを見せてしまっ……」

吐き気がする。こいつの声が、態度が、行動が、体に付いた血の匂いが腹の中を痛めつける。

たまらなくなつて吐いた。

吐瀉物が足にかかるのも気にせず俺は吐いた。出してすぐに深く息を吸う。吸う、吐く、吸う、吐く。

少しだが楽になった。

そう感じ、俺は走り出した。

朝から逃げた時と同じだ。何も見たくない、聞きたくない、知りたくない、感じたくない、言いたくない、したくない、失いたくない、逃げ出したい。

誰かとぶつかった。

「痛い」

聞き慣れた声とともに握り拳が飛んできた。

何でいる角倉よ。そう思いながら俺は倒れた。そんな俺に驚いて誰かが肩をゆする。その段になって顔を確認したがやっぱり角倉だ。

「お前何でいんだよ」

「あんたには関係無い。別にあんた追っかけて来たわけじゃないから」

「いきなりツンデレ？」

「うつさい」

何か漫才みたいなのが始まってしまった。

勘弁してくれ。今はそんな状況じゃないんだよ。

そこへマヒルが追いついてきた。悲しそうな顔をしているが無視だ無視。そんなマヒルをみて角倉が眉をひそめる。

「小鉢さん？どうしたの……血？」

「角倉さん……ごめんなさい」

「えっ？」

不意に頭を下げたマヒルに角倉が驚く。俺もわけがわからずマヒルを見る。

「先日は私のせいで辛い目にあわせてしまいました」

「いや、あれはあなたのせいじゃ」

「私のせいです。だって、あそこであの人を殺したの私ですから」

「え……なにを」

「すぐに公園から出るように言うべきでした……。あと一回、あと一回って引き延ばさなかったら……」

再度深く頭を下げ、マヒルは言った。

「こんな悪い子に関わらせてしまっでごめんなさい」

ある告白と罪

再び襲ってきた吐き気に俺は眉をしかめた。

俺意外の二人もそろって顔色が悪い。マヒルは泣きそうな顔で俺と角倉を見てゴメンナサイとつぶやき続け、角倉はそんなマヒルの姿に畏怖を感じて怯えた表情をしている。

「……マヒル」

口元を押さえながら俺は聞いた。

「その血、孤児院の先生のものだって言ったな。何で殺したんだ？何かされたのか」

「いいえ……」

帰って来たのは否定。

「先生には……とても良くしてもらいました。寂しい時はそばにいて、怖い時は守ってくれて、悲しい時は泣いてくれて、眠れない時に一緒に寝くれたりもしました。今朝も一緒にご飯を作ったんですよ。私、先生達が大好きでした……」

「じゃ、何でだ？」

「それは……」

ぎゅっと自らの服、あるいはそこに付いた血を握りながら、マヒル

は言った。

「私が幸せになってはいけないからです。私……悪い子ですから」
涙を流して天を仰ぐその姿は、どこか芝居がかったとすら思う懺悔の姿だった。

いつそ錯乱するか巫山戯てやっているのなら馬鹿な女で済ませられるのだが、聞こえてくる声は何処までも真面目で理性的だ。痛い女どころではない。

言葉の出ない俺と角倉をよそに、マヒルの言葉は続く。

「私は……お二人みたいに幸せになっていい人間とは違います……。産まれる場所も無いのに産まれ、生きる権利も無いのに生き、育つ必要も無いのに育ち、捨てる労力と拾う苦労を周りに与え、食べなくていい食べ物を食べ、寝なくていい時間まで眠り、学ぶ必要のない事を学び、持つべきではない友達まで持つところでした」

自己否定。

ポピュラーなネガティブ思考の一つではあるが、どうすればここまで根が深くなるのか。

「必死になって自分を戒めました……。迷惑をかけないように自分から関わらず、どんな事にでも耐えて……。生きていてもいい人間であり続けようと思いました。……。でも、だめでした。どんなに人と距離をとつても……。優しくしたり、手を差し伸べてくれる人がいたんです」

俺も角倉も思惑はどうあれこいつを助けた。孤児院の先生も優しく接したのだろう。その結果があれだが。

「だから殺したのか？孤児院の先生を。自分が不幸になる為に」

「いいえ、違います！」

初めて怒った声を出した。

「確かに私は不幸であるべきです……。でも、そんな理由で先生を殺したりはしません。……私はただ、罰を受けたかったんです」

「罰？」

「はい」

胸元を掴んでいた手を離し、自然体の姿勢を取って俺に聞いた。

「人はどんな罰が一番苦しいと思いますか？」

「？」

「私が一番苦しいのは罪悪感で胸が締め付けられる事です……。自分なんか死ねばいいって言う声が頭を締め上げて、言う事を聞かない肺が空気をめちゃくちゃに吐き出して、涙と体液があちこちから湧き出て自分が自分を攻め立てるんです。……でもその苦しみが唯一私の救いなんです。そう半年前に気付きました」

半年前……12月。このまちでもっとも恐ろしく忌まわしい事件が始まった月。

角倉も思い至ったのだろう。体が震えているのが分かる。俺だって胃が空なのに吐き気が止まらず手で口を押さえている。

こいつは

「私は、自分が幸せだと思つたびに人を殺して罪悪感という罰を受けてきました。……たくさんたくさん試し続けて、もうこうするか自分を押さえられないんです」

建物が崩れる音がした。

孤児院の一部が倒壊したのだろう。

その音に気付かない様子でマヒルが口を開いた。目の焦点が定まらなくなっている。

「今日……私を引き取ってくれる人が見つかったんです」

「……………」

「信じられますか？ 私みたいな人間を育てるだなんて……。こんな醜くて悪い子なのに……。幸せになっちゃいけない子なのに……」

誰に向かって話しているのかも分かっていないのかもしれない。ひよっとしたら自分に言い聞かせたいのかもしれない。

「クリスマスプレゼントを貰った時も、誕生日を祝ってもらった時も、福引が当たった時も、作文を褒められた時も、道で声をかけられた時も……。うれしいなんて思わずに申し訳なくて……。ただ申し訳

なくて……」

不意に、焦点が定まっていなかった目が角倉を捕えた。

「……角倉さん」

ビクリと肩を揺らして崩れそうになる角倉を反射的に支えた。一瞬目が合うが、助けを求めるような顔を見て目をそらす。

「角倉さん……それに唐木さん……。お二人には……何度謝っても無意味ですよね。声をかけていただいた時……私を訪ねて来てくれた時は本当にうれしかったです。でも、うれしがる自分がどうしても許せなくて。戒めなくちゃ、罰を受けなくちゃって思ってた。そのせいで……事になってしまって。……本当に、ごめんなさい」

深く、深く下げられた頭が上がった時、俺はマヒルに聞いた。

「なあ、お前……人を殺す事はどう思ってるんだ？それは悪い事だろう」

「はい、先生達を殺した事は……後悔しています。でも……他に殺した人達は私と同じで殺されても仕方ない悪い人達ばかりですから特に。……変ですよ？解っちゃうんです私。……自分でも気持ち悪いです」

相変わらず大粒の涙を浮かべ、視線を他所へ逸らしながら、しかしその顔にさっきまでとは違う僅かな笑みがあつた。

あーあ、やっぱり駄目だったと諦めのまじった笑みか。あるいは、しまいこんでいたものを少しでも吐き出したからか。

こんな顔も出来たんだなと場違いにも思った。

重苦しかった心に少しだけ余裕が出来た気がする。

「どうするんだこれから？ 帰る家燃やして」

「考えてません。でも、何も変わらないと思います。もともと帰る家なんてありませんから」

「そうか」

結局こいつには本当に何も無かったんだろう。家も家族も。

燃えている孤児院の前にいた子供たちは他人だった。近づく事も無く、話す事も無く、それ故に見向きもされず生き伸びた。逆に先生達は優しく近づいたせいで殺された。皮肉な事だ。

そんな事を思う俺に、マヒルが口を開く。

「……あの、ところで今日は」

「ああ、これ、バック拾ったから」

「すみません」

放り投げてやると頭を下げながら器用にキャッチした。

ふと思うが俺と角倉もかなり死亡フラグ立ててないだろうか？

そんな事を思う俺を見て、読みとったのか察したのか、大丈夫ですよとほほ笑んだ。

「お二人は殺しません。友達ではないけれど、とても大切な人ですから。だから……その時は私、自殺します。決めました」

そう言つてマヒルは俺達に背を向けて歩き出した。

「知り合いに」

「えっ」

「知り合いにお前みたいに人を殺した奴がいてな。お前の事見つけたら殺そうとするから気をつけるよ」

「……はい」

振り返らずにマヒルは応え、再び歩き出した。

その姿が見えなくなっても俺も角倉も動かず何も言わず、しばらくそのままだった。

ある頼みと混乱

どれほど時間が経ったのか、感覚らしい感覚が無いまま俺は部屋にたどり着いた。

すぐそこに角倉もいる。

崩れたまま安心して動かないこいつを放っておくのが悪いと思ったのかは自分でもよくわからないが、気付いたら手を伸ばしていた。

抵抗一つなくついて来る姿は普段からは想像できない姿だった。

お互いに一言も話していない。

一分、十分、一時間、更に一時間、耐えきれずに口を開いたのは俺の方だった。

「なあ」

開いたとはいいが何を言っているかわからず、言葉にもならないような声が僅かに出るばかりだったが。

当然のように反応は無い。

「角倉」

呼んでみた。しかし反応は無い。

「……夕月」

ためらったが今度は名前で呼んだ。これも無視された。

うつむいている為に表情はうかがえないが、時折肩が動いている事から意識があるのは分かる。

そりゃ信じられない事があって心神喪失するのも分かる。解る。が、今の俺にはいたわってやる気持ちなど無く、そんな角倉の態度が酷く気に入らなかった。

むかつく。

俺だって驚いたし信じられない。しかもここ数日そればかりだ。

角倉、黒木、白瀬さん、そしてマヒル。

知りたくも無い事が次々と分かり、悩み決意して逃げ出そうとする俺よりも先に俺の前から姿を消した。

所謂八つ当たりだろう。

倫理的に問題があるが、俺のこの感情をぶつけられる相手は今この場にはこいつしかない。

「こつち向けよ」

うつむいたままの角倉の顔を掴み俺へと向かせる。

しかしその段階で渦巻いていた俺の感情は霧散した。

泣いていた。

泣くんだなこいつも。いや、当たり前か。

ひどく萎えたが悪い気はしない。他人の弱い部分を見てこんな気持ちになるのは歪んでいるせいだろうか？

「泣くなよ似合わねー」

そう言っただけだ。

以前にも同じ事を言った事がある。

心を閉ざした俺に熱心に話しかけてきたこいつを振り払い、泣かせてしまった時の事だ。

その日の事が決定的に俺と角倉の仲を悪くしてしまった。

こいつの他人に対する指導が厳しくなったのもこの頃だった気がする。

俺のせい？ いや違う。たぶん違う。きっと違う。おそらく違う。絶対に違う。違うにきまっている。

「のせい？」

不意に、固まっていた俺の耳に角倉の声が届いた。

「私のせい？」

「……何がだよ」

わかっている。聞かなくても。マヒルの言っていた事だろう。

あの日角倉が発見した死体。あの死体の男が殺された原因は。

「私のせい？私が……小鉢さ……私……悪い？」

嗚咽の混じる声が終わるより早く俺は角倉から離れた。

「悪くねーよ。誰も悪くねー」

ただ何かが狂ってしまっただけ。

それだけ言っただけ俺は部屋を出た。

逃げ出したんじゃない。誰も信じちゃくれないだろうが。

「早かったですね。お待ちしていました」

「すみません白瀬さん」

「白瀬というのは いえ、呼びやすいように呼んでかまいません」

突然の連絡と訪問にも関わらず、白瀬さんは俺を迎え入れた。

いるのは黒木のマンションと同じマンションの別室だ。といっても

最上階の特別室（家賃2倍らしい）だけあって広さ、家具、内装、その他もろもろグレードが高い。

いかん、つい現実逃避してしまった。

しかしこれから頼む事を考えると少々気が重い。いや、案外簡単にOKしてくれるのかもしれないが。

「どうぞコーヒーです」

「どうも」

慣れ親しんだ味だが、緊張のせいで良く味わえん。

「今日はアフターケアではない相談で来たそうですが」

「ええ、どうにも神経は太い方で。……じつは今うちに心神喪失したやつがいるんですけど。今日の記憶を消してやれませんか？」

「可能です。そういう事でしたら人助けと思ってご協力させていただきます」

二つ返事で了承してくれた。

「いいんですか？」

「はい。薬品と暗示を使えばわりと簡単に出来ますから。戸籍を作る時に何度も使用しているので安全性は保証します」

「いやそついう意味じゃ……いえ、何でも無いですお願いします」

僅かに緩んだ頬を隠すように俺は深く頭を下げた。

「ああ、ところで」

不意に一つ確認しておきたい事が浮かび、口にする。

「朝の事ですけど……白瀬さんの実験の一つだったんですか？」

「朝ですか？実験は昨日の夜で終了しましたが」

「いや、そうじゃ……いえ、何でもありません」

この人に嘘をつく理由は無い。

なら朝は……この数日に俺の身に起こった事は全て本物という事だ。

一瞬帰ったのでは思ったが、角倉は変わらずに部屋にいた。

窓の外から顔を離し、俺を見て、また戻す。

「落ちついたみたいだな」

「一人にしてもらってありがとう」

皮肉で返すとは珍しい。拗ねているのならもっと珍しいが。

さて、機嫌を直すにはどうしたらいいものか。

「食つか？」

帰る途中で買っておいたコンビニ弁当を差し出す。

「いい」

「さすがにのどは乾いてるだろう」

泣いて水分が足りないのか、コップに茶を入れて置いてやるとすぐに口を付けた。

「もう10年か」

「……」

「今更だけど俺とお前何で友達になっただけ？」

「……誘ったのはあんた」

「え？」

「孤立しがちだった私を誘ってくれて……それでいい言ってくれた」

思い出した。

気に入らない奴をズバズバと注意して孤立してたこいつをクラスになじませた事があった。

クラスのまとめ役というか仕切り役として上手い事機能してくれた
おかげですぐにクラスの中心となった。元々才能があっただろう。

「まあ、いいんじゃないの？何にもしないでいるのは退屈だしさ。
やりたいようにやればいいんだよ　　って」

「よく覚えてんなお前」

「記憶力はいいから」

さいで。

「あんたが急に暗くなった時の事も憶えてる。人と関わらなくなっ
たり、人の顔に傷つけたり」

「ありやお前が勝手に頭ぶつけたんだ」

「痣残った」

「もう治っただろ」

何か睨んできやがった。

「い、いろいろあったよな。警察署に見学に行った時とか……大変
だったよなあの時」

「えっ」

話題を変えようとして話を振ると驚いた顔で見られた。

「だったよなつてあんた……」

「何だよ」

「あの日休んだじゃん朝突然」

「えっ？」

一瞬何を言われているのか分からなかった。

憶えている。何度も観た。繰り返し。あの日俺はあそこへ行き、朝と出会い、そして。

不意に伸ばしていた足に重みが加わった。

角倉が倒れたからだ。ひざの上に頭をのせながら気持ち良さそうに寝息を立てている。

茶に混ぜておいた睡眠薬が効いてきたんだろう。

「眠りましたね」

ノックも無くドアが開いて白瀬さんが部屋に入ってきた。

「ずっと待機してたんですか？」

「はい」

「別にコンビニでも待機してもらっててよかったんですけど」

「今回は善処します」

「次回はありません」

改めてこの人が天然だった事を確認し、俺は白瀬さんの指示で部屋の外に出た。

「では処置を開始しますので、私が良いと言うまで決して覗かない
てください」

何処かの昔話のような事を言って白瀬さんはドアを閉めた。

立ちんぼしていてもしょうがないのでとりあえず座り込んだ。部屋
着で出てきたからか少し肌寒い。

不意に角倉の言った言葉がよみがえる。

あの日、俺は確かに警察署に行った。憶えている。何度も観た。

しかし角倉は違うと言う。

俺の記憶が間違っているとすればやはり白瀬さんが何かしたのだろ
うが、隠す理由は何だ？

頭を抱えて舌打ちをする。

「わかんねー」

「じゃ一緒に考えましょうかー？」

いる筈の無い人間の声に振り向く。

「こんばんわぁ」

俺とは正反対の無邪気な笑顔がそこにあった。

ある事実と涙

予想外の事にほとんどの人間は驚く。

当たり前と言えは当たり前。しかし意外といえは意外だ。

物事が人の思うままに動く事など無いと知っており、物事全てを予想して生きる人間など珍しい。

しかし人は不意の出来事に驚き戸惑う。

今の俺のように。

「あれえどうしましたー？」

「別に……まだこのまちにいたんだなお前」

「いますよお。だってまだ終わってませんからー」

俺の横に腰を降ろしながら朝は言った。

やっぱりか。

勘違いしてこのまま帰ってくればよかったのだが。そううまくはいかないか。

マヒルの事を思い出す俺に朝は続ける。

「実は涼夜さんに謝らないといけない事があるんですー」

「謝る？何かしたのか？」

「したと言っかー、今からしに行くというかー」

「？」

珍しくはつきりしない物言いに俺が首を傾げると朝はいきなり頭を下げた。

「ごめんなさい」

「いや、いきなり謝られても」

「約束破らないといけないんですう」

「約束？」

あつたかそんなもん？

考えて思い至った。もともと会った時間が少ないから思い出すのは楽だ。

「公園でしたじゃないですかあ。涼夜さんの友達を怖いめにあわせ
ないって」

「殺すのかマヒルを」

今度は朝が驚く番だった。

「ええー何で知ってるんですかぁ？超能力ですか！？」

「いろいろあつてな」

「いろいろですかぁ」

ほほーうと妙な声を上げる朝。

そこへドアが開いて白瀬さんが顔を出した。

「処置は終了しました。……お邪魔でしたか？」

「邪魔じゃねーよ」

つい敬語を忘れて返してしまったが、気にした様子も無く白瀬さんは視線を朝に向けた。観察するように上から下へと視線を走らす。

それを気にする事も無く、朝は微笑み返す。

「こんばんわぁはじめましてー」

「はじめまして。いけませんよ不純異性交遊は」

「ふじゅんい……せいこ……ゆう？」

「知らなくていい」

尋ねるようにこっちを見る顔をグイッと掴んで無理やり明後日に向けた。

部屋に入ると角倉はまだ眠っていた。

表情は穏やかなので夢見は良さそうだ。

そんな角倉を白瀬さんはおもむろに抱き上げる。

「では覚醒する前に放置してきます」

「いや、放置ってあなた」

平然と言い放つ白瀬さんに呆れを通り越して寒気を感じる。

「問題ありません放置する場所はこの少女の自宅前です。気温、治安、降水確率などから考えても彼女が身を害する可能性は低いと思われる」

マジで怖いんですけどこの人。

あからさまな俺の顔を見て「何か？」と首を傾げる。

「もう少し配慮をしましょうよ配慮を」

「わかりました」

何が分かったのか、表情一つ変えずに真顔でこの人は言った。

「ぴんぽんダッシュします」

「はい？」

「ぴんぱんダッシュします。そのうえで放置すれば問題ありません」

「……前から思っていましたけど貴女って実はお茶目な人ですよ」

そう言った俺の言葉をどう解釈したのかは分からないが、角倉を背中に担いで白瀬さんは部屋を出ていった。

いや、本当に大丈夫なんだろうかあの入。

「て言うかお前も平然と上がり込むなよ」

いつの間にか我が家のようにくつろいでいる朝に溜息を付きつつ、俺はゴロリと横になった。

文句を言うのも面倒だ。

「お疲れですかあ？」

そんな俺を覗き込みながら朝が聞いた。

「ああ、疲れたな」

「寝ちやいますかあ？」

「眠いな」

不意に俺の頭に朝の手が置かれた。

子供をあやすように撫でられるが、払う気は起きない。眠気のせいだろう。

「お前さ」

「はい」

「警察に捕まった事あるだろ。10年くらい前に」

「……はい」

僅かに応えるのが遅れた。

触れられたくないのか？

「体中を縛られてたろ。埃っぽい狭い部屋で、窓には格子があつて……小さい机が二つあるだけだったっけ」

「あの、ひょっとしてヘヴンさんに聞いたんですかあ？そんなに詳しく」

困った声で朝が聞いた。

その問いに答える事無く、俺は最も確認したい事を聞いた。

「お前……お前は、一人で逃げたのか？」

言い終わってから朝が返すまでの僅か1秒にも満たない時間。その僅かな時間が今はとても長く感じる。

「はい」

答えは肯定。

その瞬間、俺の観続けてきたものが一つ否定された。

「そうか」

それだけ言って俺は目を閉じた。

俺の持っているもので確かなものは何だ？

目を覚ますと朝の姿は無かった。

まだ夜中だ。

もうひと眠りしようと思を閉じるが、不意に聞こえてきた声によってそれは邪魔された。

『何だ少年。若者が夜を楽しまなくてどうする』

聞き覚えのある声に飛び起きると、テレビ画面の中に見知った女性
がいた。

「へヴン……さん」

寝起きの頭に華やかな笑顔が飛び込んでクラクラとする。

そんな俺を見て齒を見せて笑う姿は見まごう無きあの女だ。

『いかにも私サ。朝はいないようだな。あの馬鹿は連絡も無く何処へ行ったのか』

「一応さっきまでいたけど」

『そうか。じゃ、今度会ったら私が怒ってるって言ってくれ』

投げやりながらも有無を言わさない存在感で言った。別にしょっちゅう会ってるわけじゃないんだがな。

と、不意に俺を見ながら「ふむ」と首を傾げる。

『何か悩み事でもあるのか少年。かなり疲労が出ているぞ』

「まあ、いろいろとありまして」

無意識に目を逸らした。

声に力が無いのが自分で分かる。

『……本当に何かあったようだな。不貞腐れているようで実はそんな余裕すら無い』

少し待てと言ってヘヴンは画面から消えた。

パタリというドアが開く音がし、この世のものとは思えぬ悲鳴が響き渡った。

地獄を逃げ回る亡者のような足音が聞こえ、何食わぬ顔でヘヴンは画面の中に戻った。

『さて、これで二人きりだ』

何が居たと言っただ。そして何をした。

『何があつたか言ってみろ。勿体無くもお姉様が相談に乗ってやる』

聞き手にあるまじき尊大さでヘヴンは言った。

逆にその姿が清々しい。

「朝の事聞いていいか？」

『いいぞ』

無遠慮に聞いた俺に何とも軽くヘヴンは返した。

「いいのかよ」

『かまわんさ。で、朝の何についてだ？』

「10年前、あいつが警察から脱走した時の事」

『ほう』

一瞬俺を見る目が鋭くなるが、すぐに元に戻った。

『お前が何を知っていて何を知りたいかは聞かんが、そこは少し不

味いぞ？私は一度だけ聞いたがあいつは私以外誰にも話さないし二度と私にその話をしてほしくないらしい』

「かまわねーよ。あいつに殺されてでもこれだけは100%決着つけてーんだ」

威圧するように俺を見るヘヴンを正面から見返す俺に折れたのか、それとも気が変わったのか、元から話す気があったのか。

フツと笑いながらポツリポツリと話し始めた。

『知ってるか知らんがあいつは両親を殺害した罪で警察に拘束された。拘束という言葉が体现するかのような何重・十何重に錠をかけられてな』

知っている。という自信はもう無い。

それでも頭にはその光景が鮮明に写る。

『普通なら……まあ、8つのガキが全身拘束されてる時点で普通も糞もないが、ケツを1ミリ浮かすのも不可能だったろう。だがたった一つの幸運 いや、不幸があいつを助けた』

「不幸？」

『担当したカウンセラーがド変態だったのサ』

溜息を一つ挟んでヘヴンは続ける。

『顔が綺麗なガキを見ると男も女も関係なく手を出す屑だったらし

い。愚かな男サ。便所で用を足している所をビデオで撮ろうとして
返り討ち。鼻が折れるまで便器に叩きつけられ、打ち所が悪くて死
んだ」

「世の中ろくでもないな」

『まったくだよ。……おいおい泣いてるのか!?!』

驚いた声で気がついたが涙が流れていた。

間違っていたのは俺の記憶の方。

朝が逃げたのは俺のせいじゃない。

俺のせいじゃないんだ。

その事実が嬉しいのか悲しいのか。俺には分からなかった。

ある月曜とボケ

夢を見た。

夢から覚めた夢を。

寝汗と涙と体液で濡れた枕を吐きだされた吐瀉で汚し、抱き竦められた腕に爪を立てる。

母さんの腕だ。

分かるのはそれだけ。

音も、熱も、匂いも、触れている感覚も触れられている感覚も無い。

ただ泣いていた。

怖い夢を忘れなくて、夢を本当にしたくなくて。

「という夢を見たんですよ」

「それでそんなに顔色が悪かったんですね。コーヒーお代りしますか？」

「あ、お願いします」

さすが白瀬さんのコーヒーは一味違う。

そんな事を思いながら俺は深く椅子に腰かけなおした。

夢の余韻はすっかり薄れ、すっかり船を漕ぎだそうとするのを慌てて止める。

キッチンから戻ってきた白瀬さんがコーヒーを差し出した。

受け取る俺に白瀬さんは切り出す。

「それで今日はどう言った御用でしょうか？先日の少女は家族に見されるのを確かに確認しましたが」

発見て……本当に放置したのか。まあ、そこは置いておこう。

「実はちょっとカウンセリング的な物をしてもらおうと思ひまして」

「カウンセリングですか？人の心を除くのは良心が痛むのですが」

「バリバリ人の事を実験台にした人が何を言いますか」

ため息交じりにツツコミを入れるが、しかし白瀬さんは真面目だった。

「ですがもう実験台ではありません」

「え」

「確かにあの時の私と貴方ドクターの関係性は研究者と被献体モルモットというものでした。ですが今の私と涼夜君は人間同士対等な関係です。お互いに

分別を持つてより良い人間関係を築けていければよいと考えています」

至って大真面目に白瀬さんは言った。

「どうしてもとおっしゃるのなら人助けと思って行いますが、いかがでしょうか？」

「……お願いします」

「わかりました。ではお聞きますが、何でお悩みでしょうか？」

「実は俺……過去や未来が見えるみたいなんですよ」

躊躇いがちに言った俺の言葉を、聖母のような優しい笑顔で白瀬さんは受け止めた。

「どうやら私の処置に問題があったようです。一度入院して精密検査から始めましょう。長く掛かるかも知れませんが、私は諦めませんので二人三脚で頑張りましょう」

「言いたい事は分かりますけどとりあえずその患者を見る目を止めてください。と言うか貴女昨日からボケすぎです」

この人の所に來た事をさっそく後悔しながらも、俺は心の中のしこりを取り除くために口を動かした。

泣き疲れた俺はぐったりとベットに倒れた。

俺のではなく父さんのベットだ。少しタバコ臭い。

余裕が出たわけじゃない。虚脱あるいは軽い衰弱でもしたのか。呼吸の音だけが小さく響く。

母さんが入ってきた父さんも一緒だ。心因性どうたらこうたらと難しい言葉で話しているのを聞き流して俺は天井を見る。

白くくすんだ天井を見る。見続ける。

怖い夢を思い出さないように。夢に追いかけられないように。

「なるほど。つまり私がかけた暗示以外でも貴方は過去や未来の夢を見たと」

「そーゆー事なんですけど。信じてます?」

「はい。涼夜君は嘘をつく人ではありませんから」

「それはどうも」

一応お礼を言いながら、あごに手を当てて考え込む白瀬さんを俺は見る。

話したのはさわりだけだ。朝やマヒルの事は言っていない。

「やっぱり病気ですかね」

「どうでしょう。過去視、予知夢、千里眼といった能力は確証確立されていないだけで古くから存在するものですから。涼夜君がその力を保有していたとしてもおかしくはありません」

「何で急にそんなもんが」

「？急にでは無いないでしょう」

「え」

首を傾げながら言った白瀬さんの言葉に、俺は間の抜けた声を上げた。

「貴方と周りとの１０年前の記憶の相違。それは貴方が１０年前に未来視を行って未来を変えたからではないですか？」

「あ」

再び呆けた声。

考えてみればわかる事だろうに、俺は全く気付かなかった。

あの日、俺は朝と出会う夢を見て精神的に傷を負い、学校を休んで寝込んだ。そして夢を現実起こった事だと思い込んでいた。

筋は通る。

結局俺はこの１０年間、たかが夢一つで他人から逃げて塞ぎ込んで……。１０年を無駄に浪費 いや、捨て去ってきたのか。

「?.....どうかしましたか?」

「いや、何でもありません。そろそろ帰ります」

「そうですか……。ところで今日は月曜日ですが学校は?」

そう言われて思い出した。

今日中に学校へ行けば退学届は取り消せるんだったか。

「学校は……退学しました。まち出るんです」

「そうですか。寂しくなります」

そう言う和白瀬さんは右手を差し出した。

「困った事があつたら相談してください。涼夜さんの事を応援していますから」

「どうも、ありがとうございます」

お互いに手を握り合い。別れの言葉は言わずに別れた。

「え、何?結局退学するの?」

学校に着いた俺は何とも気だるい声で迎えられた。

明るく元気な担任の姿は何処へやら、まだ若いというのにどつぷりと机に倒れ伏して俺を見ている。あれほど必死に俺を止めようとしていた姿は怪我も形も無い。

「元気ないですね」

「色々あったの。誰かさんは退学するし、角倉ちゃんは病院行って欠席するし、小鉢ちゃんは行方不明になるし。私のせいなの？ねえ、私の責任！？」

「落ちつきましょう。皆さん見てますから」

肩を掴んで詰め寄る先生を宥めつつ、気になる事を聞いてみる。

「角倉何かあったんですか？」

「うん何か金曜の夜にいきなり連絡が取れなくなって、夜中に家の前で倒れてるのが発見されたんだって。あ、怪我一つ無いらしいから安心して。病院も検査で行ってるだけだから」

「そうですか」

気になっていた事が一つ片付いて一息つく。

そんな俺をジッと見る視線に気づいた。

「何すか？」

「いや、いつも殴られてるから仲悪いのかと思ってたんだけど」

「別に悪いわけじゃありませんよ。ついこの前も一緒に遊びましたし」

「ほー」

何か先生の俺を見る目が変わった気がする。変な誤解でもされたか？流れを変えるべくマヒルの話を振った。

「マヒ　小鉢の方は何が？」

「小鉢ちゃん？そう小鉢ちゃん！あの子の住んでる孤児院が火事になってから行方不明らしくてさ。警察来たの警察！家の前にパトカー止められたの！」

それは落ち込みたくもなるな。と同情しつつ、これ以上は面倒なので帰る事にした。

「じゃ、俺帰りますね」

「そう……じゃ受理してもらってから私物はしっかり持ち帰ってね。それとこれ修学旅行の積立だから」

「どうも。あ、角倉学校来たら俺が悪かったって言うといってください」

「まあいいけど。あんた達どういう関係？」

そう聞かれて少し困り、無難に答えた。

「友達ですよ」

「そう、か。まあいいけど。若いうちは思い詰めたりしちゃだめだよ」

「はい」

「それと不純異性交遊は駄目絶対だからね」

あんたも言うか。

空は何処までも青く無限に広がっていた。

忘れようとしても思い出すだろう。俺の中にはあいつらとの思い出がしっかりと記憶されている。

あるいはまた出会うのだろうか？

この青い空の下であの紅い記憶の少女達と。

「どうしたんですかあ？空を見上げてー」

「空を見てただけだよ」

「ひょっとして邪魔をしてしまいましたか？すみませんでした」

「……いやいいんだけど。とりあえず、何でいやがるテメーら！」

俺を挟み込むようにして右に朝、左にマヒルが陣取っている。

「それがですねー。私達ばったり会って殺し合う事になったんですよー」

その時点でおかしいよな。

と言う俺のツツコミは口から出る事は無かった。無駄だと分かっているからだ。

「でも……殺しあつたらどちらかが死んでしまつと気付いたんです。私達二人とも……死ぬ前にやりたい事があるんです！」

朝の言葉を引き継ぎながらマヒルが熱弁する。

「何だよやりたい事って？」

ものすごく嫌な予感がするが聞くしかない。聞きたくない。

「私達唐木さんと……」

「デートがしたいんですー」

勘弁してくれ。

ある賢沢と嫌悪

昼間から高校生が街中をうろつくのはよろしくない。

たとえ退学したてのニート（予備軍）だったり、失踪扱いの殺人犯だったり、生存者扱いされているかも怪しい殺人鬼であってもそれは当然だ。

とは言っても現代日本において学校行かない10代は珍しくも無く、また警官も役人も犯罪を起こさない限り見向き一つしないのが常なので特に問題は無い。

服は元々私服だ。

逆に断る理由が思いつかずにかれこれ4時間近く振り回されている。

映画、買い食い、立ち読み、ゲーム……くたくたの俺に対して女二人はそんな素振りをまるで見せない。

「楽しそうだな」

すれ違う通行人を律儀に避けながら歩くマヒルを見て口を開いた。

上京したての田舎者の様にせわしなく視線を彷徨わせている姿はいつもより活発に見える。

「はい。私、誰かと街を歩いた事が無くて……。買い物も近所の商店街ですから……」

「あの辺の商店街って食べ物と日用品ばかりだろ。服とかゲームとかもそこで？」

「いえ、そういうのは……先生が。だからちよつと懂れてたんです。好きな服を買って、お洒落な喫茶店で食事をするの」

と言うマヒルの言葉に、朝が共感するように声を上げた。

「わかりますー。朝も服はいつも配給品ですからあ」

それは少し違うと思う。

「てかお前って給料制？小遣い制？」

「歩合制ですー」

「よく分かんねーけど。貰うもんは貰ってるんだろ？何で服一つ買わねーんだよ」

前にホテル行った時もこいつ持ちだったし結構持ってたそうなんだが。

「服より美味しい物が食べたいからですよー。パリとかミラノへ行った時は食べ過ぎ使い過ぎで野宿しちゃいましたあ」

「朝さんて国際派だったんですね……！懂れます」

お前もツツコム所おかしいぞ。

しかし、それにしてもこの二人の仲の良さは異常だ。

ついこの前会ったばかりであり、この後凄惨な殺し合いを繰り広げると双方合意しているというのに。いや、双方合意だからこそこのれなのだろうか。

俺にとってはいい迷惑だが。

「あの……涼夜さん、ひょっとして楽しくないですか」

そんな俺に恐る恐るマヒルが聞いた。

「迷惑ですよ。私何かと……すみません」

「いや違うから。えーと、そうだ！服買ってやるよ。好きな選べよ」

浮気がばれそうになって御機嫌とろうとする男の気分だ。

しかし俺の言葉に目を輝かせながら、小動物を思わせる動作で近くのプロテックを指さす。

はいはい分かったよ。

マヒルを先頭にしてプロテック内へと入る。

「楽しそうですねー」

そんなマヒルを見て朝が口を開いた。

「今日は大人しいよなお前」

「朝はいつもオシトヤカですよー?」

「確信犯だろ」

静かなのはいいが、過ぎるとつい気になる。

「今日はマヒルさんの為のデートですからー」

「あいつの?」

「はい。死んだら終わりですから」

あくまで死ぬのはあいつの方だと思ってる。まあ、当然か。でなきや死ぬのは自分だ。

「殺し合わないってのは無いんだよな」

「無理ですよお」

期待せずに言っ た言葉は予想通り否定された。

「私達お互いに大っ嫌いですからあ」

「嫌い?」

「はいー。少なくとも私はあ。たぶんマヒルさんもあ」

「嫌いって……どこがだよ?」

「自分と違うからですよ」

「？」

言っている事が分からない。

確かに性格や境遇に違いこそあれど本質的には同じ様に見える。と
いうか、そんな理由なら全人類が嫌悪の対象になる。

そんな俺の疑問に答える様に朝は言った。

「私とマヒルさんてちょっと似てるじゃないですかあ？」

「ああ」

「でも違うんですよ。考え方の一番深い所がー」

「一番深い所？」

「自分を許してるんです」

「許す？」

「だってそうじゃないですか？自分が嫌いなのに、悪いって知ってるのに、自覚してるのに、気付いてるのに、憎んでも、恨んでも、後悔しても……。懺悔していればいつか神様が許してくれるって思ってるんですよ？幸せを甘受したいと思っっているんですよ？そんな事あるわけ無いじゃないですか」

こんな朝を見るのは二度目だ。

いつもとは違う感情をさらけ出しながらも氷の様に冷たい表情。

「だってそうでしょう？自分が嫌いなのに好きになってくれる人を断ち切らない。自分が悪いと自分で言って同情を欲しがってる。不要と言いなから庇護を受けて、憎む自分を傷つける度胸も無くて、他人に許されないから居もしない神様に懺悔して、嫌になったら逃げ出すんですよ。それってずるくないですか？」

不思議と怖くは無い。

「贅沢な人ですよー」

ただ、自分に言われている気がしてもどかしい。

「私間違ってますー？」

「さあな。……お前は違うのか？」

「はい、私は自分を許しません。でも死にたくありません。だから試しているんです」

「試す？」

「私が生きていい人間なのか。命をかけて」

命をかけて。

文字通りの意味なんだろう。命をかけて殺し合って生き残る。

ただそれだけ。それだけを10年も繰り返して来たのだろうかこい

つは？

「何でそこまでするんだよ」

その疑問に答えが帰るのには少し時間がかかった。

「……昔、人を殺しました」

「今だって殺してるだろう」

「その人は違うんです。怖い人でしたけど、誰も殺した事のない人でした。それが私の唯一の罪です」

唯一。そう言ったか？

「確認したいんだが、お前にとって人を殺した事のある人間を殺す事は罪じゃないのか？」

「あたりまえじゃないですか」

どっちの意味でだ？

聞くべきか迷っていると両手に服を抱えたマヒルが戻ってきた。

「あ・あの、どちらが似合うと思いますか？」

「両方買ってやるからスカートも選んでこいよ」

「行ってきますー！」

何かキャラが崩れてるが俺は知らん。

「楽しそうですねー」

「お前も選んできていいんだぞ？」

「選んでくださいよー」

「……あ、そいやヘヴンがお前探してたぞ。あの後連絡入れたか？」
その時の顔はこれまで見たどの人間の表情よりも恐怖に満ちていた。

「あうあう……きよ、今日はこれでオイトマいたしますう……」

半泣きでプルプルと震えながら朝は店を出た。

見送る俺の前にマヒルが戻って来る。

「また帰ってしまったんですか？」

「いそがしい奴なんだよ」

ふと一着の服に目が止まった。

黒と赤のワンピース。朝に似合いそうだと何となく思った。

「ついでにこれも会計してきてくれ」

財布と一緒にそれを渡して頼んだ。

「お前って朝の事どう思ってる？」

マヒルが寝泊まりしている廃墟に着いたのは夕方になる前だった。朝が消えてマヒルのテンションが下がったのでこれまでとなった。

「朝さん……ですか？」

「嫌ならいいけどよ」

半年前から無人となった小さなスーパーは日当たりが悪い為かひんやりと肌寒い。壁にはスプレー缶でアーティスティックな落書きが施されている。

女子高生が夜風をしのぐには少し寂しい場所だ。

ふと思ったがこいつってほぼ無一文じゃなかったか？何日も飲まず食わずで何でこんな元気でいられるんだ？

見ると足元にコンビニ弁当の空が転がっていた。

「あ……それは公園で眠ろうとした時にホームレスの方から貰ったんです。遠慮したんですけど……」

結局貰って食ったわけか。

「贅沢ねえ」

呟いた言葉は聞こえなかったらしい。俺の問いに律儀に悩んでくれ

ている。

「……怖い人、でしょうか？」

「怖い？」

「はい。……あの、気を悪くしてしましたらすみません」

「いや別に」

首を振って続けるように促す。俺だってあいつは怖い。

「朝さんは……たぶん、割り切って生きている人です。自由に見えてとてもたくさんの枷を自分にはめているんです」

枷という言葉に一つの光景が浮かぶが振り払う。

「でも、朝さんはそれを気にしていない……気付かないんじゃないんです。当然だと……這いずって生きる事が当たり前だと思っているんです。自分の事を」

「お前も似たようなもんだろ」

「違います！」

俺の疑問に驚くほどの勢いでマヒルは返した。

「あ、えっと……すみません」

「いや、続けてくれ」

「はい。……私も自分を罰しめながら戒めながら生きています。でもそれは少しでも罪を償って身を清めたいと思ってるからです。でも朝さんは……あの人は違います。罪を認める気持ちがあっても償う気持ちが無い。償えない、無理だ、と諦めて決めつけているんです」

「そりゃ人それぞれ考え方は違うだろな」

「私もそう思います……。でも朝さんはどこかそれを人に押し付ける……いえ、この世のすべてがそうだと思ってるんです。それ以外を認めていない……そんな気がします。すみません変な事言ってます」
頭を下げるマヒルに、いや……と手を向けた。

時折朝の見せる感情をを荒げる姿を思い出し、なるほどなと納得した。

結局この二人は初めから合わなかったんだ。

俺がどうこう言ったところで意味は無い。

「今日の午前0時なんです」

「？」

「公園で私達殺し合います」

「そうか」

足早に廃墟を出て家路についた。

マヒルは何故あんな事を言ったのか。

行くなと言ってほしかったのか、一緒に逃げてほしかったのか、間に入って止めてほしかったのか、はたまた朝を殺してくれとでも頼む気でいたのか……。

「贅沢、か」

呟いた言葉は風に乗って消えていった。

ある過程と結果（前書き）

前回、前々回の内容でおかしい所があったので直しました。

直したといっても二行ほどなので読み直す必要は皆無です。

僕の気付かないところでおかしい所があったら報告していただけると嬉しいです。

ある過程と結果

食べ終わったコンビニ弁当をゴミ箱に投げ入れて横になった。

白瀬さんの手料理が恋しい。

案外言えば喜んで作ってくれそうな気がするが、餌付けされそうで怖い。

あと6時間もしない間に朝とマヒルのどちらかが、あるいは両方がこの世から消える。知っているのは俺だけ。

何も出来ないしする気も無い。俺には何も。

『毎回毎回辛気臭い顔をしているな少年』

「.....」

『無視すんなクソガキ』

頭をかきながら身体を起こす。

テレビ画面越しに俺を見るヘヴンと目があつた。

『朝から聞いたぞ。修羅場だな少年』

「関係無いですよ。あいつらが勝手にやってるだけで」

『冷たいなア』

「ほつといてください」

この人は何しに電話してきたんだ本当に。

『ああ、一応聞いてみるが朝の様子はどうだ?』

本当に一応という感じで投げやりに聞かれた。

「どうって……」

『変わりなし だろうな。 あいつは昔からそうサ。泣こうが、笑おうが、怒ろうが、進もうが、退がろうが、止まろうが、三回まわってワンと言おうがあいつのルールがブレる事が無いからな』

「ルール?」

『わからんか? ヒントは10年前、あいつが犯したたった一つの罪でありトラウマ。つまり 』

「人を殺した人間は殺すべきでそれ以外は傷つける事なかれ か
?」

俺の答えに満足そうにヘヴンが頷く。

あいつも実際にそう言っていた。人の生き方をどうこう言う気は無い。だが、

「でも
」

だからと言って、あいつが殺した男は悪党であることには変わりなく、少なからず社会の役に立ったと言えなくもない。

根底に居座るほどのトラウマに成りえるべきものなのだろうか？

『それでも人を殺してない』

そんな俺の心を読みとったかのようにヘヴンが言った。

『物事には過程と結果があるが、最終的について回るのは結果の方だ。あいつにとって重要なのは殺したという結果であり理由も過程も関係ない。あいつのルールでは古いも若きも、男も女も、人種も産まれも、育った環境も関係無い。痴呆の爺から病気の幼女まで、殺していいのは人を殺した事がある人間だけなのサ』

「・・・・・・・・」

『考え方自体は珍しくない。まあ、正当防衛だとか第二親等までに対する復讐だとか、細かいルールは多種多様だがな』

しかし。と言葉を区切り、ハハッと笑いながら続けた。

『ノンケであいつの肩を持ったのはお前が初めてだよ。アリガトウ』

「どうも」

『フツ　で、行かんのか？』

「行きません」

『ツマラン』

何とでも言え。

俺が行ったところで何も変わりはない。

考えは変わらんと不貞寝を再会しようとする俺に、ヘヴンは不意に聞いた。

『キリンの頭が何故長いか知ってるか少年？』

「はあ」

いきなり妙な事を聞かれ、とまどいながらもとりあえず答える。

「それはあれだろ。高い所の葉を食べようとして」

『と言われてきたが、最近じゃ突然変異によって生まれたというのが定説サ』

小馬鹿にした目で見られた。

だから何だよ。

『実はその事をダーウィンがガラパゴスへ行く前に気付いた男がいたのサ。その男は並みの天才100人分はある頭脳を持って生まれ、最高の学者達によってその時代の超一流の教育を施された。教育の結果は凄まじく、半世紀年にかかるであろうと言われた発見、発明、解読を10代の間にいくつもなしえた』

「だから？」

『まあ聞け。そんな予想の斜め80°。上に行く功績をもたらす男を、彼を育てた学者達はこれからの時代を担う進化した人類と彼を評し、世界を良き方向へ導くであろうと予感した。そしてそうだった。ただ一つの誤算を除いてな』

「誤算？」

『自分が天才で特別だと欠片も理解していなかったのさ』

グハハハハと下品に笑いながらヘヴンは続ける。

『まあ学者達にも問題はあったサ。競う仲間も比べる相手も与えずに分厚い本ばかり読ませてたんだからな。優秀だという自覚はあっても自分が世界で最も進化した人類だなんて考えもなかった。故に彼は探したのさ次世代を担う寵児を。自分がそうだと気付かずに』

「結局見つからなかったのか？」

『いいや見つけたさ。ここで最初の質問が意味を成す。麒麟は元々首が短かったが、首が長い突然変異が生まれるようになり、現在ではそれらが進化した種として生存している』

「まさか……」

一つの可能性に思い至り、思わず呟く。

満足そうなヘヴンの表情がそうだと告げている。

『人類にとつての突然変異。即ち奇人、変人、異常者、狂人こそが進化した人類であると彼は判断したのサ』

何をどう考えればそこに至るのか……。

天才故の弊害という奴か。

『驚いたのは学者達サ。丹精込めて作り上げた天才が病院や刑務所に閉じ込められてるような連中を人類進化の鍵だなんて言い出したんだからな。当然彼の主張は受け入れられず、監禁されて計算機みたいに使われる日々が続いた。が、彼はめげなかった。人類進化こそが自分が生みだされた理由だと信じ、脱走を試み成功した』

不意に言葉を切り、立ち上がってカーテンを開き窓を開けた。

『そして彼は人里から離れ、捨て子を拾い家を建てた。それがココ、それがエデン』

空、雲、山。

窓一面に美しい自然が広がり、風でヘヴンの髪が揺れる。

『ここに3人の人間が住んでいた。一人は彼、そして彼が拾って来た二人の男女。もっとも彼は身体が弱かった為に数年で死んでしまったがな。で、だだっ広い家に残ったのは彼が残した財産と彼が見初め名付けた狂人アダムとイヴ。二人は彼の遺言に従って財産を使い仲間を集めた。やがて家は増え、村となり、街となり、楽園となった』

「世界が百人あんならだつたら逆に平和かもな」

『平和の意味すら変わるサ』

ひとしきりお互いに笑いあい、もう目を合わせる事は無かった。

『行ってこい少年。最終的に自分が満足さえすれば傷も恥もいい思い出になる』

「あんたはいいよな画面越しで」

『心配するな。もしものは骨は拾いに行つてやる』

意地の悪い笑顔を向けるヘヴンに舌打ちし、ゆっくりと俺は立ちあがった。

『朝を頼む。可愛い妹分なんだ』

そう言つてテレビは通常のチャンネルに戻つた。

「俺にとつちや赤の他人だよ」

そうつぶやいて電源を切ろうとし、不意に揺らいだ視界に立ち止まつた。

気が付けば天井を見ていた。身体が動かない。

何度も味わつた感覚がこれほど憎く苦しいと思つた事は無い。

「なんでだよ」

そうつぶやいて俺の意識は闇に沈んで行った。

ある分岐と行動

映像が流れた。

映像と言つにも及ばないコマ送りの画像の羅列だったが、それらは濁流のように俺の頭に流れ込んできた。

朝が死んでいた。

マヒルが死んでいた。

死んだ朝をマヒルが抱いていた。

死んだマヒルを朝が眺めていた。

朝をかばって俺が死んだ。

マヒルをかばって俺が死んだ。

二人の間で俺が死んでいた。

何事も無かったように角倉と話す俺がいた。

現れては消え、現れては消え……。煮えたぎった俺の脳に最後に焼きついたのは、ぼやけた女の姿だった。

それが誰だったのか、わからないまま目が覚めた。

目が覚めたのは良いが体が言う事を聞かなかった。

唯一動かせる左手で顔を触ったらぬるりとした感触があった。いい年こいて鼻血を出してやがった。

とりあえず左手一本で出来る事を考え、携帯を出して白瀬さんにかけた。

『はい、白瀬です』

夜中なのにワンコールで出てくれた。やっぱり隙が無い人だ。

「すいませんこんな時間に。何か急に体が動かなくなっちゃって」

『ふぁ……金縛りです……ムニヤムニヤ』

「……すいません俺が悪かったです。自分で何とかします」

寝ぼけた声で応える白瀬さんにとりあえず謝る。

何か聞いてはいけないものを聞いてしまいそうな気がする。

『冗談です』

わからない。この人が分からない。

『冗談はさておき、体が動かないというのは具体的にどのような状況でしょうか？痛みや出血などが伴うようでしたら私より救急車を呼んだ方がよろしいと思います』

「出血って言うか、鼻血でてます。痛みは無いですけど、逆に感覚が鈍くなってる携帯が上手く持てないんですよ。……ああ、突然意識がブラックアウトしました」

『いつもの事ですね』

「そう言われるとそうですね」

何か力抜けて来た。

『……声に元気がありませんね。ストレスを溜めたりしていませんか？』

「あつ、わかります？」

携帯の時計は午前二時を回ったところだった。

とつくに殺し合い終わって死体も回収されてる頃だろう。

「変な夢を観たんですよ」

『夢……また未来や過去ですか？』

「未来、だと思っんですけど。何て言うか、変だったんです。同じ場面のいろんなパターンが次から次へ流れて来て……」

曖昧な俺の言葉にフムフムと頷き、すっかりいつもの調子に戻った声で言った。

『それは分岐した複数の未来ではないでしょうか？』

「分岐？」

『選択一つで未来は幾重にも分岐します。未来が複数観えると言う事は、それほど不確定であり広く分岐しうる未来なのでしょう。よく考えて選択行動する事をお勧めします』

選択行動。

既に手遅れだ。俺の眠っている間に未来は決定して俺は動くこともままならない。

『……涼夜君？』

黙り込んだ俺に白瀬さんが声をかけた。

「無理です」

『はい？』

「もう終わっちゃったんです。未来決まっちゃいました。俺、何かしようと思ったのに、何にもしてないのに終わってました」

力無く笑ってみると、優しく白瀬さんが励ましてくれた。

『終わったものはしょうがありませんね』

実にあっさりと言ってくれる。その方が俺も気が楽だが。

終わったものはしょうがない。

『忘れて二度寝でもしよう。 とか思ってます?』

「……思ってます」

読まれていた。

つくづくダメな男だ俺は。

『まあ、貴方の勝手ですから何も言いませんが。何もしない事も選択の一つと言う事を憶えて置いてください。選択には結果が伴う事も』

最終的について回るのは結果の方 。

結果なんてもう出てる。俺は結局何も出来なかった。

『分岐の次はまた分岐』

「えっ」

『一つ選んだらまた次の選択肢が現れるのが人生です。いつだって選ぶのは貴方です』

「……」

『体、まだ動きませんか』

ゆっくりと右手を握ってみた。

ついさっきまでと違い感覚が戻っている。が、

「……動けません」

肘から先に力が入らない。

『今から診察に伺いましょうか？』

「大丈夫ですよ慣れてますから。朝には歩けるようになると思います」

『そうですか。では、何かあったらまた電話してください』

切れた。

結局かけた意味ってあったのだろうか？

まあ、多少気は楽になった。

5分経った。まだ体は動かない。

もどかしく体をゆする間に何時しか眠ってしまったが、次に目を覚ました時には体が動くようになっていた。

眠っていた間にまた夢を観た気がしたが、どうにも曖昧ですぐに忘れてしまった。

どうでもいい夢だったのだろう。

晴天を眺めて横たえる少女の耳にのどかな声が届いた。

「マヒルさん見つけましたあ」

「……見つかったしまいました」

悲しそうに、それでいてどこか嬉しそうに、少女は起き上がった目の前に立つ少女と顔を合わせた。

「二人きりですけど……あの時の続きですね」

「はい、やっぱり消化不良ってよくないですよー」

微笑みながら少女は歩み寄り、隣り合って座り込んだ。

長い沈黙があった。

互いに目を合わす事も無く隣り合う二人の周りには人の姿は無く、たまに通る人影も足早にその公園を通り過ぎて行った。

「静かですねー」

「あんな事がありましたから……。あ、朝さんはいなかったんですね」

「はいー。ああ、途中でいなくなってごめんなさい」

「いえ……私こそ、ごめんなさい……」

再び沈黙。

「朝さん」

「何ですかあ？」

「私、やりたい事が出来たんです。好きな人と一緒に何処か遠い所へ行って、ひっそりと生きて、慎ましやかに死んでみたい……。相手はもう決まっています。その人はぶっきらぼうで人と関わるのが嫌いなんですけど、本当は優しく、私の事気にかけてくれて、きつと頼んだら私と一緒に来てくれるんです」

頬を赤くしながら恋する乙女のように話す少女を、もう一人の少女は笑顔で、しかし冷めた目で見ていた。

そんな少女の目に気付かずに少女は続ける。

「私なんかそんな権利があるとは思っていません。……でも、でも願うくらいはいいと思うんです。願って、悔んで、願って、謝って、願って、戒めて、願って、償って……。そうしていればいつか許される日が来ると思うんです。叶う日が、来ると思うんです……」

「それは、とっても贅沢な願いですねー」

「……贅沢、ですか？」

ここへきて少女は自分を見る少女の目に気付いた。

「願ったってどうにもなりはしませんよ。だって、一度身を汚した

「そこは一生腐ったままなんですから」

何処までも、何処までも冷めた目。

「悔んでも、願っても、謝っても、戒めても、償っても……汚れは
どんどん自分を蝕んで腐らせるんです」

全てを否定して見下す目。

「腐った手は人を抱きしめられない。腐った足は平穩に踏み込めない。
腐った身体は幸せに耐えられない。腐った頭は常識を受け入れられない。
腐った心は人を愛せない。……そんな事も分からない貴女は生きる権利すらもつたない」

そして何処までも自分を信じる揺ぎ無い強い目だ。

そんな目で射ぬかれ、少女はしばらく固まったまま喋れなかった。

少女は黙ったまま下を向き、やっと顔を上げた時には目の前の少女と同じ強い意志が宿っていた。

「贅沢だと自分でも思います。でも、私は許されたいです。だって、
そうなる事も出来た筈ですから。今からでもそうなっていいいはずで
すから」

それを聞く少女は何も言わない。

「でも……その為には、私を邪魔しようとする人を殺さないといけ
ないんです」

「いいんじゃないんですか？」

「えっ」

「あなたを邪魔しようとしている人、悪い人ですから。殺されたって文句言いませんよ」

そう言ってて微笑む少女を見て、ようやく少女の顔にも笑顔が浮かんだ。

「そうですね。殺していいんですよ」

「そうですよ殺したっていいんです。殺されたっていいんです。だから」

「ええ、だから……」

殺し合いましょう。正しく殺し合いましょう。

「でも」

「その前に」

好きな人に会っておきたい。

孤児院後のすぐ近くにある公園へ着いた頃には朝日が昇り始めていた。

そもそも聞いたのは公園とだけなのでこことは言い切れないのだが、あの二人の共通認識で公園はここだけなので間違いないだろう。

早朝だけあって人影は無かった。

足が痛い。頭もクラクラする。こんな体でよくここまで来れたものだ。

無駄に広い公園の中を無駄だと思いつつ探して回る。

緩い傾斜になった芝生の上にそいつはいた。

黒い髪と紅い目　朝だ。

向こうもこっちに気付いたのか駆け寄ってきた。他に動く人影は無い。

「こんばんわー涼夜さん」

「こんばんわって……もう朝だぞ」

「ああ、ほんとうですねー」

様子が変だと思いよく見ると目の下にクマがあった。

心なしやつれて見える。

「一晩中起きてたのかお前？」

「はいー、眠って待ってたら悪いと思ってー」

へー、と適当にうなずこうとし、しかしその声は咽元で止まった。

何か変な事言わなかったかこいつ？

そんな俺の疑問が口から出るより早く、朝は俺に聞いた。

「ところでマヒルさん見かけませんでしたかあ？まだ来てないんですけどー」

来ていない。つまり死んでいないという事だ。

普通なら喜ぶべきだろうが、俺の心の中はマヒルに対する呆れと怒りでいっぱいだった。

つまり、結局逃げやがったのかあいつは！ と。

ある早朝と過去

くつきりと浮かんだクマ気にも留めず、フラフラと歩く朝の両肩を掴んだ。

「とりあえず座りなさい」

夜ふかした娘を叱る父親の様に、芝生の上に正座させて裏拳で軽く頭を叩いた。

「世界が回っていますう」

「目をつぶれ。そして寝ろ」

見ていて痛々しいわ。

「でもお、マヒルさんがまだあ」

「来ねーよ。もう朝日が昇る時間だぞ？気付けよ」

「いやいやー、きつと昔の天下無敵の剣豪みたいな心理作戦ですよー。眠った隙に音も無く近づいて、毒の染みたハンカチで口を塞ぐ気なんですよ」

もはや心理作戦じゃねーよ。暗殺だよそりゃ。

ついでに言つとマヒルにそんな器用な事は出来ないと思う。バカだから。

「とりあえず、武蔵はそんなことしてないぞ。やったかもしれないけど現代では普通に戦ったってのが相場だ」

「そうですよねー、現代には現代の殺り方があるんですよねー。銃器でも戦車でも持ってこいつてかんじですよー」

「落ちつけ。マヒルはそんなもの持ってこない。来ないのは来る気が無いからだ」

だから休め。再三くり返すが、しかしそんな俺の説得も空しく、朝は一向に休む気配はない。

と言うか何か変なテンションになってる。

完全に徹夜で頭がおかしくなった人間のそれだ。

「じゃ、聞くな。あいつが来ない理由って何だ？あいつが何か仕込んだり作戦立てたりするタイプじゃないのは知ってるだろ？」

「そんなの簡単ですよ」

横に座り込んで聞く俺に、不規則に首を左右に揺らしながら寝ぼけたような声で朝は言った。

「人を殺すのが怖いからですよー」

「……は？」

「人を殺めると言う事はその人の人生を奪う事ですから。罪の意識や良心の呵責でもがき苦しんで足が動かないんですよきつと」

欠伸を噛み殺しながらのたまう。

いや、そりゃそうかもしれないが、お前にだけは言われたくない。

と言つか普通の人間は人を殺す事より自分が死ぬことの方が怖いと思う。

「太陽が明るいですねー」

「朝だからな」

登りゆく太陽をしばらく並んで眺めた。

時折サンタを待つ子供の様に眠いのをこらえる朝に帰って寝るように勧めるが、意地を張っているのか本当に来ると思っているのか、まるで聞いてくれる気は無かった。

ゆっくりとした時間が流れる中でふと気付いた。

「お前ここから動いてないなら飲まず食わずだよな。腹減って無いか？」

「ペコペコですー」

俺も朝飯がまだだ。

コンビニでも探そうと立ちあがって歩き出した。当然朝は付いて来る気は無いので俺一人での買い物だ。

三回も来たというのに周りに何があるか知らないと言つのも不思議な話だ。

一度目は死体が見つかった事件のせいで、二度目は強烈なマヒルのイメージと角倉を気にかけていたせいで。今朝は今朝で余裕の無いまま来てしまった。

過去二回とも角倉が酷い目に遭っているのがすごい。片方の記憶は消えているとはいえ、トラウマにならない方がいいが。

そんな事を考えながら見つけたコンビニで弁当を買って戻った。

「……くー」

寝てた。

せめて食ってから寝ろよ。

このまま放置するわけにもいかず、仕方なくタクシーを拾って家に連れて帰った。

鈍い音と同時に後頭部に痛みが走った。

痛み以上に衝撃で意識が飛びそうになった。

運よく顔面強打だけは避けられたが、腹を中心に体前面を強く打ちつけてしまった。口の中を切ったらしく、苦い鉄の味がじんわりと広がった。

不意に肩を掴まれて起こされた。見知った顔が俺を見てしきりに「ごめんなさい。間違えました。ごめんなさい！」と叫んでいる。

その叫び声のせいか、無駄に強い力で揺すられたせいか。あるいは両方がトドメとなって俺の意識を飛ばした。

来るんじゃないかった。

心の中からそう思いながら、マヒルの腕の中で俺は意識を手放した。

それは一人の少女を描いた物語だった。

お世辞にもうまいとは言えない素人丸出しのホームビデオのような構図で、一人の少女を中心にそれは流れた。

字幕も弁士も存在しない無声映画。

泣き声も笑い声も聞こえてこない垂れ流しの映像はしかし違和感無く俺の頭になじんだ。

何もしない少女だった。

遊ぶ事も、会話する事も、遠くを見る事も無く、何かを望む事も無く、ただ無為に一日を過ごしていた。

その少女の母親も同じだった。外に出る事も無く、外を見る事も無く、娘を見る事も無かった。

ただ一つ違うのは、娘の知らないところで毎日の様に死にかけていた事だった。

ある時は病気で、ある時は夫に殴られて、ある時は自分の食事を何日も娘に与えて、ある時は娘の為に無理な労働をして。

母親は娘が好きだったが、触れる事も声をかける事もほとんど無かった。娘はそんな母が普通ではない事に気付かずに母と同じ空間に居る事だけで満足していた。

世界に音が生まれたのは少女が幼稚園児程に成長した頃だった。

「何ダ力疲れたね」

発音が悪い日本語で母は呟いた。母国語も産まれたの国の名前も、記憶は既に曖昧で思い出せない。

不意に少女が自分を見ている事に気付き、にっこりと微笑んだ。

「ダメでしょう、夜ナノに起きてちゃ」

「ごめん……なさい、おかあさん……」

話しかけられた事に驚きながら、少女はたどたどしく謝った。そんな少女を母は抱きしめた。

母は寒いのに裸で、褐色の肌のいたるところに痣や傷があったが、少女は気にせずに伝わってくる体温を感じた。

「ごめんネ、母サンあなたと一緒にられないノ」

少女を放し、母は傍らで横になっている夫に布団をかけた。頭まですっぽりとかぶされた布団は上下する事も無く、寝息一つ立てぬ夫の体を包みこんだ。

「おかあさんは……わたしがいらないの？」

悲しそうな顔で聞く少女に、いいえと母は首を振る。

「母さんハ、悪い事をしたから、罪ヲ償わないといけないの」

「わるいこと？」

「ソウ、私は悪い女だから。罪ヲ償わないとアナタと一緒にいられないノ。アナタも悪い事をしたラ罪を償ウの。苦しむノ。懺悔スルの。そうしないといけないの。」

その言葉は少女の頭の最も深い部分に深く刻まれた。

母は少女を連れて家を出た。

少し歩くと大きな公園とその向こうに大きな建物が見えた。

「あノ建物に行ッテ、この手紙を見せなさい。母さんが迎えに来るまで、アナタを育ててくれルから」

そう言つて少女に手紙を握らせ、母はその場を後にした。

遠ざかる母の背中を少女はただ見つめていた。

母を追って家に戻れば母は悲しむだろう。怒るだろう。迷惑だろう。
……それは悪い事なのだろう。そう少女は思った。

アナタも悪い事をしたラ罪を償ウの。苦しむノ。懺悔スルの。
そうしないといけないの。

離れていく母の背中はとても寂しそうで、悲しそうで、苦しそうで。
それを見て少女は気付いた。

母は自分の気付かないところで自分を守っていてくれた事に。自分を
愛して愛してやまなかった事に。……何故そんな母が自分とい
てはいけないのだろうか？

かあさんのわるいことってなに？わたしをあいしたこと？わたしが
わるいからだから？

わたしはわるいこ？

アナタも悪い事をしたラ罪を償ウの。

幼い少女にとって善悪とは……ましてや贖罪や懺悔が何であるかな
ど分かるはずも無かった。ただ、自分は幸せになっではいけないの
だと、母のように苦しい思いをしなければならなかったと思った。
母が自分を迎えに来るその日まで、また同じ空間で時を過ごすその
日まで、罪を償わなければならない。

自らの生き方を決めた少女の目に、美しい空が写った。

黒く星一つ無い空を染める様に赤い炎が空を焼いていた。

遠目に自分達の住む家があった方だとだけ分かった。

何て美しいのだろうと少女はその光景に見惚れ、いつか母と二人でこの景色を見ようと少女は思い、しばらくその炎を見続けていた。

少女は待ち続けた。

決して幸せにならないように、誰にも迷惑をかけないように、少しでも早く母と会えるように。

そんな少女に一つの真実が告げられた。母が既にこの世にいないのだと。

少女は悲しみ、唯一の願いを失ったが、その生き方が変わる事は無かった。むしろさらに自分を苦しめる様になった。

時が流れ、母の顔も言葉も忘れてしまいながらも少女は苦しみ続けた。顔はすっかり母のように育ち、体は母のように痣が目立つようになった。

少女は一人悩んでいた。母のようにならなければいけない。母のようにならなければ自分の罪は償われないと。母が己の償う事無く生も少女も捨てた事も忘れて。

少女に声をかける少女が現れたのはそんな時だった。

その少女は何時も優しく少女に話しかけ、笑い、叱りもした。

母がいてくれたらこんな風に自分と接してくれただろうか？そんな

事を考える自分が罪深く思えた。

そして少女は思い出した。

あの夜母がした事を、動かない夫を見降ろす母の姿を。

その日少女は知った。

もつとも自分が苦しむ行為を。母に近づく方法を。

ある変化と拒否

眩しさに首を動かしながら目を覚ました。

ぼやけた頭を正すように今朝の事を思い出す。

朝を部屋で寝かせた後、マヒルの事が気になって試しに廃屋まで来てみたら、「えっ……ええいっ！」という奇声と共に走った衝撃で倒れて「ああ……ま、間違えました！」と言う声を聞きながら意識を失ったはずだ。

そこまで思い出して辺りを確認してみる。場所は廃屋。背中が冷たいがコンクリートの無機質さは無い。ダンボール？それに腹の上には布団代わりなのか見覚えのある服がかかっている。

顔を動かすと自分を見るマヒルと目があった。俺の買ってやった服を着て俺が起きたのに気付くとパツと顔をほころばせた。

「大丈夫ですか唐木さん！？痛くないですか？記憶とか消えてませんか？私の事……憶えてますか？」

いつに無く饒舌で話すマヒルを軽く無視して頭を確認した。

触ると痛みが走るが、傷にはなっていないので出血は無かったのだろう。力が強いようには見えないし、振るというより落とすに近い形であった為に勢いが弱かったのだろう。

などと余計な事を考えながら、嬉し涙を溜めるマヒルの頭をもっ片方の手で掴んだ。全力で。

「お前は何をしてやがんだアホ女」

「痛たた……ごめんなさい、ごめんなさい。てつきり朝さんが来たのかと思っただんです。殺られる前に殺るしかないと思っただんです……」

「発想が物騒なんだよ。しかも平然と実行しやがって……。せめて確認しろ！最低三回。日々の安全は整備、点検、確認からだ」

「はい工場長」

「誰がだ！」

「どどん話がずれていつている気がする。というか、こいつは本当にマヒルか？」

「いつもとテンションが全然違う気がする。いや、間違いなく違う。」

「俺が来た理由も聞かず、こいつが朝の所に行かなかった事に触れようとすると無理やり話を変える。」

「不意にマヒルが話すのを止めて腹に手を置いた。」

「お腹すきましたね」

「お前もかよ。」

「すぐそこにコンビニがあるんです。一緒に行きませんか？」

いやお前、朝と会つのを怖がつてたんじゃ無かったか？

そんな俺の疑問を知つてか知らずか、俺の手を掴んでマヒルは立ちあがった。そういえば俺も腹が減っている。

「結構長く寝てたのか？」

「もうお昼ですから。すみません……でもよかったですよ。この年で人殺しになんてなりたくないですから」

「……………」

「……………なーんちゃって。冗談です。」

本当に、今日のこいつはどうかしてる。そう思いながらも何も言う事が出来ないまま俺は手を引かれて歩き出した。

こいつは今何を考えているんだろう？

人通りの少ない裏通りを通つてすぐの所にそのコンビニはあった。

一見して立地条件が悪そうだが、近くに団地やマンションが集まっている為、集客率は意外と高いようだ。

最初はどこから飛び出すか分からない朝に警戒して俺の後ろに隠れていたマヒルだったが、二人分の弁当　当然俺のおごり　を飼つて戻る頃には隣に並ぶようになった。

楽しそうだ。

上品とは言い難い食べ方で弁当を口に放りながらマヒルは言った。

「何だかスリリングで楽しかったですね」

楽しそう。

そう言って笑うマヒルの顔が何処となく朝とかぶった。いい事も悪い事も、いい結果も悪い結果も、いい自分も悪い自分も……。受け入れて、後悔して、泣いて、反省して、それでも自分を変える事も戒める事も無く、諦めて生きる朝に似ていると思った。

違うだろ。お前はそうじゃないだろ？

「もういいだろ」

気付けばそう口になっていた。

「気持ち悪いんだよニコニコニコ……一回逃げたくらいで変に生き方帰んなよ。朝の真似なんてしたってロクな事ねーぞ」

俺の言葉にマヒルは箸を止めて俺を見た。

片時も崩す事が無かった笑顔は完全に消え、しかしいつも見せる物おじた表情では無く、無表情に近いキョトンとした顔で俺を見ていた。

その表情にたじろぐ俺に表情を変えずマヒルは口を開く。

「ダメですか？」

涙がにじんだ目で、瞬きをする事も忘れて俺を貫いて再度聞く。

「ダメですか？……怖いと思ったらダメですか？無理だと思ったらダメですか？逃げたらダメですか？」

顔を伏せ、俺を見ずにマヒルは続ける。

「ダメ……ですよね。分かってます。今更そんな事言える訳無いですよ。あんなに酷い事をしておいて……虫の良い話ですよ。最低ですよ。嫌な女ですよ。」

「……………」

「…………ダメですか？……ダメだと思いますか？」

「だめだろう」

言った瞬間に食いかけの弁当が飛んできた。

痛くは無いし汚れもしなかったが、すみませんと言って黙り込むだろうと思っていた俺にとってこいつの感情的な行動が俺にとっては意外だった。こいつは感情を相手にぶつける人間じゃない。人を殺す行為も自分に対しての戒めだ。

泣きながら俺を見るマヒルにしばらく言葉を無くし、目を伏せながら俺は言った。

「人に聞いたってだめだろう。大事な事なら尚更自分で決めなきゃ

ならねーよ」

結果なんて終わってみるまで分からない。終わったって何が起きたか分からない時もある。

俺の選択は完全に無駄　かどうかは分からないが何とも予想外の状況　になったが、二人が生きている事が分かってあのままのモヤモヤした気持ちのままよりはましになった。

帰ろうと決めて俺は立ちあがった。

「だいたい俺に聞くのが間違いなんだよ。俺はお前らと違って何にもやってないダメダメな人間だから」

誰かの前で自分を自虐するのも初めてだ。だから何だって話だが。

「あの……」

不意にマヒルが俺を呼びとめた。

「……あの、唐木さんは……」

「何だよ。朝になら何にも言わねーぞ？」

「いえ、あの……」

いつものマヒルらしく伏せ目でオロオロと話す姿に何となく疲れが取れた。

別に癒されたわけじゃないがな。今までのが見てて疲れてただけだ。

「?……あ、俺このまちから出てくことにしたから」

ポツリと言った俺の言葉に、マヒルは声も無く驚いて俺を見た。

「お前も未練がないんなら旅にでも出ればどうだ？」

「え……あつ……」

しばし声にもならない声を上げ、若干顔を赤くしながらマヒルは言った。

「わっ……私も一緒に行つていいですか？」

「は？」

嫌だ。

間を置かずに答えは出た。

どう考えてもこんな危険な奴と二人旅なんかしたくない。

仮に少し前の、殺人鬼だと分かる前のこいつだったら……それも嫌だ。

なら更に前、もしもただのクラスメートとして知りあっていたら……
…やっぱり嫌だろうな。

じゃ初対面……は一番無理だな。ゆきずり女と目的地の無い二人旅
なんか三流小説にしかならん。

結局マヒルと俺は合わない存在なんだろう。

そんな事を考える俺にマヒルが慌てて手を左右に振った。

「す、すみません変な事を言つて……あの、忘れてください……」

後ろを向いて黙り込んだマヒルに背を向けて俺は廃屋を後にした。

昼間にうろつくのにも慣れたものだと思うようになった。

周りの視線にも気を止めずに足を進める。

学生じゃ無くなったからだろうか？ 規律に反しているといううしろめたさが無くなったから。

あるいは、目的を持って行動するようになったから。

マヒルと入ったコンビニにもう一度入り、弁当を二つ飼った。

朝がまだ家にいたら昼飯に食わせればいいし、いないなら明日の朝飯にすればいい。

そう考えながら家路に着こうとし、不意に聞こえたサイレンに足を止めた。

立ち止まった俺の横を消防車が数台通り過ぎた。

振り返り、後方で灰色の煙が上がっているのが見えた。ちょうどマヒルのいる廃屋がある方向。

「いや、ないない」

無いと思いながら無意識に足を返す。

思えばあいつと会ったのも炎越しだった。

「ないないない」

気が付けば走っていた。

燃える孤児院を背にして悲しそうな顔で話すマヒルの顔が浮かぶ。

「ありえないって」

遠目に炎を上げる建物が映った。

数台の消防車が放水を開始しているが、炎の勢いが異様に強く、既に隣接する家に燃え広がっている。

不意に爆発のように炎が噴き出した。孤児院が燃えた時に感じた油の燃える強烈な匂いが鼻に届き、あの時同様に吐き気を感じたが構わずに走る。

「やめろよ」

やめてくれよ。

後ろを向いて黙り込むマヒルの姿がよぎる。

これじゃまるで。

「俺が悪いみたいじゃねーかよ」

ほんの数分前まで俺とマヒルのいた廃屋が音を立てて崩れた。

ズキリ。

刺すような痛みが走った。急に足を止めた勢いで前のめりに倒れた体を両手で支える。

マヒルに叩かれた場所が釘を打たれる様に痛む。

炎を見る雑踏の輪の外で膝をついて脂汗を流す俺に誰も気づかない。

「大丈夫ですか？」

不意に後ろから声をかけられた。

焦点の合わない目で振り向く俺に驚いた声の主が驚いた声を上げる。

「あんた何やってんのこんな所で!？」

「お前も学校サボって野次馬やってんじゃねーよ……角倉」

角倉夕月がそこにいた。

ある料理と意外

ひんやりとしたコンクリートの感触が服を通して背中を冷やすのが心地いい。

「もう大丈夫？」

ビルの壁に寄りかかって休む俺に角倉が声をかけた。

「楽になったよ。ありがとう」

「別に……て言つかあんた本当に退学したの？」

「見ての通り」

私服の自分を指さす俺に、驚きながらも何も言わずに角倉は溜息をついた。

「あんたって」

「何だよ……つかお前は何やってんだ？」

「散歩。母さんが心配性で4日も検査入院させられてたから鈍ってるの」

そりゃ大変だったな。

まあ、無事退院できたってことは何事も無かったわけだ。変な後遺症が出なくてよかった。

よかった。……か。

「どうかした？」

「いや」

今思った「よかった」はこいつの健康では無く俺の精神衛生についてだ。

結局人は変わったようでも何も変わらない。

自嘲するように口の端を僅かに上げ、「じゃあな」と別れを言って歩き出す。しかしそんな俺の後に角倉は続いた。

「まち」

「ん？」

「出るの？」

「まあな」

そこに変更は無い。

俺を取り巻く環境が変わろうと、俺の心境が変わろうと、俺の意志に変わりはない。

「何で出ていくの？」

「さあ」

「わかんない？」

「わかんねー」

ここじゃない何処かへ行きたい。しかしそれでどうなるかと言われ
てもどうにもならない。

慣れ親しんだ場所も、初めて行く場所も、どこも危険で危ない人間
であふれている。

違うのは俺がその場所の事を知らない事。知らなければ変わる事も
無く大きな選択の回数も少なくなる。

「あんたは何処へ行きたいの？」

行きたい、と言うか。

「戻りたい……のかな」

無駄を省いた無意味の繰り返しだった10年間。有って無い時間だ
ったが、今はそこから再出発したい。

戻れないのは分かりきっている事だ。歩く先はどことも知れず、足
を止めれば落下してどことも知れない場所へ落ちる。

それでも今は何も考えずに過していた時期が懐かしい。

もつとも、その前に片付けるべき問題が残っているのだが。

「つーかお前はいつまで付いてくんだ？」

「……もう少し」

3度聞いたが3度そう返され、結局家まで押しかけられた。

「何でいるの？」

第一声がそれだ。

はつきり言って俺のセリフだが言い返せない。ついでに朝がまだいる理由もわからない。

「ああ、おかえりなさい」

「帰れ」

すり寄って来る朝の頭を片手で押さえて俺は言った。

「お腹が空いて動けないんですー」

「弁当置いてっただろーよ」

「うっー」

そんな俺の言葉に足りぬとばかりに綺麗に米一粒までたいらげられた空の弁当箱の淵を指でなぞる。

しかたなく買った弁当をやろうとし、あるはずの重みがその手に無い事に初めて気づいた。走っている間に落としたらしい。

「あー、悪い無い」

無情な俺の言葉に朝はがつくりと頭垂れた。

「この世の終わりみたいな顔するな。なんか買ってきてやるから」

しかたなく一度脱いだ靴を履きなおそうとするが、そんな俺を見て角倉が口を開いた。

「あんた達コンビニ弁当ばかり食べてるの？」

「達って言うな。一緒に飲み食いしてるみたいじゃねーか」

「してないの？」

「してねーよ」

一応一人暮らしの為、自炊は出来る。最初はその気がなかったが、たまに白瀬さんが食材や調理済みの食べ物とそのレシピを持たせてくれる事があったので少しずつだが覚えた。

最も今は悠長に料理している暇は無い。

今にも死にそうな朝を見てそう思う。そんな俺に角倉は言った。

「私何か作ろうか？」

「……え？」

数泊おいて口を開いたときには、角倉は台所で冷蔵庫を物色していた。つまりこいつは料理をするつもりらしい。

こいつも分類上は女に属するのだから料理の一つも出来て不思議ではないが、顔を合わせるたびに俺の頭部をブツ叩く手が料理と言う優しく繊細な行為を行うと言うのがにわかには信じられずにいた。

それを言うなら白瀬さんも白瀬さんで、優しさとは程遠いマッドな研究をする手で美味しい料理が作れるからすごい。

先入観　と言う物だろうか。

と余計な事を考える俺に向かって角倉は握った包丁の先を向けた。

「何か変なこと考えてない？」

「考えてません」

軽い殺気を感じて慌てて答える。

隣で朝も同じものを感じたのか俺の後ろに移動している。

「怖い人ですねー」

「お前が言っな」

傍から見たかぎりでは意外にも良い手つきだった。手慣れているのか動きがスムーズで無駄が無い。

そんな角倉を見守る朝もまたいつもの姿とは違った。

いつもの落ち着きの無い笑顔はどこかに消え、綺麗に正座して座ってぼんやりと角倉を見つめる姿は美しいと思ってしまった。

不意に目があった。

俺の視線に気付いた朝が振り向いたのだが、思いがけずドキリとってしまった。

そんな俺の焦りを知ってか知らずかいつも通りの笑顔を浮かべる朝を見て、溜息を一つ吐き終わる頃には俺の心もいつも通りに戻っていた。

「どうすんだこれから?」

「ふえ?」

キョトンとしながらも俺の言葉を反芻しているのか、カクカクと頭を左右に傾け、大きく左に傾いた状態のまま言った。

「今まで通りですよー」

今まで通り……か。

「マヒルはもういないぞ」

角倉に聞こえないよう声を落として俺は言った。

「生きているのかも分からないが、少なくともこのまちにはいないと思う」

根拠も無ければ確信は無い。ただ納得だけはしていた。

このまちにあいつの心残りはもう存在しない。角倉の前に現れる事も考えられるが、俺に拒絶された時点で人にすぎる事は出来ないと気付いただろう。今の精神状態から見て、傷つくと分かっている行動する勇氣は無い。

あいつは逃げる。

孤児院から出て言ったように、あの時よりも遠くへ。

あるいは生きている事から。

なるべくしてなった。望んだのはあいつだ。俺のせいじゃない。そう納得した。

「何見つめ合ってるの？」

何とも恐ろしげな声が聞こえた。

いつの間にか向かい合っていた俺と朝の間を、割って入るように角倉が座った。

「簡単な物だけどできた」

そのものズバリ簡単な物が置かれた。食べれそうなもの　野菜と加工食品　を雑多に炒めただけのそれは巨大な野菜炒め　のよ
うな物だった。

「いただきますー」

三人で食べるには少々量が多めなそれを目を輝かせながら朝は手を合わせた。意外と礼儀正しい。

逆に角倉は無言で食べ始めた。

「美味しいですねー」

気付けば半分近くを朝が食べ進めていた。意外と大食いなんだな。

逆に角倉はと言えばチョビチョビとゆっくり少食だ。何故こうも対局何だこの二人は？

そう考えてふと思った。

対局　朝とマヒルも自他共に認める対局だった。ならば角倉とマヒルは？

二人とも自分で極端な生き方を強いながらそれを嫌う自分がいて他人　俺ですが　にすぎうとして拒絶された。……そう考える
と似ているな。もっとも角倉は幾分マシな方だが。

そこへまた不機嫌な角倉の声が届いた。

「何？」

今度は角倉に視線を当てていたようだ。「いや……」と慌てて誤魔化して箸を勧める。

「て言うか、何でお前までしっかり御馳走になってんだ？」

「お腹すいたから。作ったの私だけど文句ある？」

「ありません」

そうこうする間に大皿はきれいに空となった。主に朝の箸で。

その朝はといえば、早朝から寝ていたと言つのに気持ちよさそうに寝息を立てている。

「ねえ」

食器を水につけ、流し台に立ったままの状態で角倉が口を開いた。

「小鉢マヒルの事なんだけど」

不意に出たマヒルの名前に、無意識に顔をそらした。

予想はしていた事だ。記憶は消えてもあいつのやらかした事は大々的に報道されて知れ渡っている。

「行方不明って事になってるけど、あんた何か知ってる？」

「……いいや」

「嘘」

間髪入れずに届いた声はすぐ後ろからだった。

振り向いた俺を押し倒して角倉は俺の胸ぐらをつかんだ。

「分かるの。憶えてないけど、あの日はあんたとあいつの事考えてた。……話して。あいつの事」

「知らねーよ。生きてんのかも分からない」

本当に分からない。角倉の問いとは異差があるがそれが答えだ。

聞いても答えが得られないと分かったのか、角倉は俺を放した。

「角倉」

「何？」

「忘れる」

言い終わった直後にまた掴まれた。

「間違えた。忘れてやれ」

「はあ？」

「あいつの為だ。忘れてほしいんだよきつと。自分の事いなかった事にして忘れてほしいんだ。自分も忘れる為に」

「意味分かんない」

俺だって分からない。

ただ、あいつが炎を燃やすのは忘れる為だと思う。自分がいた場所を、自分も、自分を憶えている誰かも。忘れたいんだろう。忘れてほしいんだろう。

「だから」

俺が言いたいのは……と続けようとした俺の言葉はそこで止まった。

眠っていた筈の朝がいつの間にか目を開け、昼ドラを観るマセた小生のような目でこつちを見ているのだ。

遅れて気付いた角倉が慌てて俺から離れた。

「帰る！」

そう言うや否や早足で俺の部屋から出て行った。

「行っちゃいましたねー」

「お前も帰れ」

「まだ帰れませんよー。せめて涼夜さんが死ぬか生きるか見届けるまでは」

「は？」

妙な事を言う朝に声を上げる俺の前に朝は膝立ちで立った。

「憶えてませんか？朝は人の死期が見えるんですよー」

あつたなそんな設定。確か朝の第一声が「あなた死んじやいますよー」だった気がする。あれは木曜の事だから……明日？

「え、俺明日死ぬの？」

「はいー、まだ見えてますから死の影」

いつものにこやかな笑顔で朝は俺の死期を告げた。

ある笑顔と炎

いざ自分が死ぬと言われてもピンとこない。

少ないながらも人の死に携わったといっても、自分の死についてな
ど考えた事など無いのだ。

「つか、そもそも俺が殺されるとして、殺すのがマヒルであるとい
う根拠は何も無いわけで、むしろ常識的にそんな第六感みたいなも
の信じれるかと言われれば……まあ信じられるわけだが。」

若干遠い目でそんな事をしばらく考えた。無意味に。

死にたくは無い。

10年間を本当に無意味に過してしまったのだからこれからの人生
は慎ましいながらも平穏で幸せにあるべきだ。

「一日家から出ないのもアリか……」

「じゃ朝もここにいますよー」

「お前は出てけ」

後ろで騒ぐ朝に振り返らずに言う。

「うっー。でも心配しなくても大丈夫ですよー」

「何がだよ？」

「涼夜さんは朝が守りますからあ」

いきなり言われて面食らった。

固まる俺を朝にそつと後ろから朝は忍び寄り、

「えーいつ！」

手に持ったフライパンを勢い良く振り下ろした。……のを俺は受け止めた。

二回目だからだろうか？とつさに体が反応した。

「おお、凄いですー。涼夜さん実は達人なんですねー」

「すごいですー、じゃねーよ。金属を振り回すな。殺傷性あるんだぞ」

「人を生かすって難しいですね」

「そう思ってたのはお前だけだ」

頭に拳骨を落としてフライパンを没収した。

殺すべき人間は殺す。殺すべきでない人間は殺さない。殺さなければ何をしてもいい。とか思っているんだろうか？

なら逆に……。

「なあ朝」

「はい」

「お前はマヒルは生きてこのまちにいてると思って……確信しているんだよね？」

「はい」

自信たっぷり。何を当たり前の事を……と言いたげに朝は頷いた。じっとしていてもしょうがないのは分かっている。死ぬほど後悔する。でも行けば死ぬ……かも。

でも、やっぱり行かないといけない。朝の時のように逃げれば、俺はこの10年を永遠に繰り返す。

気付かずに力の入っていた手を緩め、しかしすぐに強く握って朝の前に立ち、

「朝」

「はい」

「許せ」

手に持ったフライパンを振りおろした。

よく言われているが、歴史にもしもは存在しない。

もしもを本当だと思って生きてきた俺でもその通りだと思う。もしもマヒルが暴走したのが俺のせいじゃないという確証と証拠と根拠がそろっていたとしても、マヒルが死んだと分かったら俺は自分のせいかもしれないと思い続ける。

結果がすべて。

まだ結果は出ていない。

駅へ着いた。

ここへ来ると思った理由は無い。まちを出る道なんていくらでもあるうえ、あいつに電車賃があるとは思えない。

ただ、俺ならここから出ていく。より遠くへ。

そう思ったただけだ。

限りなく低い可能性にかけながら駅の中をひたすら走る。町と街の境を何度も往復するが、特徴的な褐色を発見する事は無かった。

不意にサイレンの音が聞こえた。出来れば一日に何度も聞きたくない音だ。

廃屋が鎮火されたかと思ったが戻る時にサイレンは鳴らさない。ついでに向かっているのは街の方というのも妙だ。

嫌な予感がして外に出た俺の目に、黒い煙が上がってるのが見えた。一つではない。数条の煙が街から、振り返ると町からも上がっている。煙、炎。

街から上がる煙の元へ向かった。

まさかと思う。ありえないと思う。それでもマヒルを求めて俺は急いだ。遠目に人ばかりが見える。

燃えているのは小さな店だった。どこにでもあるクレープ屋。

見覚えがあった。朝とマヒルに連れまわされて訪れた店だ。三人分俺がおごらされた。次に燃えていたのは本屋。たこ焼きの販売者、映画館、ゲームセンター、ブティック……。

どれもついこの間来た所だ。マヒル……なのだろう。

生きている。

全てを消して全てを忘れようとしている。

次は何処だ？何処へ行けば追いつく？

考え、すぐに思い至り、走った。

私服で来たのは二度目だが、今は気にならない。

まだ夕方だと言うのに人の姿は無かった。集団下校でもしたのか……まあ今は関係ない事だ。

通い慣れた　とは言えない時間だが　校舎は無機質で暗く、何か出そうな雰囲気……むしろ出てもらう為に来たのだからとっと出てもらいたいものだ。

教室を通り、少し考えて屋上に出た。

最初に目についたのは燃え盛る炎だった。

錆ついたドラム缶の中で、大小不揃いの木材を燃やしながら火の粉が踊る。それだけならいい。自然法則的になんら問題は無い。ただ、それが学校の屋上と言うのが社会的に問題だ。

そしてそれを挟んで俺と向かい合っている少女もまた社会的に問題のある人間だ。

「あ……」

俺を見てマヒルの口から音がこぼれた。

しかし開いた口はそれ以上何も言わず、俺もまた何を言えばいいのかわからず閉口した。

完全に日が沈み、炎がより一層俺とマヒルの顔を照らす。先に口を開いたのは俺の方だった。

「マヒル」

「はい」

「そっち行ってもいいか？体冷えちまつたんだ」

「どうぞ……」

迷う様子も拒む様子も無く、虚ろな目で俺を見ながらマヒルは言った。

そんなマヒルの表情にズキリと胸を痛めながら、視線を外さないように鞭打ってマヒルへと歩み寄った。汗で体温の落ちた体に心地良い熱が当たる。

炎に隠れて見えなかったがマヒルの前に一台の机が置かれていた。マヒルの机だろうか？さっき教室を通った時は気付かなかった。

いや、誰の机かなど今は関係ない。机の……マヒルの周りにある物の方が重要だ。木材が焼ける匂いに交じって感じる不快な匂い。……おそらくはガソリン。

蓋を外され、まき散らされるのを待つポリタンクが六つそこにあつた。

驚いた。物騒な物が置かれていたからではない。可燃物を持っている事は店を燃やした時点で分かっていた事だ。ポリタンクはホームセンターで手に入るしガソリンはセルフのガソリンスタンドからでも買ったんだろう。

問題はこれだけの量をいつ揃えたかだ。

今日一日で揃えて燃やしてここまで運ぶのは不可能。という事は以前から校舎を燃やす気で用意していた事になる。

「これだけじゃありませんよ」

俺の視線に気付いたマヒルが言った。

「各階四つずつ同じものが置かれてます」

「そりゃ……大変だったんじゃないか？一人でやるの」

なるべく冷静に、何気ない仕草で俺は聞いた。

「それでもありませんよ？思いついたのは結構前からですけど……始めたのは結構最近ですから」

「最近……」

「知ってました？体育館側の非常階段って、実は鍵が壊れてるんです。そこからなら真夜中でも入れるんですよ。……この学校って、不用心ですよ。ガソリンが入ったポリタンクが放置されてるのに……誰も処分なんて」

そう言つて薄らと笑うマヒルに曖昧に頷くが、頭の中は『最近』が具体的にいつなのかが気になってしかたがない。

俺と会う前なのか後なのか……。でも思いついたのが結構前なんだから俺は関係無い？

「あの……」

不意に袖を引かれて我に返った。

一瞬、心を見透かされたかと思ったが様子が変だ。左手で俺の袖を掴み、右手を自分の胸に当ててソワソワと目を左右に泳がせている。

「あの……唐木さん、は……油臭い女は嫌いですか？」

その瞬間俺の思考は凍結して砕けた。

「は、はは……ははははは……」

「ああっ……わ、笑わないでください……」

力無い手で、あわあわとしながら俺の服を掴む。

何となく大丈夫な気がした。

「違っんです……これは一般的な好意とかそういうものではなくて……。単純に嫌いか嫌いじゃないかのその……」

顔を赤くしてしどろもどろに話すマヒルが校舎を焼くなどと言う大それた事をするように見えない。

そんなマヒルを落ちつかせるように、マヒルの手を掴んで言った。

「心配すんな。俺結構お前の事好きだ」

「えっ……ええ!？」

逆に驚いて奇声を上げたが手は放した。

「落ちついて物静か。勝手に家に押し掛けたり、眠ってる時に叩かない。変な実験の材料にしなけりや神出鬼没に現れないしタダ飯も食わない」

「はあ……」

中盤から後半にかけてどう反応していいのかわからない顔をマヒルはした。改めて思うと俺の周りに碌な女がない。目の前のバカを含めて。

何か話が妙な方向に流れた。

話題を変えようとするが、先にマヒルが口を開いた。

「あの……ずっと気になっていたんですけど。どうしてここに来たんですか？私がいるって知っていたんですか？」

どうして？

良心？否、善意？否、正義？否、愛情？否、同情？否、好奇心？否、好意？断固否。

「不安かな」

「不安……ですか？」

心配と言えなくもないが、不安と言うのが一番しつくりくる。

「俺は自分が悪いって結果になるのが嫌だ。自分のせいで何かが起こったり、誰かが怪我したりするのがな」

マヒルが傷つこうが周りに迷惑をかけようが何とも思わない。ただ、俺が関わって俺のせいかもしれない。それがどうしようもなく不安だったんだ。

「優しいんですね」

俺の気持ちなど欠片も気付いていない様子でマヒルは言う。

「違えよ。……昔、俺のせいで人が死んじまってな。俺のせいじゃ無かったって最近になって分かったんだけど、10年間ずっと自分が嫌いだった」

「誰だって嫌ですよ自分が悪い人間だって言われるのは」

「でも俺はお前みたいに償おうなんて気も起きなかった。認めるのすら嫌だったんだよ。仕方ないって言い訳ばかりしてた」

正確には今もその考えは変わっていない。

変わっていないからこそまで来た。でなければただの知り合い相手にドラマのクライマックスみたいな真似が出来るか。

という俺の内心に気付かない事を祈りつつ、マヒルの言葉に耳を傾ける。

「やり直したいですか？誰も自分の事を知らない所で、誰にも悪い人だって言われなくて、私は悪くないって言い続けたいですか？」

正念場。

これで上手くいけば全て丸く収まる。……いや、すでに上手くいっているのかもしれない。

「ああ、俺はこのまちを出る。出てやり直す」

渾身の目力とオーラを絞り出して言った。言い切った。

後はマヒルが乗ってくれば万事解決。こいつとまちを出てどこかの町で小さい家を構えて暮らそう。

こいつがまた誰かを殺したりしないように毎日優しくしてやろう。それで無駄だったら今度こそ俺のせいじゃない。

「そう……ですか」

考え込むように下を向き、再び俺と目を合わせた時にはマヒルの顔には笑顔が浮かんでいた。

「じゃ、やっぱり私とは一緒に来てくれないんですね」

その目を伝う大粒の涙さえなければ。

「何」

何で……？何が……？

続く言葉は自分でも何と言ったか覚えていない。

俺の言葉をかき消すような轟音を立ててドラム缶が倒れた。まき散らされた炎が地面を這い、積み上げられた廃棄物を包んだ。

「唐木さんが悪いんですよ？」

固まったまま動けない俺にマヒルの声が届いた。

俺のせい。俺のせい？

心臓を掴まれたような感覚に俺は膝をついて崩れた。

ある悲鳴と悲鳴

誰が悪いのか、何が悪いのか、悪くなかったのか。

他人事となると愚痴やら文句やらがスラスラ言えるものだが、自分の事の方が思いのほか分らないものだ。

政治、いじめ、環境破壊……。自分は関係ないと思っていても砂漠の砂の一粒に満たないレベルで関係している場合はある。しかしその事に気付く機会はほとんどない。

その時が来るまでは。

落ちた炎は瞬く間に辺りの廃棄物達を飲み込んで広がった。速度と広がり方から見て既にガソリンが撒かれていたようだ。暗かった空が一瞬で赤く染まる。

四方を炎に囲まれた屋上で俺とマヒルはしばらく向かい合った。混乱して目を見開く俺と、そんな俺を悲しそうな目で見るマヒル。先に口を開いたのは俺の方だった。

「何……でだ？」

何がいけなかったのか。言い方か？行動か？俺はお前の為にここまですたというのに。

そんな俺の問いに、悲しそうな声でマヒルは答える。

「だって、唐木さん言ったじゃないですか？やり直したい……誰も自分の事を知らない所で、誰にも悪い人だって言われなくて、私は悪くないって言い続けたい……このまちを出てやり直す　って。……それって今までの事を忘れるってことですよ？捨てちゃうって事ですよね？……私の事なんて捨てちゃうんですよ。思い出すのも嫌な事なんですよ」

「違う！」

それは違う。たと思ひ出す事が嫌だろうと俺は憶えている。いや、忘れることなど出来はしない。そんな事が出来るのなら10年前にやっている。

たとえ自分は悪くないと言ひ聞かせ、仕方ない事だと納得出来ようと、自分のした事を忘れる事など俺には出来ない。

何故ならそれは善くない事であり、やってはいけない事なのだから。そんな悪い事を俺が出来ようはずが無い。だからこうして命の危機があるにもかかわらずやってきたんだ。

「俺はお前を忘れないし否定もしない」

「無理ですよ私は悪い子ですから」

「そんなもんはお前が勝手に決めた事だろう。俺はそんなこと思つて無いし、お前が償いきつて良い子になるまで一緒にいてやつたつていい。だから……」

だから俺と一緒にいこう。

そう言う筈だった俺の言葉は別の声にさえぎられた。

「何これえ！？」

場にそぐわぬかん高い声が響いた。驚きと混乱と悲鳴のまじった声だ。

「何で火事！？タバコ吸いに来ただけなのに！！　　ってそこいるの誰！？危ないから逃げなさい！！」

大声を上げて駆け寄って来るのに気付き、少し遅れて振り返ろうとするが、その前に俺の横をポリタンクを持ったマヒルが通り抜けた。

鈍い音がした。

続いて誰かが倒れる音が聞こえ、俺が振り向いた時にはスーツを着た女性の上に乗るマヒルの姿があった。俺が声を上げる前に手を顔に当てるが、何もせずすぐに放した。

「マヒル」

「……行ってください。捕まったら悪い子になっちゃいますよ？」

そう言っただけ自分の後ろにある扉に手のひらを向ける。

遠くでサイレンの音が聞こえた。誰かが通報したらしい。消防の人もとんだ一日だ。

立ちあがり、そんなこと思っただけで軽く笑った。

立ちあがったまま俺は動かない。

「行かないんですか？」

「お前と一緒に良い」

「嬉しいですけど……私はいけません。私が幸せになったらあなたが不幸になります」

「ならない」

「言い切れますか？」

無理だ。

たとえこいつを救うためだとしても俺のやっている事は犯罪者を匿う行為。いや、それはある程度覚悟の上だが、あくまで一時的で後腐れなく終わる事を目標に行動している。

結局俺は何だかんだいって俺はこいつと寄り添いあって生きる事なんてこれっぽっちも考えちゃいない。恋愛？逃避行？新しい生活？そんなものこいつを釣る餌だ。「毒があるから食べませんでした」って理由を付ける為に釣って最終的に迷わずリリース。

そんな俺が不幸で無いと誰が言いきれるものか。

そんな俺の内心　ひょっとしたら顔に出てたかもしれない　を知ってか知らずか、何も言わない俺に「もういいです」と呟き、その手に持ったポリタンクの蓋を開けた。

「勝手ですよ……唐木さんも角倉さんも」

ポリタンクがひっくり返り、下にいる女性にガソリンがかかる。それを気にする事も無くマヒルは流し続ける。

「かまってくれなくてよかったのに……いきなり現れて友達になつてくれて……。苦しいくらい嬉しくて死になっちゃうのに、何て事無いように笑いかけて……」

固まったままどうしていいか分からない俺の前でマヒルはガソリンを撒き終え、今度はそのまま服を脱ぎだした。俺が買ってやった服だ。

乱暴に脱ぎ捨てて下着姿になり、俺が見ているのに気付いて顔を赤らめながらもその服をガソリンの池に沈めた。

「訳アリって分かってるなら最初から声なんてかけないでください。プレゼントなんてしないでください。何も返せないんです！私は自分から何も持つてないんです！自分から捨てちゃうんです！！」

「何も返さなくていい。俺はお前がこれ以上取り返しのつかない方に行つてほしくないだけだ。角倉も……いや、まあ、あいつは見返り欲しがってるけど些細な事だから大丈夫だ」

「……私は今のままがいいんです」

「どれだけ言つてもか？」

「信用が出来ないんです」

風が吹いた。大きく炎を揺さぶるが、マヒルの撒いたガソリンに引火する事は無かった。

「言葉も行動も全部……私には人が信じられません。私が信じているのは、自分が苦しむ事で罪が償われるという事だけ。自分は信じられなくても、痛みと苦しみとそれを感じる私だけは信じられる。それだけでいいんです」

そう言ったマヒルに俺は何も言えなかった。こいつには何も届かない。嫌がおうにもそれが理解出来てしまった。

結局こいつも俺と同じだ。自分勝手な理論で人を遠ざけ、勝手に自分を評価してそれを覆す為に突拍子も無い行動にでる。全ては自分が悪くないと言いたいが為に。

不意に小さなうめき声が女性から洩れた。

起き上がり、マヒルを見て後ずさるが、すぐにドアとは反対側だと言う事に気付いた。しかし気付いた瞬間にはもう遅く、それは起きた。突然の突風が先程よりも遠くへ炎を伸ばし、ガソリンの池に炎が灯る。同時に廃棄物の山が崩れ、俺とマヒルの間に小さな壁が生まれた。

「いやぁあああ!!」

女性が悲鳴を上げる。が、運良くその体に引火する事は無かった。それを見て炎の向こう側でマヒルがホッとした顔をする。自分でしておきながらやっぱり死なれるのは怖いんだな。

ふと気付いた。マヒルと炎で分断されたという事は唯一の出口とも分断された事になる。

「サヨナラですね」

悲しそうに言って背を向けようとするマヒル。

「え、ちょっと待って。ここで帰られるのは困るんだけど」

「悲しいですがこれでお別れです」

「本当の意味での今生の別れが待ってるんだけど。その辺に消火器とか置かれてないか見てくれないかな」

「さようなら」

「待てえええ!!」

と言う俺の叫びも空しくマヒルは炎の向こうに消えた。消えちゃった。

いや、分断されたといっても実体の無い炎だ。ジャンプして跳び越えれば何とかなる。……しかしそう思ったのも束の間。そんな俺の考えに気付いたのか、悲鳴を上げていた女性が俺に抱きついた。ガソリンがべったりついた体で。

「待って置いてかないで！連れてって！」

「だあー！何してくれてんだ!!」

「一人で死にたくないもん！」

その段になって女性が誰か気付いた。四月から毎日の様にお世話になった我が担任ではないか。向こうも気付いたらしく驚いた声を上げる。

「唐木君！！」

「俺のせいじゃねー！！！」

かつて無いほどその意味を噛みしめながら叫んだ。

ガソ撒いたのあいっだもん。火イつけたのあいっだもん。いきなり現れたあんたも悪いもん。ぜってー俺のせいじゃねーし。

意味を成さない言いあいというか喚きあいがしばらく続いたが、周りの熱と酸素不足で頭が回らなくなった所で唐突にそれは終わった。下では放水が始まったようだ。しかしマヒルの言うとおりなら各階何か所からも火が回っているはずだ。屋上に水がかかる頃まで果たして生きているだろうか。

「唐木君……」

「何すか？」

お互い火の手の無いドアとは反対側の手すりに移動し、座り込んでお互いに顔も見ない。

「あれ小鉢ちゃんだったよね」

「・・・・・・・・」

隠す義理は無いが言う義務も無い。

「私の責任かな？教師クビかなこれ」

「……しゃーねーっすよ。俺達はただの人間なんですから」

たとえ未来が分かつとも相手が何を考えているかなんて分かりはしない。分からなくて当たり前だ。

不意に風が吹き、正面の炎がこちらに迫った。慌てて手すりの向こう側に身を乗り出すが、そうしたのは俺一人だけだった。先生は動かない。

「
」

「え？」

炎が届きそうになる前に慌てて引つ張り上げるが、やはり意識が無く、ぐったりしている。

「…………たく」

この人が燃えるのを免れた時の時のマヒルのホッとした顔が浮かんだ。今頃気付いて泣いてたりしてんじゃねーだろうなああの馬鹿。

したを見降ろすと背の高い木々が目に入った。高いと言ってもせいぜい二階の窓を僅かに越える程度だ。最低でも3メートル近くは落

ちる。枝が刺さりでもしたら、あるいは折れてそのまま地面に……。いや、考えても仕方がない。放水が行われているのはちょうど反対側のグラウンドからだ。運が良ければ顔を見られずに家に帰れる。それってとても良い事だと俺は思う。

また風が吹いた。追い風となったその風に身をゆだねて俺は跳んだ。

ある電話と談話

耳障りな電子音で目が覚めた。意識が覚醒すると同時に体中に痛みが走る。あと、重い。

目を開けると綺麗な月と痛々しく折られた木の枝が見えた。重力に引かれて垂れ下がっていた首を定位置に戻す。どうやら仰向けで木に引っかかっているらしい。腹を見ると先生が折り重なって乗っていた。女性に言うのは失礼だがやっぱり重い。

と、一度は鳴りやんだ電子音が再び鳴り響いた。聞き覚えのある音にポケットを漁るとやっぱり携帯だった。あの落下で良く壊れなかったもんだ。さすが世界に誇る日本の技術だ。

表示されているのは見えない番号。まあ、登録されているのは白瀬さんと診療所くらいだから当然だろう。

出るべきか迷ったが、せっかく起こしてもらったので通話に出た。

『あ、やっと出た』

「角倉？」

聞き覚えのある声は角倉夕月のものだった。

意外……では無いな。前から無駄に俺の情報を持っていた女だ。

「どうした？」

『洗い物』

「ん？」

『水につけただけでまだ洗って無かったから』

「ああ」

思い出してみたら確かに洗われてない。いや、さすがに洗ってもらうのもあつかましい気がするが。律儀だね。

応えながら、あられもない姿で気を失っている先生を抱きしめる形で安定させ、俺自身も体を浮かせて枝に腰かける。

「別にいいって俺が洗つとくから」

『何か悪い。勝手に上がり込んだわけだし……。直接話もしたいから、今から行つていい？』

「だめだ！」

向こうが言い終わるより先に言葉が出ていた。

俺らしからぬ焦った声に角倉が驚くのが伝わるが、気にせず俺は続ける。

「絶対に家から出るな。人も入れるな。窓にも鍵閉める。カーテンから顔を出すな。何も見ずにとつと寝ろ」

『……あ、うん。冗談。どのみち5時以降外出禁止だから』

「お前が言つと冗談に聞こえねーんだよ」

という俺の言葉に角倉は小さく息を吐いて黙りこむ。電話越しに、ああ私つてそんな女つて思われてたんだ……と肩を落とすのが伝わった。こいつキャラこころ変わるよな。

「で、話つて何だ？」

さすがにそのまま長話する余裕は無いので俺は切り出した。

『ほら、忘れろつて言っただでしょあんだ。あれ、どういう意味かなつて考えた』

「……」

『忘れろつて事は私、何か忘れた方がいい事があつたつて事？』

不意を突かれて反応が遅れた。当然向こうも感づいただろうが声に出さずに俺の言葉を待っている。

マヒルが何をしたかの記憶は消えていると言っても、マヒルに何をしていたのかの記憶は残っているはずだ。あの時と同様に自分が関係していると思つていても不思議じゃない。

『なんか変。頭の中にぼっかり穴があいてて、それを覗き込むのが怖い。気持ち悪い』

不安気な声で小さくつぶやく。忘れた方がいいと思つて忘れさせたが、忘れたら忘れたで別の問題があるとその時は思わなかった。

憶えているせいで苦しむ奴がいれば、忘れてしまった空白に怯える者もいる。過去は簡単には消えてはくれない。

『あんたは私が何を忘れたか知ってる？忘れてほしって思ってるのはアイツ？それともアンタ？……私が忘れたって思った？』

「みんな」

『みんな？』

「憶えていたら苦痛。憶えてもらってたら迷惑。俺はそれを見るのが嫌だ……って俺の勝手な考えだけだな」

まったくもって弁解しようの無い自分勝手だ。今こいつがモヤモヤしてるのは俺のせいだが、それをどうにかしてやれる自信も勇気も俺には無い。

迷った末に前にしたのと同じ質問を角倉にした。

「お前はマヒルの事どう思ってる？」

『嫌い』

「あ、やっぱり？」

簡単には変わらないか。

しかし続く言葉は前回とは違った。

『バカな事やってるくせに心配されて、名前で呼ばれて。何か贅沢』

「贅沢？」

『贅沢。……別に羨ましいとかじゃないからね』

ツンデレ二度目。最近日増しに可愛くなっていくなこいつ。マヒルが日増しに壊れて行くのに対して。

しかしこいつが朝と同じ事を言うとは驚いた。意味合いは少し違うのだろうが。

それにしても、贅沢ねえ……。

仮にも贖罪願望のあるあいつが贅沢なら、俺はいたいどれだけの幸せを浪費して生きて来たんだろうな？

気付かなかったただで俺は実に恵まれた人間だったようだ。しみじみとそう思う俺に、電話越しに何かを察しているのか角倉は黙ったまま俺の言葉を待っている。

燃える校舎も煩いサイレンも気にならない静かな時間が流れ、しかしそれは唐突に悲鳴と共に崩れた。

「にゃあああああー!!」

どうやら気絶した先生が目を覚ましたようだ。かん高い声が耳元に響き、必然的に電話を通して角倉にも届いた。

『何？今の女の悲鳴』

「実は俺火災現場にいるんだ」

『だから？』

「被害者が錯乱しているんだ」

『だから？』

「一緒に屋上から飛び降りました」

一応嘘はついてない。ちなみに今の俺と先生の体勢は、俺の上に先生が乗り、落ちないように俺が足の間で支えている状態だ。誰かに見られたら誤解されること間違いない。

『怒らないから言つて。今どこで何してるのか』

角倉の声に殺気が宿るが、その声はそれ以上俺の耳に届く事は無かった。

不意に飛んできた先生の左手が俺の手から携帯を弾き落とした。ついさっきまで俺と角倉を繋いでいた携帯はしばしの落下を終えた後、着地と共にひび割れて機能を停止した。

ご臨終である。しかし追悼する間もなく、暴れる先生への対応に俺は追われた。

「もうやだこの職場辞める！こんなの私が望んだ教師生活じゃない！」

「落ちつきましょう。辞めるなんて簡単に言ったらだめですよ。辞めた俺が言つのもなんですけど」

「だっておかしくない！？汗と青春の学び舎が炎上してるんだよ！
！炎上！！教員生活二年目で問題児クラス受け持ってたわーちよつと
ドラマっぽい展開……とか思ってたら退学、放火、殺人、行方不明
に校舎炎上とかハードな事件が続発するし！」

「ある意味ドラマチックじゃないですか」

「私が望んでたのは明るく楽しい学園ドラマなの！！」

「希望通りの人生なんて難しいもんですよ」

いつの間にかお悩み相談みたいな雰囲気になっている。

「俺も無難で平穏な適当生活が完全にぶっ壊れましたよ」

「……お互い苦労するね」

「まったく」

そして何故か友情の様な物が芽生え始めた。何だろうこの状況？

そのままお互いの場所や体勢など気にすることも無く他愛のない話を
して過ごした。燃える校舎は大きな外灯、マヒルの事など忘れ
たように愚痴をこぼして笑いあう。

いや、違うな。俺達は待っている。お互いに意識しているわけでも
なく、示し合わせたわけでもなく、連携も無く、一体感を持つ事も

無く、それでもただ一点の事をこれでもかという見事な共同作業で楽しく談笑をしながら待っている。

一ミリでも遠くヘマヒルが行ってくれる事を願って。

会話が終わるのは唐突だった。

「そういえば先生何で屋上に？」

「んー、会議が一段落してタバコ吸いたくなっちゃって。ほら、この学校って喫煙者に厳しいから見つかると思うとお説教なの」

「会議してたんですか」

「そうなの休校するかだの警備員雇つかだの……って、あれ、私こんな所にいる場合じゃない？死んだ事になっちゃう？むしろ私が犯人みたいなの！？」

叫びながらアワアワと慌てだし、弾かれた様に俺から離れて木から滑り降りた。慣れた動作でスタリと着地するあたり意外と活発な性格らしい。

なんて考えている場合じゃない。

「先生！俺とマヒルの事なんですけど」

「言っわけ無いでしょう！？あんたもパクられたら殺すからね！！」

一瞬右手が教師とは思えぬ下品な仕草をしたようにも見えたが気のせいだろう。腕を振り乱しながら走っていく姿が何となく清々しく見えた。

名前くらい聞いておけばよかったかもしれない。

部屋に電気が付いているのを確認して入ると勢いよく朝が出迎えた。案の定不機嫌そうな顔だ。

「酷いじゃないですかー。女の子をいきなり殴るなんてー」

「悪かった。でもちよつと小顔になってるぞ」

「えっ、ホントですかあ？」

頬に手を当てて鏡に向かう朝に心えずに倒れ込んだ。色々ありすぎてこれ以上動く気になれない。

腕を枕にして眠ろうかと思った矢先、目の前に色白のヒザが降りてきた。目を動かすと朝と目が合う。

「マヒルさんとは会えましたかー？」

行動を読まれていたようだ。しかし怒っている様子は無く、むしろ心配され気遣われているようで惨めだ。

「もういいんだよ」

「いいんですかー？」

「頑張ったんだけどな。今まで怠けてたツケが来ちまったんだ」

あるいは俺がただの一般人でマヒルなど気にも留めずにいれば何も起こらないまま時間が過ぎて行っただろう。仮に撒きこまれても、ちゃんとした被害者のまま、今抱えている気持ちとは違うスッキリと筋の通った怒りや悲しみを抱えていれただろう。

今の俺は角倉や先生を巻き込んでマヒルを暴走させてしまった加害者……とまでは行かないが引き金である事に代わりは無い。

故に思う。

「俺って駄目な奴だな」

「そんな事ありませんよー」

しかしマヒルは言った。

「だって優しいし誰も殺してないじゃないですかー。朝を襲ったのは未遂ですって証言しますから元気出してください！」

「違いーよそこじゃねーよ。」

つつこむべきか悩んでいると突然朝は立ちあがって言った。

「それでは朝は失礼しますねー。行かなくちゃいけないのでー」

ペコリと頭を下げて出て行こうとする朝を「待て」と俺は呼びとめ

た。

「何ですかー？」

呼びとめたはいいが、その先を考えてなかった。言いたい事も特に無い。

困りながらふと思い出し、部屋の隅っこで忘れ去られていた紙袋を朝に渡した。

「まあ、何だ。助けてもらった事もあるし……プレゼント」

「プレゼントですかー！ありがとうございますー」

嬉しそうにはしゃぐ朝を見て、頬を緩ませる余裕が出来た。

「路上で着替えて捕まんなよ」

「はい」

スキップしながら去っていく朝を見送り、再び倒れこんで目を閉じた。

最後にいい事をしたわけだし、今日はもう眠ってしまってもいいだろう。

ある指切と心配

いつかの思い出だった。

幼い俺を幼い角倉が怒っている。今と変わらない光景だが、違うのは俺が笑いながら叱られているという事だ。言っておくが俺はノーマルだ。

「きいてる？」

「おうきいてるきいてる。でもおまえっておこるのじょうずだよな」

「は？」

「かんじょうむきだしっていつの？うちのかーさんとちがってみてたのしいぜ」

「たのしむなー！」

逃げる俺と追う角倉。のどかな光景だ。

ふと俺が立ち止まり、思いついたように言った。

「なっ、あれやろうぜあれ」

そういつて右手を差し出す。その意図を読み取り、しかたないなと言いながら角倉も手を出す。

「にととわるぐちなんていわない？」

「いわねー」

「うそついたら針壺千本飲ーます指切った」

そいやよくやってたなとしみじみ思い出す。

「ま、くちがわるいのは夕月のほうだけだな」

「さっそくやぶるな！」

そして再開される鬼ごっこ。

ひよつとしたら今でもこんな風に笑いあっていたのかもしれない。でもそれは所詮ifだ。

明るい幼少期に反して今の俺はこんなにも暗く泥沼に落ちてもがいている。

角倉は……いやよそう。ちょうど夢も終わる所だ。角倉の事を頭から振り払い、俺は夢から覚めた。

水の流れる音がする。

清流のような癒される音ではなく、上から下へと落ちる生活用水の音だ。薄らと開けた目に、誰かが水仕事をしているのが見えた。

黒い髪を揺らすその女性は水を止め、タオルを取り出して食器を拭

き始めた。後姿だけなので誰かはわからないが、ここ最近の嫌な寝起きに比べれば実にすばらしいじゃないか。幼妻でももらった気分だ。が、普通に不法侵入だよなこれ？

最初に思いついたのは朝だったが、ルームサービスとジャンクフードしか食って無さそうな女に家事が出来るとも思えないのですぐに首を振る。次に思い付くのは白瀬さんだが……あの人が理由も無しに来るとも思えず、思い付く理由が無いので却下。

マヒル……がノコノコ来たんなら殴り倒す所だが、視える肌は白いと、不意に向こうが振り向き、その全貌が俺の目に映った。

「起きたんだ」

角倉夕月がそこにいた。

「お前……」

「来ちゃった」

珍しい照れたような笑顔で角倉は言った。確か外出禁止じゃなかっただろうか？

口を開いたまま固まる俺をよそに慣れた手つきで家事をこなす姿は幼妻……いや押し掛け女房そのものだ。いつもの暴力少女の面影はすっかりなりをひそめている。

「……何で」

「見て分かんない？お皿洗ってんの」

拭き終えた皿をしまい、今度はフライパンを取る。

「あんた夕飯まだ？」

見れば机の上に見覚えの無いスーパーの袋が乗っている。この家を占拠でもする気かこの女は？

「まだなら作ってあげるし、もうすんでたら朝ごはんに……」

「何やってんだよお前ッ！！」

角倉の言葉をさえぎって俺は言った。驚いた角倉が持っていたフライパンを落としたが、構わずに起き上がり近づく。

「っ……ごめん」

身を固くして角倉が謝る。

「勝手に上がり込んで。やっぱ迷惑」

「違い！そうじゃねえ！」

両手で肩を掴む。痛がる程力を込めているのに気付かずに掴む。

「何で出歩いてんだよ！？来るなって言っただろうっ！」

「あ……」

「何かあったらどうすんだよ……。俺、俺……」

気付いたら膝をついていた。角倉も同じようにへたり込んで俺を見ている。掴んでこそいるが両手にも力が入らない。

口を開いたのは角倉。

「ごめん」

小さく消えそうな声で言い、その声を合図に最後の力を失った両腕が重力にあらがえず床に垂れた。

感情に任せて叫んだ事を後悔しながらも、依然として角倉の不用心を責める気持ちは冷める事無く残っていた。

自分自身がまきこまれて入院までしておきながらよく陽が落ちた町を一人で出歩けてものだ。万が一……いや、向こうから来る可能性を考えると高確率でマヒルと遭遇していたかもしれない。

「何で来たんだよ。分かってるだろ今危ないって」

「うん」

「分かってんなら……」

「あんたは!」

さつきとは反対に角倉が俺の言葉をさえぎった。

「あんたは分かってんの?」

胸ぐらを掴まれて引き寄せられる。

「その服何で汚れてんの？何で焦げてるの？何で油の匂いするの？何でケガしてんの？何で私が来た時死体みたいに倒れてたの？」

「関係ねえだろ。お前こそ何で」

「心配だからに決まってるじゃない！！」

鼻と鼻が触れそうになるほどの距離で角倉は言った。逸らせないほど接近した両眼には涙がにじんでいるのが見えた。

お互いに荒い息だけを吐きだすだけの時間が続き、先に頭が冷えた俺が言葉を吐いた。

「悪い」

それだけ言い、また無言の時間が過ぎた。

「学校」

「ん？」

「燃えてた」

「ああ」

「いたの？」

「まあな」

「本当に飛び降りた？」

「必死だったんだよ」

思い出すと汗が出た。トラウマになったかもしれない。ひよっとしたら学生に復帰するのは無理かもと思い、ため息交じりに自嘲する。そんな俺を見て角倉は言う。

「あんた最近変。前から変だったけど、最近もつと変。変わった…
…違う、変わろうとしてる？」

「俺が？変わろうと？」

「上手く言えないけど。前はいきなり休んで、変わって、変わったままだった。でも最近のあんたは、変わって、変わって、変わり続けてる。ちよつとずつだけど」

変わり続けている。

今も昔もそれは突然だった。いきなり出会い、圧倒され、常識とかそういうものが破綻して消えて行った。

昔と違うのはあいつと連続して会って、話して、遊んで、一人増え…いやもう一人増えて、驚いて、迷って、怖くなって、でも嫌になる事は無くて、またこれからも会い続けてもいい　　ってくらいか。

会って変わって、話して変わって、死にかけて変わる。それが変わっていく。あるいは成長するとも言う事なのだろうか？

知らなかったものに触れて新しい知識を得る。誰かと話して新たな価値観を知る。俺が10年間してこなかった事を今更になってはじめている。ただそれだけの事。

それって変わった……いや、変わろうとしているという事なのだろうか？

以前なら嫌だったかもしれない。今も嫌なのかもしれない。でも、仕方ないだろう。もう変わり始めてしまったのだから。

不意に角倉が立ちあがった。

「ごめん。帰る」

そう言っただけで部屋から出る角倉を追いかけて俺は立ちあがった。早足で去ろうとする角倉に追いついて手を掴む。

「人の話聞いとけよ。送ってやるから普通に歩け」

「……ありがとう」

目を丸くして俺を見て角倉は小さく礼を言った。

人目を避けるようにして角倉の家までついた。初めて見るがいい家だ。金持ちだろうか？

「そついやお前帰りどうやって入んだ？つかどうやって出て来たんだ？」

「窓から」

「は？」

聞き返す俺に応えず、慣れた手つきでコンクリートブロックを乗り越えて明かりのついていない窓に手をかけて開けた。本当に俺の言った事を何一つ聞いていない。

もう一度忠告しておこうと口を開き、しかし寸前で別の事が気になってそつちが出た。

「なあ角倉」

「何？」

「お前って俺の事心配してくれてたのか？」

一拍遅れて俺の言葉を理解した角倉の顔が赤くなった。思い出したのだろうか、必死に頭を振って忘れようとしている。

「心配……したくもなる。あんた変だもん」

変ねえ。俺にしてみりやお前も十分変な生き物だけだな。

「あんたもそうじゃないの？」

まだ顔を赤くしながら角倉が言った。

「ん？」

「あいつの事、心配なんじゃないの？」

あいつ……おそらくマヒルの事を言っているのだろう。俺がマヒルの事を心配しているか？当然、もちろんと答えよう。

何をしでかすかも分からない、何を考えているかもわからない、どうなってしまうかもわからない。心配の一つもしたくなって何ら変ではない。しかしいざそう思ってみると不思議なものだ。

自分の事だけを気にかけて行動して来た筈なのに、マヒルの事を心配してきたと自然と受け入れてしまっている。元から心配する気持ちがあったのだろう。それがいつからなのかは分からないが、俺はあいつの事が心配だったらしい。

マヒルだけじゃなく、朝の事も角倉の事もきつと。

ああ、そうか。俺……こいつらの事が心配だったのか。

悪い気はしない。変わったからだろうか。でも、

「実感ねーなー」

「え？」

「何でもない。よく分かんねーや」

「何それ」

はつきりしない俺に苛立った声を角倉は上げる。

「心配だからそんなになってまで……ううん、あいつの事はどうでもいい！」

グイと身を乗り出し、俺に顔を近づけて角倉は言った。

「私はあんたが心配。また突然変わるのが怖いし、いなくならないか不安。もう叩いたりしないから。不満を押し付けたり思ったりしないから。今まで通りいてほしい。……って、それだけは憶えていてほしいから」

「……」

「私の勝手だけど、全部本当の気持ちだから。私はあんたの事ちゃんと心配しててあげるから」

「そう言われちゃ無茶出来ねーな」

苦笑しながら言い、不意にパツと気付いた。

ああ、そうか。それだけでいいのか。

難しい話も、あいつの気持ちも、生い立ちも、俺の打算も、弱さも、今の状況ですら関係無い。

俺はお前の事が心配だって事を、心配してくれる奴がいるんだって事を、心配する側がどんな気持ちかを。そして心配される側がどん

な気持ちかを、あいつに知ってもらいたい。

それを知ってあいつがどう思つかは分からない。それでも知る事に意味がある。

何かを知る事で人はほんの少しづつ変わっていくのだから。変わるきっかけになるのだから。

たとえ今が無駄になっても、いつか変わったと自覚した時に、変われると分かった時に俺が言う言葉を思い出してくれたなら、とても意味のある行動になるだろう。

不意に、一人で完結していい笑顔になっている俺を角倉が妙な目で見ているのに気づいた。

コホンと咳払いし、ふと思い出して俺は小指を立てて手を出した。

「ほら、昔たまにやっただろ？」

「憶えてたんだ」

「憶える事が少なかったからな」

指同士を絡ませ、三回上下に振って切った。

「今度会ったら詳しく聞くから」

「あいよ。……ありがとな夕月」

最後の言葉が聞こえていたかは分からない。聞こえるように言った

つもりは無いので、ひょっとしたら風で消えるような声だったかも
しれない。

それでもその言葉に偽りは無い。

ありがとう。と、俺はもう一度呟いた。

ある狂宴と臭い

やる事は決まって多少格好も付けて見たは良いが、どうにも覚悟が決まらないまま時間が流れた。

本屋で立ち読みしたり、借りる気も無いのにレンタル屋に入ったり、とにかく目に着いたもので暇を潰しながら停滞と微速前進を繰り返した。前進している自分を高く評価したい。

気が付けばもうすぐ日付が変わる。

装飾の施された街頭時計でそれを視認し、同時に目的の場所へ来たのだと理解する。おそらく二人が……少なくとも朝がいるであろう公園へと改めて足を向ける。が、その足は不意に発見したものにすぐに止まった。

ファッション性を無視したチグハグな服を土で汚しながら、そいつは草むらに隠れてレンジャーの様に辺りを見まわしていた。

あ、気付かれた。

不意にあつた目をわざとらしく逸らし、私気付いてませんオーラを放ちながらほく前進するそいつを俺は一瞬迷って掴んだ。猫の様に鳴きながら逃げようとする怪生物の名前を小鉢マヒルと言う。

唐突にものすごく来た事を後悔した。

「ごめんなさい」

第一声がそれであった。

間違っではないが、いろいろ間違った後にマトモな事言われても反応に困る。まあ、謝られたからには罪の意識があるんだろう。そう思い、遠慮無く殴った。

自分でも驚くくらいの良い音を鳴らしてマヒルは倒れた。鼻から血が垂れて少女らしからぬあられも無い姿をさらしているが自業自得だ。

「痛いです」

目を瞬かせながら妙な顔でマヒルは言った。子供が小さな発見をして小さくオー！と歓声を上げる時の顔だ。何を考えているかは推察出来ないが、あたりまえだと応えてやる。

こいつは甘やかすと墮落していく事がわかったので厳しく接するのが一番だ。アメはやらずにひたすらムチで去勢。叩き潰すのが母の愛だ。

「痛いです」

「それは分かった」

「痛い………んですね」

「？」

壊れたレコードの様に同じ事を言うマヒル。打ち所が悪かったかと心配して嫌な汗が出たが、次の瞬間マヒルは勢いよく立ちあがった。

「叩かれるのって、やっぱり痛い物なんですね……」

「当たり前だろ」

「少し違うと思ってました。意味も無く叩かれるのと、意味が有って叩かれるの。……ひょっとして何となく叩きました？」

「俺を何だと思ってんだ」

殴る意味。……まあ暴力とか過剰な折檻とかは意味も無く殴ってるってことだろうな。逆に叱ったり反省させたりするのは意味の有る殴打って事か？

だとしたら俺のは後者だ。俺を殺そうとした事を反省させる意味が有り、心配させた事を叱る意味がある。

「俺はお前が俺を……」

……心配させたから。

その一言が言えない。つか、言いたくない。何かに負けた気がする。

「……私何かしました？」

「しなかった事があつたとしても？」

「すみません……」

へたり込んだまま謝られて完全に流れが変な方向に変わった。

「あーうん。とりあえずそのアンバランスな服はどうした？」

軌道修正を含めてとりあえず疑問を口にしてみる。

「親切なお婆さんに家具の一部をいただきました」

「家具？」

「いろんな所から拾ってきて家の一部になされている方です」

「あーいるいるそーゆー人」

この町にもあつたんだなゴミ屋敷。意外な発見だ。

「ところで唐木さんはどうしてここに？」

「ああ……朝に会いにな」

別に間違つてはいない。あいつにも合う気で来た。

「唐木さんですか。でしたらその……御一緒にかまいませんか？」

「いいけどよ。一回逃げといてよく来たなお前」

「えっ、ええその……」

歯切れが悪い言葉を目をそらしながらマヒルは言う。

「?」

「本当はまちを出る予定だったんです。その気だったんですけど……」

「けど?」

「……………」

だんまるマヒルを見て何となく予想が付いた。言ってみる。怒らないから言ってみる。

「……………お金借りに来ました」

「お前とうとうそこまで」

「そんな目で見ないでください……。それに借りられなくても私が生きてたら朝さんが死ぬわけですし、勝者の権利として必要最低限の現金と食料と服と下着を貰うくらいはいいんじゃないかと思っただけで……………」

「完全に追剥ぎじゃねーか」

リアルに身ぐるみはごうとする奴初めて見たぞ。

そんな俺の言葉に改めて気付いたのか、はたまたようやく気付いたのか、マヒルは胸をおさえて天を仰いでいる。

不意に明るかった月が雲で隠れた。木々で覆われて隔離された公園は暗く、気休め程度に一本置いてある外灯は調子が悪いのかチカチカと不規則な点滅を繰り返している。

「…………あの」

遠慮がちにマヒルが手を差し出した。

「手を握ってもらっていいですか？」

「は？」

「その……唐木さんの姿を見たら急に怖くなってしまって……。力が入らないんです」

足を僅かに震わせて言うマヒルに、少し考えて俺はその手を握った。

「俺のせいなら仕方ねえか」

暗い公園の奥へと俺とマヒルは歩き出した。

当然の様に人気は無かった。時間と治安を考えれば妥当であるし、いてもらっても非常に困る。

マヒルが口を開いたのは公衆トイレの前を通る頃だった。

「私の事……気持ち悪くないですか？」

悩み悩んで聞いた事なのか、それとも単なる思いつきか。あまりに唐突すぎて判別しかねるそれに、俺は迷わず否と答えた。

「べつに思っちゃいねーよ」

「本当ですか？」

「基本的に自分主観だからな」

「？」

首を傾げるマヒル。

「相手がどうかより自分がどうかの方にしか興味がねえから。相手が変わらその変な部分に俺が関わっちゃいないかの方に気が行っちゃうんだよ」

「えーっと……。とにかくよかったです」

理解を諦めてくれてうれしいよ。しかし……、

「あれ？何でチョット離れるんですか？」

「気付いてないかもしれんが、お前臭いぞ」

雷に打たれたかのような衝撃がマヒルを駆け抜けてマヒルは固まった。

油、泥、生ゴミ、その他色々な物が付着して放たれる異臭は実は結構こたえていたりする。風呂に入れる状況じゃなかったのを分かつ

ているから我慢してはやっていたが。

と、ショックを受けて石化していたマヒルの硬直が解けた。

「ちょっとお風呂に入って来ます」

フラフラとしながらトイレへ向かって歩き出す。

「まで！そこは風呂場じゃない！一緒に付いてる時もあるけど今は違う！」

「放してください！このままじゃ乙女としての純情が……」

「までまで、お前がやろうとしている事は人としての尊厳を失う行為だぞ！」

約10分ほど、自殺志願者を止めるような必死の説得で何とか勢いだけは消えてくれた。

「たびたびすみません唐木さん」

「気にするな」

もう深い部分で諦めた。

「唐木さんは……」

「ん？」

「何で朝さんに会いに？」

「終わらせに」

「何をですか？」

「無駄な足掻きだよ。俺のな」

もう疲れた。いい加減終わらせてもいい頃だ。

不意に、マヒルの臭いとは違う匂いが鼻に届いた。同時に隠れていた月が顔を出す。闇で隠れていたものが徐々にその姿を現わしていく。

足元に染みがあった。

一つ二つと続いたそれは水溜りを作って島を浮かべていた。僅かに脈打つその島の上にそいつはいた。俺が買ってやった服をだらしく着こなし、黒髪を赤いマールブルにデコレイトしてストリートとは180°違う木々の前で美しく踊った。

「こんばんわぁ。お待ちしてましたよー」

変わらず目の下にくまを作りながら朝は言った。圧倒的な光景に俺もマヒルも言葉を失う。……かに見えたが、この雰囲気を見事にブツ壊してマヒルが口を開いた。

「ひよつとして……見てました？」

何故その質問に至ったか非常に謎だがマヒルは聞いた。

「気付いてもらえなくて寂しかったですよー。声もかけずらかったですし。私も乳繰り合いたいですー」

「……ポツ」

「照れんな。記憶改ざんすんな」

軽く叩くと朝に向かってかけだした。

「もてあそばれました……」

「災難でしたねー」

何でこいつらここまで息合ってたんだ？お互いに嫌い合ってるんじゃないのか？殺し合う為に会ったんじゃないのか？

そんな純粹な疑問など気付きもせず朝はベンチを指さして提案した。

「とりあえず座りましょうかー」

俺がいる時でこの二人が会うのは3度目だが、案の定またしても妙な事になった。

ちなみに今いる場所はトイレの脇にあったベンチ。近くに飲み物の販売機置いてあり、さっきの死体 婦女暴行及び殺害の犯人らしい から10メートルも離れていない。

「じゃ、まずは自己紹介からいきましようかあ」

片手を上げて朝は言った。俺を挟んだ隣で缶コーヒー片手にマヒルはパチパチと拍手する。いつからここはコンパの会場になったんだ？

「では私から。朝です名字は忘れましたー。年はたぶん二人と同じかちょっと上くらい。趣味は歩いたり歩きまわったりする事だと思っていますう。ジャンクフードが好きだと思っていましたが、家庭料理も好きな事に最近気付きましたー。あと好きな人は涼夜さんですう」

イヤンイヤンと頬に手を当てながら朝が言う。寝不足でテンションがおかしいのか、「きゃー言っちゃいましたー」と酔っ払いの様に赤くなりながらベンチをガンガンと叩く。

しかしどんだけ己の事を知らないんだこいつは。

そんな朝を気にせず……いやむしろ對抗するかのようにマヒルも続いた。

「小鉢マヒルです。こういう所で飲むのは初めてなので、緊張します……。趣味は掃除や機械修理やお裁縫です。日曜大工もよく手伝っていました。自慢は体丈夫な事です。えと、その……今日は唐木さんねらいで来ました」

言い終わってすぐに朝と同じテンションで奇行に移る。お前がねらうのは俺じゃなくて朝だろう。

溜息を付く俺に二人が同時に視線を向ける。俺の番？

「えーっと、唐木涼夜です。趣味無し、特技無し、自慢無し、最近

家族も亡くしました。嫌いなものは最近増加傾向」

何やってんだろ俺。

そのまま雑談が始まり、朝の海外の話などを中心に話が回った。内容こそR15なバイオレンスアクション大作だったが、朝の和かな話し方のおかげで気を悪くせずに盛り上がった。

当初の目的など忘れて盛り上がっていたが、不意に風向きが変わった。

「そついえば朝さん目の下が黒いですよ?」

「マヒルさんこそ今日は一段と肌の色が悪いですよ?」

笑顔こそ変わらないが空気が重くなるのを感じる。

「ただでさえ充血してるみたいな赤目に生白い肌なんですから心配されますよ」

「何の二オイか分かりませんがどお風呂くらい入らないと変な体液でも出てるのかと思われますよ」

「大変ですな病気キャラが外面にも顕著に出て。健康に気を付けないと怖がられちゃいますよ。病気うつされるかもって」

「清潔感の無い女が嫌われるのは世の摂理ですけど、マヒルさんには無理ですね。何せ汚れ役ですからあ」

先に折れたのはマヒルの心だった。ガツクリと肩を落としながらト

イレの方へトボトボと歩き始める。

「教会へ身を清めに行ってきます」

「だからそこは教会でもねえし神様もいねえ」

泣きながら暴れるマヒルを押さえつけて一緒にベンチに座る。俺の膝の上にマヒルが乗っている格好だ。それが気に入らないのか、自分でやっというて朝が頬をふくります。

「歌を歌いましょう」

「は？」

急に言いだして立ち上がる朝にマヒルの動きも止まる。

「二次会ならカラオケです」

「え」

「二次会ならカラオケです」

「いや」

「二次会ならカラオケだってヘヴンさんが言ってたんです」

あの人はもう……。とりあえず分かったから落ちつけ。

「マイクの代わりにこのナイフを使いましょう」

可愛らしい（？）果物ナイフを鞘に納めた状態で持ち、朝は歌いだした。

見知らぬ国の歌。意味など理解できないその歌を俺とマヒルは聞いた。出だしこそ大人しかったが、途中でノってきたのかテンポが上がり、余計な声まで上げながら朝は歌いきった。

「昔へヴンさんから聞いたつきりなのでうる覚えでしたー」

「こっちは何語かすら分かってないけどな」

「それもそうですね。すみません」

謝りながら朝はマヒルにマイク　　と言う名のナイフ　　を渡した。

「えっと、それでは……昔お母さんが歌ってくれた歌を」

不思議な歌だった。時に悲しく、時に嬉しそうに、時に無機質に表情を変える歌だった。リズムが変わったわけでもなく、さつきと同様にどこの国の言葉かすらわからないその意味は理解できなかったが、その歌とソレを歌うマヒルの姿は十分に魅力的だった。

不意に歌が止まる。

「すみません。歌詞を忘れてしまいました」

「気にしないでください。次は涼夜さんの番ですよー」

「俺もかよ」

振られて驚くが半分予想していたので渋々マイクを受け取る。何を歌うべきか考え、まともに憶えている歌が一つしかない事に気付いた。

いつか音楽の教科書を流し読みしていて目が止まった歌がある。人生の歌だ。

過去なんて嫌な事ばかりだ。未来なんて考えるだけ無駄だ。今何かなんてする必要が無い。やりたい時が来るのを待ってればいい。……と言う内容の不満の一番。

過去を忘れてもいい。未来なんて考えなくていい。今を素通りして行ってもいい。怠けよ若人、眠れ今は。……墮落の二番。

穴だらけの過去。真っ暗な未来。何も出来ない今。貴方に残ったものは何？貴方が得ていくものは何？貴方に出来る事は何？言い忘れたけど私は悪魔。……絶望の三番。

四番目は実は夢でこれから頑張ればいいんだという内容だったがよく憶えていない。したがって三番までしか歌わなかった。

「じゃ、次は私が」

再び朝にマイクが渡った。今度は日本の歌だ。懐かしい動揺を臨場感たっぷりに朝が歌う。続いてマヒル。

マヒルも日本の歌だった。どこか懐かしい……おそらく授業で習った歌だろう。

歌い終わり、俺の番かと腰を浮かせるが、マヒルが向いたのは朝の

方だった。

「今日は楽しいですね」

「そうですねー」

「こんなつもりじゃなかったのに、楽しくて……楽しくて……つい忘れてしまうところでした」

嫌な予感がした。しかし感じた時には遅かった。

「だからこれ以上は……ごめんなさい」

手に持ったナイフを鞘から抜き、逆手に持ってマヒルは振り下ろした。

朝の胸にナイフが突き刺さった。

ある終幕と序幕【ノーマルEND】（前書き）

長い事放置していましたが何とか完結する事が出来ました。

どうしようもない男の書いたどうしようもない話を最後までお楽しみください。

ある終幕と序幕【ノーマルEND】

気付いた時には終わった後だった。

スローモーションで見えるわけでもなく、動かない体に苛立つ事も無く、たいした葛藤も出来ないまま朝が地面に倒れる音を聞いた。

小さな円を描いて口を開き、驚いた目が自分に刺さったナイフを見て固まっている。

「三次会は私と唐木さんで開きますから」

棒立ちで固まっている俺の手をマヒルが取ろうとし、無意識にはらった。

一瞬だけムツと膨れ面になり、残念そうに視線を落とした。

……おかしい。キャラが変わりすぎだとか、脈絡無く人殺すなよとか、女の愛憎に巻き込むとか色々言いたい事もあるが……。何か妙だ。

しかしその思考はマヒルの声で中断する。

「すみませんでした」

「謝んなら殺んなよ。毎回」

顔も見ず、朝からも顔をそらして言う俺に躊躇いつつ、

「はい。でも、一応その……唐木さんの為でもあったんです」

消え入りそうな声でそうのたまった。

俺の為。そう言っただか？この馬鹿は。

「意味がわかんねえ」

「私も突然思っただけですけど……。唐木さんは、このまちから出たんですよね？」

「ああ」

「でも出ないのは、私と朝さんの事が気かりだから……。ですよ？だから……」

だから殺したと？俺のせいにして。

無意識に……。しかし理性を持って拳を握った。こいつは殴るべきだ。価値は無いが理由は出来た。

「だから、いらしたんですよね？……。このままズルズル成されるままに引きずられて、自分でも気付かない間に思い出や幸せが出来てもそれが全て悲しい思い出や重い枷だと気付くのが嫌で。潰される前に捨てたくて……」

手の甲の皮膚が切れた。前歯にでも当たったのだろう。僅かに流れた血を唾液と一緒にズボンの裾で拭う。

前回以上の力で倒されたマヒルが起き上がるのに丸々一分を有した。

その一分をどう使ったかと言えば、救急車を呼ぶでもなく、精一杯の救命措置を行うでもなく。ただ自分の気を静めるのだけに浪費した。

激怒していたわけじゃない。ただ不愉快だったただけだ。俺の考えを的確に、かつ中途半端に当てられた事に。

目の前で横たわっている二人がこのまちでの心残りである事に間違いはない。とつと区切りなり見切りなり付けたいと思っていたのは確かだ。でも、それだけじゃない。

俺がこのまちに留まり続ける程にこの二人は俺にとって大きな存在だ。心配だと伝いたいと、本気でそう思ったから、たとえ少しずつでもここまで来た。

そう言いたかった。が、それももう遅い。一人は顔面を押さえながら酔っ払いの様に立ち上がるうともがき、一人は胸にナイフを刺されて永眠が良くてその一歩手前。どうしようもない。

「……わたし、余計な事しましたか？」

ようやく起き上がったマヒルが聞く。酷く耳障りだ。

上っ面の言葉だったわけじゃない。謝罪の心が足りないわけじゃない。反省が薄いわけでもない。ただ、俺の為に善意でやったと言うその態度が気に入らない。

まるで、俺が

「唐木さんは悪くありませんよ？」

俺の心を見透かしたのか、元から予想していたのか、自信満々かつ無邪気にマヒルは言った。

「だって私の意志で私がやったことなんですから……悪いのは全部私です。だから、辛いのも苦しいのも私が全部引き受けますから。……唐木さんは気にせずに幸せになってください」

こいつは本気で言っているんだろうか？

過去に多くの人間を私情で惨殺しながら修行僧のような自戒の精神を保ってきたのが小鉢マヒルと言う人間だ。殺人すらも自分への懲罰行為として自分を戒めてきた。今こいつが言った事は過去の自分の否定だ。

苦しみは何かの為の代償ではなく生きるべきでない己への当然の罰。そう思っていた頃のマヒルは既にいない。今ここにいるのは殺人を正当化して自分を評価してもらおうとしているバカだ。

「何でそんな顔をするんですか？唐木さんは悪くないんですよ？関係無いんですよ？……ひょっとして、足りないんですか？唐木さんと話すには足りませんか？もつと苦しまないとダメですか？もつと悲しんで苦しんで辛い思いをすれば、そうすれば……」

「無理ですよ」

勢いよく飛び出していたマヒルの声が消えた。

瀕死の魚の様に口を僅かに開閉させながら目を見開いてその声の方を振り向く。

「だって悲しんでないじゃないですかぁ。苦しんでないじゃないですかぁ。涼夜さんの為にやっただって誇らしそうに胸を張ってるじゃないですかー。ね？　嬉しそうに人殺してんじゃねえよ」

見下すように睨みつけられてマヒルの足が一步二歩と退がる。死人でも見るような　実際死人の筈の人間なんだが　を見るような目はあるいはソレを通り越してどこか遠くを見ているのかもしれない。

俺自身もそうしたいが、その目は離さずにしっかり見ていた。砂を掃いながらのんびり立ち上がる朝の姿を。

「ヘヴンさんからもらった防刃コルセットです。肩が露出出来るのが女性に人気だそうですよー」

いや、知らねーよそんなトレンド情報。

冷静……かどうかは分からないが、気の抜けた朝の言葉で幾分か落ち着きを取り戻した。同時に感じた違和感の正体に気付いた。これまでであった吐血出血の残酷シーンがさつきは無かったんだ。

不意に、自分に刺さっていたナイフを玩具の様に弄くっていた朝の動きが止まった。固まったままのマヒルから目を離して俺を見る。

「ひどいなあ涼夜さん」

「え？」

唐突に言われて間の抜けた声を上げた。リアルに分からない。俺が

何かしただろうか？ いや覚えはない。むしろ、何もしなかった……。

「私の事を見殺しにしたじゃないですかあ？」

見殺し。いや、見『殺し』ってアナタ。

「それカウント入るのか？」

「気分によりますけどー」

気分で抹殺対象にされても困るんだが。

「いいのかそれ」

「いいんですよ。だって判断基準が私だけで明確な理由とルールと義務をもって仕事してるんですから」

「仕事なんだ」

「アイアム労働者です」

笑顔で胸を叩きながらもナイフは俺を向いている。非常にシニールなのだが笑えない。笑顔で人を殺すのがこいつだ。

逆に何を考えながら人を殺してるんだろうか？ つか、

「ひょっとしてお前俺の事嫌い？」

「そんな事ありませんよー。たまに嫉妬でイラっときますけど、基本的に大好きです」

切っ先を俺に向けたまま、朝が笑顔で距離を縮める。笑顔が怖い。

「大丈夫です。私は笑顔です」

意味がわからん。

「知ってます？感情を一つにしていると余計な事を考えなくていいんです。悲しい時も、辛い時も、苦しい時も、健やかな時も、病める時も。……たとえ後悔しそうな時だって、その一色の感情に身を任せていれば簡単に出来るものなんです。余計な事さえ考えなければ」

「わかんねえな」

一蹴する俺に、しかし朝は笑顔を崩さない。

「簡単ですよ。もしもとか、ひょっとしたらとか、だったらいいなーなんていらぬ事考えないで、とっとと済ませて終わるんです。殺したくないケド殺さないとイケないを、殺したくない……あ、殺しちゃったーに変えればいいんです。だからアナタを好きなままアナタを殺せます」

「わかんねえんだよ。何でそこまで殺す事にこだわるのか。何でそこまで楽しそうに生きてんのか……本当に楽しんで生きてんのか。分かってやれねえ」

「いいんですよ分からなくて。すぐにサヨナラしますから」

あの日の……俺の中だけで永遠に繰り返される悪夢を再演するかの

ように朝の刃が俺の胸元に当てられる。

今回は俺の代わりに死んでくれる第三者はいない。……いない？居ない！？

ついさっきまでそこに存在し、急に空気になって視界に入らなくなったと思ったら本当にいなかった。マジでいねえ。こんな状況にもかかわらず250。視界が回るだけ全てを見渡したにもかかわらず発見できない。

「どうしましたあ？」

「いや、マヒル知らないか？」

「え？……ああ。逃げちゃったみたいですねえ」

逃げたか。逃げやがりやがったか。あの女。

「よし追っぞ。つか狩るぞ」

「遠慮しまーす」

我ながらベストな提案はしかし一笑に吹かされた。しかし、まだ策は有る。

「はいはい分かりましたよ俺一人で探しますよ」

不貞腐れた態度でさも相手が悪いかのようにふるまいながら立ち去ろうとする。が、しかし完璧と思われた俺の策も空しく袖を掴まれて引き戻された。

二段構えの策終える。

「何処行くんですかぁ？」

「ま・マヒルを探しに」

「霊体になってから探してください」

朝の手を振り切って逃げようとするが、そんな俺の体をいつもとは違う機敏な動きで朝がとらえる。

背後から手を回され、片手が服を掴んでもう片手でナイフが腹を滑る。逃げようと目もくらが、振りきったそばからまた掴まれる。持久力の割に無駄な反応速度だ。

しかしその拮抗も僅かな時間で終わった。

ミシツという木材が軋む音と共に朝の拘束が緩み、最近よく耳にする何かが地面に落ちる音で俺は解放された。下げた視線にうつ伏せに倒れた朝の上半身が映る。気を失っているのかピクリとも動かないが、それでも握ったナイフを離さないあたりに変な根性を感じる。

更に視線を腰から下半身に這わせ、更に後方へ送るとさっきまで行方が分からなかったマヒルの姿があった。何処で拾ったのか、バツト程の木の枝を杖にして肩で息をしている。

「生きて……ますか？」

「まだ足はあるな」

「よかった。……じゃ歩いて逃げられますね」

そう言つて杖にしていた枝を持ち直して斧の様に振り上げる。当然起こるであろう残酷なシーンを察して慌てて後ろから抱き止める。

「……あの、放してもらえないでしょうか？」

暴れるでもなく、ただ振り下ろす為にマヒルは力を入れる。しかしそこは男と女であり、疲労しているのもあつて俺の方が優勢だ。

「放したら朝を殺すだろ」

「死んでほしくないんですね」

「お前が人を殺すのが嫌なんだよ」

「今更そんな事言わないでくださいよ。もう……何人殺したつて同じですよ」

不意にマヒルの力が緩み、バランスを崩しかけた。それでも無意識の間に枝を掴み、マヒルの手から奪い取った。

「違うだろ」

マヒルの手を取り体を引き寄せる。勢いが強すぎて抱き合う形になつてしまつたが、むしろこの方が拘束出来ていて今はいい。

驚いて見開くマヒルの目を視界いっぱいには捕えながら俺は言う。

「ついこの間までそんな事言わなかっただろう。人を傷つけるのが嫌だっただろう。誰かを殺すたびに苦しんでただろう。小さな幸せまで全部捨てて良い人間でいようとしてたんだろう。何でやめちまったんだよ」

「……………」

俺の言葉にしばらく呆然としていたマヒルだったが、徐々にその目に悲しみが宿り始めた。

「だって……………」

一瞬俺から目をそらし、しかし俺を睨むようにその目を戻してマヒルは言う。

「だってしょうがないじゃないですか。苦しんで、悲しんで、惨めな思いをして自分を戒めたって、心の中は嫉妬とか欲求とかどんな汚い物で溢れて行くのが分かるんです。そんな自分が嫌で、また自分を戒めて、でも消えずにまた溢れて……。こんな私が唐木さんと一緒にいて良いわけがないって思ったら、今までの自分が憎くなつて。変わろうとしてみたり、非行に走ったり、開き直ってみたり。でも、何をやってもあなたに釣り合う事が出来なくて……。もう生きてたってしょうがないじゃないですか」

睨んでいたマヒルの目が今度は悲しそうに風貌を変える。

「唐木さんは一つのきっかけに過ぎないんです。私が求めていたものに少し近い人だったから……。だからそんなに重く受け取らないでください。いつも通り、しょうがないって流してください」

しょうがない。仕方ない。

困った時も、苦しんだ時も、悲しい時も、何気ない時も。確かにそう言って逃げてきた。

逃げて、流して、離れて、忘れて、恨んで……。でも、それでも流しきれなかった。忘れられなかった。離れられなかった。悪夢は繰り返し、腐れ縁には殴られ続け、困った時には親戚のお姉さんを頼ってしまい、意図せず殺し合いにも巻き込まれた。

原因など無かったのかもしれないし、知らずに変なフラグ立てたのかもしれない。考えても意味はない。でも、

「お前はそれでいいのかよ」

「えっ」

その目が一瞬だけ大きく見開かれ、そして揺れた。俺には見えないが、きつと心も同様に揺れているのだろう。

「いいわけねえよな。好きなものもやりたい事も全部自分で壊して捨てるんだから」

後ずさって逃げようとするマヒルを押さえる。

「やってきた事が全部無駄になるんだ。お前だけの問題じゃ無く、お前に殺された奴ら全員の命が無駄になる。お前みたいなクソガキの一時のウサ晴らしに殺された事になるんだ」

小さく「嫌」とマヒルが呟くが気にせずに続ける。

「お前に出来んのか？生まれてから死ぬまで人の迷惑になり続けて来たどうしようもねえ最低な快樂殺人者の糞野郎だって名乗り続けられんのかよ！？」

言い終えた瞬間、頭が空を見ていた。と言っても月も雲も見えず、黒い空を覆い隠すようにマヒルがのしかかって俺の首を絞めている。ジンジンと痛む頭を覚醒させながらその手を掴もうとするが、圧迫は唐突に止まった。

「なんで……」

頬に涙が垂れた。俺ではなくマヒルの両眼から流れる涙がまた一つと俺の頬を濡らした。

「何でそんな事言っんですか？どうしろって言っんですか！？そんな事言われたら何にも出来ないじゃないですか！死ねって言いたいんですか！？」

「忘れるよ」

「……え？」

「嫌な事なんて忘れちまえ。それが無理なら記憶の改ざんとか。ああ、知り合いにそういうの得意な人いるから今すぐ紹介してやるよ」

あまりに突飛な提案だったのか、俺の言葉に付いていけずにマヒルはキョトンと目を瞬かせた。しかし頭が追いつくや否や激しく首を振る。

「それこそさっきのと同じです。今まで私がやってきた事が無駄になっただけです」

「ならねえよ。お前が全部忘れても、お前が苦しんできた事は俺が全部覚えてやる。だから安心してやり直せ」

「でも」

「でもじゃねえ」

言葉にならない声を洩らし続けるマヒルに俺は安心させるように頭を撫でた。

「俺だって完全に忘れられるとは思ってねえよ。それでも一度背負ってる物を降ろして整理する時間くらいにはなるだろうし、そのくらい貰ったっていいはずだろう。もしダメだったって後で気付いたら、その時は一緒に罰を受けてやるから」

だから、これ以上心配かけんなよ。

そう言おうとした俺の口は開いたまま止まった。息をする事も忘れて使い道を無くした口は何の音も出す事は無く、代わりに脳と骨と筋肉が限界を超えたかのような鮮やかな反応をみせた。

反射的だったのか分からないが、次の瞬間には俺の体はマヒルを庇うように抱きしめた。刹那の間も挟む事無く背中に痛みが走る。

激しい痛みがこみ上げてくるが、吐血したわけでもないし呼吸がし辛くなっただけでもない。元々非力だった上にさっきまで気絶していたからしょうがないが、生殺しにされた気分でゾクリとする。

そんな俺の心など知ってか知らずか、その少女は間の抜けた声を上げた。

「もう邪魔しないでくださいよお」

不満げに頬をふくらまし、ついさっきまでの葛藤とか涙とかをこともなげにぶち壊しながら、音も無く無遠慮に俺の背からナイフを引き抜く。

「ほらあその人逃走癖があるじゃないですかー。私体力無いから今ので終わってほしかったんですよ」

聞いてもいないのにフレンドリーにベラベラと喋る姿は全く変わっていないいつもの朝だ。

しかしどこか……具体的には別の女とフラグ回収でゴールインしようとしている男を諦めきれずに口説こうとして結局失敗して「どうせ分かってたわよ」とか言いながら内心全然穏やかではない女のようだ。

などとまったく無意味な事をこの状況下で考える俺もどうかしているが、そんな俺を無視して朝はマヒルを見た。

「で、やっぱり逃げるんですか？私的には愛する人を殺してしまった後悔とかで自殺してくれると助かるんですけどお？」

俺の傷口を押さえながら自分を睨むマヒルに朝は言った。顔は笑っているが目と声に怒りが籠っているのが分かる。

と、不意に朝の体が僅かに崩れた。ワンテンポ置いてナイフを持っている手で頭に触れる。こいつもこいつでけっこうダメージを負っているようだ。しかし振り切るように朝は口を開く。

「それで、どうするんですかぁ？マヒルさん」

「……逃げます」

その答えに不満げに朝は溜息を吐いた。しかしマヒルの言葉は続いた。

「貴方みたいな人は嫌いだし、関わりたく無いし、唐木さんとも関わってほしくないし、死んでほしいし、二度と会いたくもないと思うので唐木さんと逃避行を貫かせてもらいます。この糞女」

立ち上がり、勢い良く宣言したマヒルの姿に、俺はおろか朝までがポカンと大口開けてバカ面をさらしてしまった。

しかしそれも束の間の事で、俺の傷口を押さえていた手で手を掴まれ、痛む体の事などお構い無しに走り出された。正直めちゃくちゃ痛くて男泣きしまくりだが、文句を言える立場では無いので閉口しておく。

ちなみに朝と言えば、しばらく俺とマヒルの逃避行を見送った後に思い出したように声を上げた。何を言っているのかは聞き取れなかったが、おそらく呪詛でも唱えていたんだろう。

と、終始無言で走っていたマヒルが話しかけて来た。

「あの、こんな状況ですが聞いていいですか？」

「何だよ」

「何故助けてくれたんですか？何で来ちゃったんですか？どうして私の事なんか気にかけてくれるんですか？」

矢継ぎ早に三つも質問されてしまった。まあ、答えは一つだから手間はかからないが。

「心配だったから」

「ほ？」

「滅茶苦茶で何考えてるか分かんねえし、会ったびに何かやらかしてくれるし、ほっといたらどこその路地裏で野垂れ死んだかとみせかけてしぶとく生きてそうで……。まあ、そんなだからこんな風に手を繋いでいたって思ったんだよ」

けっこう軽く言っただつたつもりだったが、気付けば顔を赤くしたマヒルに見つめられていた。その視線が俺の顔から繋がれた手にうつり、唐突に手を離された。

確認の為に言うが、俺は負傷しておりマヒルによって引つ張られる事によって人並みには知れているのだ。そのマヒルが手を放したとなれば、当然俺の体はついてしまった勢いを殺しきれず、見事につんのめって倒れた。

慌ててマヒルが駆け寄って起こす。まあいい。どうせ朝は持久力不足でケガ人だ。多少足が遅れても追いつかれる心配はない。

とかいう俺の考えは次の瞬間ごとく打ち砕かれた。

「みーつけたあー」

聞こえる筈の無い声がありえない速度で近づいて来るの。そう感じて振り返る先に朝がいた。何処で拾ったのか……おそらくは路上放置されていたであろう錆つきサドルが外れてカゴが半分になったママチャリにまたがって一直線にこちらへ突っ込んできていた。

時速はおよそ30キロ前後。進むごとに変な音を響かせながら俺達に迫る。が、所詮は放置されていたポンコツのスクラップである。

「んん、あれー？ブレイキがあああああー」

……

見事なドップラー効果を残して朝は通り過ぎて行った。

「森を通って柵を越えましょうか」

「そうだな」

勝手に自滅したアホは放っておく事にした。しかし問題が片付いたわけではない。なにせ俺は背中に刃物を刺されたケガ人なのだ。と、少し走った所で思い出した。

今まで痛みを忘れるくらい感覚が麻痺してくれていたのだが、血を流しすぎたせいか体の自由まで麻痺し始めてしまったようだ。膝をつき、震える手でかろうじて体を支えながら判断する。

気のせいかな朝の声が聞こえる。それも時を追うことに近づいて来て

いるのがわかる。いくら負傷状態とはいえナイフ装備の殺人鬼に戦って勝てるとは思えない。それでも俺の体は動いてくれそうもない。

「唐木さん……」

心配そうにマヒルが俺の顔を覗き込む。励ましの言葉でもくれるのかと思つたが、よく見たら違つようだ。

「行くなよ」

腕を掴んで膝をつかせる。おおかた少年漫画のお約束的行動でも考えていたのだらう。そうはいくか。

「言つただらう。俺はお前が心配で来てやつたんだ」

「でも」

「知らない所で何やらかして命狙われようが知らねえけどよ、今目の前でいなくなれるなんて死んでも嫌なんだよ。俺が弱虫みたいじゃねえか」

「そんな」

「こればかりは一生憶えとけ。お前は確かに異常で変人で狂つているけど、それでも人を心配して自分も心配されるありふれた女の子の枠に入ってるんだつてよ」

「そんな事言われたら……頑張れるものも頑張れないじゃないですか」

泣いているのか、笑っているのか、うつむいた頭から表情は読みとれない。声から察するに悲しくは無いのだろうか。

どっちにしろ、言うだけ言ったのだから俺は満足だ。そう思い、力の抜けた手で頭を庇いながら地面に倒れ込む。引つ張られるようにマヒルも体勢を崩すが、何も言わずに俺を起こして木に寄りかけた。時間が流れた。痛みも、疲れも、朝の声も、何もかも気にならない程静かな時間だけが流れた。小さな幸せでも感じているんだろうか？それとも死にかけてるってことだろうか？

それを破ったのはマヒルだった。

「唐木さん」

「ん？」

「忘れます。私、全部。嫌な事も、嬉しかった事も、全部どこかに投げ捨てて、貴方に迷惑がかからないようになるまで逃げ続けます。だから……その時まで私の事を憶えていてください」

握っていた手が開かれるのを止める事が出来なかった。立ち上がって歩き出すマヒルを止める事が出来なかった。何か一言でも声をかけてやる事が出来なかった。

後悔が無いと言えば嘘になる。それでもこの選択は良い結果を生むだろう。マヒルとはまた会える。

俺達はまた出会う為に別れたんだ。

眩しさの中で目を覚ました。どうやら寝てしまっていたらしい。

目を開けると見知った人影があつた。さっきまで隣にいた褐色の少女ではなく、赤と黒の少女が。

「おはようございます」

「もう朝か。何ですぐ殺さないんだ？」

「それじゃ苦しんで死んでくれないじゃないですかあ」

「良い性格してるよ」

木に寄りかかりながら起き上がろうとするが、ケツを上げて2秒も経たない間に力尽きた。それをみて珍しく朝が溜息を吐く。

「はあ、何ですぐ逃げようとするんですかあ？」

「死にたくねえんだよ。生憎とな。こちらマヒルの人生を背負っちゃまったんだ。あいつの分まで苦しんであがいてやんないといけねえ」

這ってでもこの場から逃げようとする俺に、朝は再度溜息を吐いて言った。

「じゃ、生きてください」

「……え？」

およそ目の前の少女からは予想もつかない似合わぬ言葉に、思わず眉を寄せてしまう。

「何ですかあ？その露骨なまでに人の正気を疑うかのような疑惑の目はー。人をイカした殺人鬼か何かだと思ってるんですかあ？」

「自覚がねえとは驚きだ」

「ブーブー。私は別に人を殺すのが好きじゃないんですー。苦しめるのが好きなんですー」

この場合マシととらえるべきか、はたまた余計ダメだと悲観すべきか。そんな事を考えてしまう俺の頭を朝は叩いた。

「苦しんで生きてくれるのなら好都合ですから。せいぜい苦しんで生涯を送ってくださいねー」

相変わらずこの女は何を考えているのかわからん。そう思わざるを得ない。

「さようなら。である事を祈りつつ再会を楽しみにしていますねー」

それが俺の聞いた朝の最後の言葉だった。

5日間入院するはめになった。

事情を聴きに来た警察を憶えていないの一点張りで追いつ返し、こっ

そり侵入してきた記者や好奇心旺盛な情報通を看護士の皆様に追い払ってもらい、背中をベットに付けられないでうつ伏せ過す生活を5日も続けた俺を誰か表彰してほしい。

頼りになったのはやはり白瀬さんだった。個室を用意してもつらったばかりかマンガをどっさりと持ってお見舞いに来ていただいた時は思わず感涙してしまった。

意外だったのは先生で、仕事の終わった後に毎日のようにやって来ては話し相手になってくれた。まあ、半分以上は俺があの人のおバカな話を聞いてた気がしなくもないのだが。

問題だったのは角倉だった。やって来たはいいが、物悲しげにリンゴの皮をむくだけで話らしい話も出来ずに帰る事4回。残りの一回は運悪く俺と先生が少々いかがわしい体勢でケンカしている所に入ってきてしまったのだが、三倍増しの悲しげな視線を向けてその場を去って行った。

ぶっちゃけひと思いに殴ってくれた方がダメージは低かった。

そんなごたごたがあつて退院したその日、俺はまちを出た。

フラフラと放浪して似たような雰囲気のある町を見つけて住み着いたのが2年前。バイトと白瀬さんから貰った金で生活しながら関わってしまった人をほっとけずに助ける毎日を送っている。

あの時の様に傷ついて入院した事もあつたが、今の生活を止める気はない。だって仕方ないだろう。あいつの分まで苦しんで生きてやるって約束しちまったんだから。

ソレを見つけたのは夜中にゴミ捨て場の前を通った時だった。

画面越しによく見る酔っ払いの様に酒瓶の口を指で撫でながら知らない曲を鼻歌で歌っていた。

「何やってんだ？この辺は防犯パトロールの巡回コースだぞ」

「しょうがないもん。泊めてくれるって言ったからついてったのに捨てられたもん」

「だからってせめて屋根のある所で夜明かせよ。そこに公園もあつたろ」

「……公園は嫌い。何でか分かんないけど嫌な気分になるの」

そう言つたそいつは立ち上がつて俺の顔を見た。品定めしているわけではなく、ただ上から下まで一通り見まわした。

「何だよ」

「別に。何となく何か思い出すかなつて。……私って記憶喪失なの。信じる？」

「どうだっていい。それより行くとこ無いならウチ来るか？」

「5万」

殴つた。こっちが取りたてたいわ。

「痛いじゃない。慰謝料として3日は泊めなさいよ」

うるさい酔っ払い女を連れて家路についた。

また色々と起こりそうだ。だがこれから何が起こるかなんて知ったこっちゃない。

一つの出来事が終わろうと俺の物語が終わる事は無い。場所を変え、相手を変え、思わぬサプライズを挟みながら今日も健気に生きていく。

物語は続く。

END

ある終幕と序幕【ノーマルEND】（後書き）

本編完結ですが、まさかの【IF END】が用意されております。
よかったですこちらも読んでいってください。

ある いは あった かもしれない と ある 【I F E N D】（前書き）

これは『ある狂宴と臭い』からの分岐で、マヒルではなく朝の方に先に会たという話です。

ある意味【B A D E N D】です。

何かと無茶苦茶ですが、楽しんでください。

ある いは あった かもしれない と ある 【I F E N D】

しかし、さて、どうしたものか。

無駄に広い公園の中心部で俺は思案していた。目の前には無防備に寝顔をさらし朝が気持ちよさそうに寝息を立てている。周りには張り込み中の刑事よろしく菓子パンと牛乳が袋詰めになって置かれている。

心配してきてやってこの寝顔は若干腹が立つ。

一発叩き起こしてやろうかとしゃがみ込むと朝と目があつた。至近距離から紅い眼で見つめられて不意を突かれたのか固まってしまう。そんな俺に朝は言った。

「寝てません」

「……は？」

「燃料節約と負担軽減の為にこまめにエンジンを止めて休ませていただけないです」

何の言い訳だ。まあ、おかげで脱力できたが。

隣に腰かけると朝から話しかけて来た。

「どうしたんですかあ、こんな時間に独り歩きなんてしてー」

「バカ面下げて寝た奴に言われたくねえよ」

「寝てませんー。あ、眠気覚ましに何かしませんかー？」

マイペースに提案する朝に溜息が出る。緊張感というものが無いのか、あるいは持たない為の意識的な行為なのか。

そういえばこいつ感情表現が豊かに見えて人にぶつける程激しく昂っているのを見た事が無い。

「涼夜さん？」

覗き込む朝に何気なく聞いてみる。

「お前って何でも楽しむ派？」

「楽しむも何も楽しい事ばかりですよー」

「あやしいもんだ」

俺の言葉に頬をふくらます朝を適当にはらう。

よほど腹が立ったのか、グネグネと妙な動きをしながら朝は全身で怒りを表す。

「お前って本当に楽しいから楽しいとか思ってたのか？」

そんな俺の問いに、ピタリと動きを止めて朝は首を傾げた。

「話聞いてましたあ？」

「何だその馬鹿にした目は。俺もよく分かんねえけど……たまに思うんだよ。お前って楽しいと思ってるだけで楽しくないんじゃないかって」

「何言ってるんですかぁ？楽しいって思ってるから楽しいに決まってるじゃないですかー」

そりゃそうなんだろうが。

「じゃ聞くがムカついた時はどうしてる？」

「楽しみます」

「……悲しい時」

「笑います」

「苦しい時」

「喜びます」

「……」

反応に困る。天の邪鬼とかそんなレベルじゃ無く何かが間違っている。

何がいいつをそこまで歪めていったのか。

「何でも楽しいと思って、それでいいと思ってんのか？」

「ポジティブなのはいい事ですよ」

「その反応が信用できねえんだよ。ちゃんと自分の感情を受け止めてんのか？」

不意に笑顔だった朝の顔が曇った。不満げに俺を俺を見据えながら口を僅かにへの字に曲げている。

「何でそんな事気にしてるんですかあ？私の中ではとくにケリがついてるんですけどお」

「考えた事はあるんだな」

「……考えるだけ無駄でした。考えてる余裕ありませんでしたし。悲しい事ばかりじゃ生きていけませんよ」

何処となく、ボンヤリと掴みどころの無かったこいつの話に現実味が入ってきたように感じた。

「そこまでしてやる事なのか？」

「やりたいからやってるんです。何が不満なんですかあ？」

「笑うんじゃないええ！」

再度煙にでも巻くような笑顔を見せる朝に、無意識に声を荒げてしまった。

自らを隠して周りをぼかす煙に似た笑顔が、その考え方、あり方がどこか自分の無気力感に似ていると思ったから……かどうかは分か

らない。単純に笑顔がキモイとか思ったからかもしれない。

何にしても笑って全部済ませようとする事が嫌いだという事に変わりはないのだが。

「何でもかんでも笑顔で誤魔化すなんて事を一生続ける気かお前」

「誤魔化してません。思考の最適化です」

「意味がわかんねえ言葉使うのも無しだ」

ゲンコツを作って軽く頭を叩いてやる。不満げな目は相変わらずだが、トゲトゲとした雰囲気は無い。

近かった顔を離し、隣のどさりと座った。どうやらとことん話す気になったようだ。

「お前さ、マヒルの事を贅沢だって言っただろ。自分のした事を許そうとしてるって」

「言いましたねー」

「お前もそうなんじゃねえの？」

「えっ」

「自分がやってる事を自分がやりたいことだっと思って思い込んで、楽しい事だって笑顔作って、そうやって生きて来たんだろ。どんな形でも幸せが欲しくて」

俺も似たようなもんだっただろう。

何も感じず、何も考えないで時間が過ぎるのを眺めていた10年。腐れ縁に殴られ、自称親戚と奇妙な関係を築き、謎の実験に巻き込まれ、危ないクラスメイトと知り合って、こいつと再開という名の初対面を果たした。

気付いていないだけで他にも巻き込まれたイベントがあつたのかもしれない。

思い返せばそこそこある異様で新鮮な思い出達。俺も結構いい人生を歩んでいるのかもしれない。

「あの」

しばらく間を置いて朝が口を開いた。

「せっかくなので聞いていただきたいんですが。私の両親について」

「興味無え」

一蹴した。

「ええー」

「何だよその顔」

「私に対する興味ってどの程度のものなんでしょうか?」

「こんなもんだ」

両手について朝は沈んだ。いつも通りなようでその実こちらを気にせず感情を吐き出しているように感じる。

こいつのコミカルアクションは素のようだ。

「まあ、いいじゃねえかどうだって」

落ち込む朝に俺は言う。

「簡単に言いすぎですよお」

「俺達10代なんだぜ？嫌んなったらいくらでもやり直せばいいんだよ。そのくらいしたっていい」

たぶんな？

何か言いたそうな、それでいて何を言っているのか分からなそうに、何か考え始める朝を俺は黙って見ていた。

少しして、結局あきらめたのか大きく息を吐く音と共に朝の顔は戻った。

「今時の高校生ってどんなことしてるんですかー？」

「俺もわかんねえ」

「えー」

「分かったら教えてやるよ。無事に転入出来たらな」

「学校変えるんですかあ？」

「平和な町に行きたくなつてな」

「ああ、すいません」

「お前のせいじゃねえよ」

ポツリポツリと話し始め、最終的には雑談になってしまったが、会話は不意にやんだ。

クウーという小さな音が朝の腹から洩れた。

顔を赤くしながら固まった朝は次の瞬間弾かれた様に横に置いてあった菓子パンにかじりついた。半分ほどかじってこちらを見る。

「食べますかあ？」

「いやいい」

「じゃ飲み物は……あつ」

今時珍しいガラスビンに入った牛乳にかけた手が止まった。こちらを向いて困った顔をみせる。

「賞味期限が……切れてます！」

「落ちつけ。そこに自販機あったから買ってきてやる」

絶望的な声を上げる朝に俺は言ってやった。

こいつそういうの気にするタイプなのな。

「一緒に行きます」

「……何だいきなり」

「ほら、私って（ハムツ）涼夜さんの事を（ハムツ）影ながら守る（ハムツ）みたいな（ハムツ）設定だったじゃ（ハムハムツ）ないですか」

あつたなそんな設定。つか今思い出したなコイツ。というか、そういうのは熱心にパンをハムハムほおびりながら言う言葉じゃないと思う。

案の定、一言「別にいい」と言ったら朝は食事を続行した。とりあえずノドに詰まらす前に買って来てやろう。

驚いた事に自販機には先客がいた。

マヒルだ。

何処で拾ったのか飾り気の無い服を着て、どういつ訳か両目をつぶったまま俺の方を向いて礼儀正しく頭を下げる。

「結局来たのか」

「はい」

「その服は？」

「親切なお医者様にいただきました」

「ふーん」

世の中お人好しな人間もいるもんだ。まあ、本当に親切したいのなら窓の無い病院にでも入院させてやるべきだったのだろうが。

そんな事を考えていると俺にマヒルは言った。

「……朝さんと楽しそうでしたね」

見てたのかよ。

「中々タイミングが掴めなくて出て行けませんでした」

何を下らない所で気を利かせてんだかこいつは。

「タイミングが良くても出ていけてたかは微妙ですけど……」

何故か目をつぶったまま　いや、この際それは別にいいが　マヒルにソレを訪ねるべきか迷いつつ俺は言う。

「放りだすのも一つだと思うぞ。誰も文句は言わねえよ。朝だつてその方が喜ぶかもしれねえ」

「朝さんも……ですか？」

「たぶんな。あいつも人を殺すのは嫌なんだよ。お前と同じで。…まあ、何考えてるかはお前以上にわかんねえけどな」

いや、でもマヒルもマヒルで分かんねえし……実際にこっちもどっちか。凡人の俺には同じだ。クソ。

適当にコーヒーを2本……ついでにもう1本買ってその一本をマヒルに投げた。

しかしその缶が手に届く事は無く、受け取ろうとする素振りすら見せなかったマヒルの胸に当たって落ちた。

「あ、悪い。大丈夫か？」

突然すぎて反応できなかったのか、あるいは目をつぶってるせいかもしれない。まあおそらく後者だと思うが、胸をさするマヒルに謝り、落ちた缶を拾おうと身をかがめた。しかし、マヒルの様子がおかしい事に気付いて動きが止まる。

何か余計なことしたか？

「どうした？さっきから動かないで」

「……いえ、ちょっと考え事を」

「そうか。あ、いらねえな貰わなくていいぞ。ついでに買っただけだから気にすんな」

「いえ、そんな……私の方こそ氣を使わせてしまっ……」

首を振り、膝をついて手を出した。相変わらず目を閉じたまま、時間をかけて手さぐりでコーヒー……を通り越して俺に向かう。

閉じた目……いや、それ以上にその歪な作り笑顔で俺を見るマヒルに一瞬遅れて恐怖を感じ、

「ああ、世の中って何でもこう素敵なまでに不公平なんだろうね？」

離れようと体を動かす暇も無く、手を掴まれて引き寄せられた。

「不思議なものですよね？頑張って頑張って身をすり減らして、耐えがたきを耐え、苦しみを受け入れ、受け入れがたきを望んだ果てに懲罰を求めて血反吐を吐く屍をこさえて抱いてきた私が救われなくて、謝罪も罪悪感も捨て去って墮情のうのうと生きて来はった様なお人が私を押しつけて幸せ掴もうなんて可笑しいよね？ゼツタイ」

最後また変なキャラが入った。……というのはさておき。

涙目を開いて見たマヒルの顔はいつも通り、あるいはいつも以上の笑顔だった。さっきまで閉じていた目が今は開いている。しかしそこにいつもの伏せがちでぼんやりとした瞳は無く、病人を通り越して廃人に近い濁った眼球が植えられているだけだった。

案外笑っていないのかもしれない。悲しかったり怒っていたりするのかもしれない。それを堪えているのか、紛らわしているのか、ただ今は塗りたくって乾燥させて焼きあげて貼り付けているだけの安物のくせに一手間かったガラクタの笑顔しか俺には見えない。

「お前、何で笑ってんだよ」

「……楽しいからですよ」

さつきも同じ内容の会話をした気がする。何なんだろうこの究極的にダメな部分ばかりが似通ってしまっている二人は。

そんな事を考える俺の前で、何処から取り出したのか新聞紙で包装された何かを取り出した。果てしなく才チが見えるそれは果たして台所の必需品であり殺人事件におけるお約束凶器の一つである出刃庖丁であつた。

どうやら性懲りもなく俺を殺す気でいるらしいこの女は。

「朝もお前も、物騒なもんばつか次から次へとよく出てくるな」

「自分でもがっかりします。……結局こういう人間なんです私」

片手で取りだした際に切ってしまったのだろう。指から流れる血を見ながら、マヒルは悲しそうな声を出した。それでも顔は笑顔を張り付けたままだ。

「お前がどうかは知らねえけど。俺お前になんかしたか？」

「しいて言うと、乙女の純情を弄んだような……一時の戯れの玩具にされたような……一人で舞い上がってあれやこれや妄想してた私が馬鹿だったみたいなの」

「最終的に全部私事だよ」

「そう言わざるを得ない部分がある事は確かに認めざるをえません」
あからさまに目をそらしながらもサラリと言ってくれやがった。

色々追及したい事があるが、俺が口を開くより先にマヒルは言葉をつづけた。

「それにしても不思議ですね。ついこの間までは仲良しな新婚さんも、情熱的なバカップルも、子たくさん大家族も、三億円当てた人も、アラブの王族も、どんなに幸せな人を見ても何とも思わなかったのに……。今は不幸とか不平等だとか罵詈雑言が高原を走る風のように私の心を駆け巡っているんです」

何つつか、病んでるな。

でも、珍しい訳じゃない。とりあえずそう言うておく。

「いいんじゃないか？そんだけ社会に馴染んだって事なんだから。僧侶やってるわけじゃねえんだから高望みくらいして当たり前だろ」

「でも、失敗するのは目に見えてますから……」

「そんな時は頭でも丸めて転職しろよ。キャラ変えて。いいんだよ嫌になつたらやり直せば　って、さっき朝にも言ったな」

あの時言った通り俺達は世の平均寿命の二割程度しか生きていない子供だ。普通に計算してあと4回人生をやり直せる……とまでは流石にいかないが、一回くらいは確実にやり直せるだろうたぶん。

そんな俺の言葉をどう受け取ったのか、口をへ字に曲げてマヒル

は考える表情になった。

俺の事など忘れてしまったかのように自分の世界に入り、思考がまとまらないのかコロコロと表情を変えて百面相まで始めてしまった。

よし、今のうちに殴つとくか。

残念ながら俺は更生を促す指導者でも迷える少女を導く相談屋でもない。したがって突っぱねて殴ろうと問題無い。

しかし握られた拳は振るわれる事は無く、肩の高さまであがった所で止まった。

「一つ聞いてもいいですか？」

不意の言葉に勢いを削がれながらも「何だ」と応える。

「朝さんの事の方を私より気にかけてるのはどうしてですか？」

そんな気はないつもりだが、そう言われるからにはそうなのだろうか？

でもどちらが気になるかと言われたら確かに朝になるのかもしれない。考えられる理由は、

「あいつの方が先に会ったから。それに、あいつの方がちょっとだけ素直だからかな」

まあ、そんな所だろう。

言い終わってから結論を出し、自己完結して考えを終えた。今となつては考えるだけ無意味だ。自然と何とも言えない顔で目をそらしてしまう。

一方言われたマヒルの方も何とも言えない表情だ。何か考えているのか、逆に考えるのを止めようとしているのか。……いや、それこそ考えるだけ無駄だろう。

「素直に……」

「ん？」

「私も、素直になつていいんでしょうか？」

何とも素朴な疑問が投げかけられた。一度目は誰にともなく、二度目はまっすぐ俺に向かって。

「……いいですか？」

「言ってみるよ」

聞くだけは聞いてやる。

そんな気持ちで聞き手を承諾した俺の耳にあいつの声が届く。

「私は……嫌いなものは嫌いです。嫌いな事も嫌いです。嫌いじゃないと嘘をつくのも嫌いです。世の中嫌な事ばかりです。嫌いなものばかりです。人の事なんか考える前に自分の事を考えたいし、押し付けられるのは嫌いだし……。はつきり言って貴方が好きです」

言葉が一度区切られ、剥ぎ取らんばかりに口を押さえてマヒルが悶える。最後に変な言葉が混じったが……気に留めておくべきか聞かなかった事にしてやるべきか。

と、そこへ頑張って持ち直した　　といつても顔はまだ赤いがマヒルが再び口を開いた。

「と・と・とにかく私が言いたいのは、自己満足で自分をだまして押さえつけている方が周りにかかる迷惑が大きいと気付いたんです。気付いたからこそ自分に正直に身の程にあった生き方で生きていこうと決める事に決めました」

「うーん、何か最後の文法がおかしかった気がするんだが」

「今は決まなくていいんです。曖昧なまま考え続けているまま貴方の前から消えたいんです。でないと……襲っちゃうかもですよ?」

何故だろう、可愛くエロスティックなセリフを貰った筈なのに妙な寒気がする。ああ、不満そうに刃物をいじるのやめてください。マジ怖いんで。

「じゃ、じゃこれでお別れてわけだ。俺は朝のとこ帰るから元気でな」

「はい」

引きつった声を上げる俺とは対照的な柔らかい笑顔でマヒルは応える。

振り払って朝の元に戻りたい俺の手は、しかし想像を絶する握力で

掴まれたまま動かせず、

「でも今のセリフでイラつときたのでやっぱり死んでください」

地上―メートルで固定された俺の目に死刑宣告する笑顔が映った。

あれか？別の人格でも居んのか？一秒前とは違う人間なのか？……
等々疑問で頭が満杯になるのを感じながら、一方で冷静に事態に対応しようとする自分もまた存在した。

「コロコロとキャラを変えるのを止める。本気で怒るぞ」

出せるかどうかかわからんが殺気を込めて言ってみた。

無論この一言で手を放すなど思っていない。会話を始めるのが目的だ。

しかし、意外にも呆気なくその手は開かれた。……かわりに開いた手でビンタをするという行動にうってこられた。不意の衝撃でバランスを崩す。

「お前は」

続く言葉は咽元を出る直前で息と一緒に吐きだされた。驚く間もなく押し倒されて腹の上に股を置かれた。

「怒ってるのは私の方です」

「はあ？」

何を言っているのか分からない。

どう見ても理不尽に命を狙われているのは俺の方だ。

「だって、今は私の話をしているんですよ？……なのに何で朝さんを持ちだすんですか？何で朝さんと比較するんですか？」

「あ」

言われてみればしてた。だって似てるもんお前ら。

「そりや唐木さんと朝さんはラブラブで私が入り込む余地なんて無いかも知れませんよ。だからって私と話してる時まで朝さん至上を見せびらかさなくたっていいじゃないですか」

「してねえしそんな危険思想を持った覚えはねえ」

「そのコーヒーもついなんですもんね。どうせ私なんて片手間で満足する女とか思ってるんですよ」

「聞けよ！」

つい声を荒げるがお構いなしに俺は続ける。これだけは言いたい。

「朝と比べたのは謝るけどお前を下に見た事は一度もねえ。お前が心配で夜中にこんな所まで来たんだ。たまたま先に会ったのが朝だっただけで、お前を先に見つけたらお前を優先してたかもしれない」

「たまたま……ですか。運が悪かったくらいで」

「そんなに不満かよ」

「不満です。だって……だって、惨めじゃないですか!」

怒って……いや、悔しがっていた。顔が、声が、目が、それを物語っている。

「私は悪い子ですよ。悪くて、馬鹿で、異常で、自分でもわけがわからない痛い子ですよ。でもそれはいいんです。今更何を言われても悔しいとも惨めとも思いません。しょうがない事です。でも……朝さんと、私と似ている人と比較なんてしないでください。たまたまとか偶然で選ばないでください。私……違うから頑張れたんです。変だから納得出来たんです。おかしいからそれでも良かったんです。なのに、同じ様に悪くて不気味で変な子と比べられて負けたら私、惨めじゃないですか」

悔しくて悔しくて、行き場の無い悔しさを怒りにして俺にぶつけているんだ。分からなくは無い。俺だって偶然嫌な夢を見たっただけで10年損した。悔しくて仕方ない。ぶつける相手がいないばかりに汗と一緒に霧散しているが確かにある。

でも俺とこいつは違う。俺が悔しいのはその原因が俺に起因している事だ。対してこいつの原因は俺。

俺ダメじゃん。

マジ、ゴメンナサイ。

「……なんて言うか!」

俺を見降ろすマヒルの顔面に燃える拳が炸裂した。もちろん俺の。

「え、え！？」

「お前と朝が同じだ？ふざけんじゃねえよ。確かにあいつは何の前触れもなく現れるわ不法侵入するわ訳わかんねえわの馬鹿野郎だよでも少なくとも自分の事を周りに当たり散らしたり、誰かのせいにしたりもしない。お前より何百倍もマシなただのお馬鹿野郎なんだよ」

馬鹿野郎とお馬鹿野郎。何が違うかと聞かれても全然違うとしか答えられない。

「……結局何が言いたいんですか？」

「お前なんて一生幸せになれねえよ」

少なくとも、自分の幸せより相手の幸せを見てる間はな。結局こいつにとつての幸せってなんだろう？自分でも分かって無いんじゃないだろうか。

20秒は経っただろうか。俺の言葉にマヒルがようやく口を開く。

「……ああ、そうですか。すみません今ので何かが吹き飛びましたすみません。死んでくださいすみません」

両手で握った包丁が俺の頭の上で構えられる。

しかしそれは空を切る事も無く、乱入してきた誰かによって弾かれた。

「ほら言ったじゃないですかあ」

ム力つく笑顔はこんなタイミングでもム力つくものだ。

「この人に何を言っただって無駄なんですよ。贅沢で我儘ですからあ」

しかしそれでいていつもと違う、どこか困ったような、困ったものを見るような、苦笑でもするかのような笑顔だ。ム力つく事には変わらないが。

そんなム力つく笑顔の朝を見て、しばらく呆然としていたマヒルがゆっくりと俺から離れた。

えらく不機嫌そうな顔だ。

「何ですか？いきなり出て来て。空気読んでくれませんか？」

「何言ってるんですかあ？割り込んできたのそっちじゃないですかー」

「話しかけて来たのは唐木さんの方なので今は私のターンです。と
いうか、その話し方不快なのでしばらく黙ってください」

「会ったびにキャラが変わる人にそういう事言われたくないんです
けどー」

何故こうも陰悪な空気を出すのだろうこの二人は。頭が痛い。

しかしいつまでも挟まれているわけにもいかない訳で。とりあえず話が弾みそうな朝に声をかけた。

「おーい朝」

「ちょっと黙っててくれませんかあ」

「……じゃマヒル」

「私は二番目ですか。そうですか」

話聞けよ。

しかしこれでめげるわけにはいけない。

「殺したってどうにもなんねえよ。お前だって嫌だろ。友達殺すのは」

「友達ですかー？」

「一回でも一緒に遊んでんだから最低条件はうまってんだろ」

俺なりの意見だが、たぶん一般論でもそうじゃないだろうか。

「でも無理ですよ。向こうが話聞く気ないですから。マヒルさんを殺さないと涼夜さんが殺されるんですよー？」

「何で常に0か1で考えるんだよ」

頭を抱えながら、二人の間に入るように俺は出た。ほぼ同時にマヒ

ルが包丁を構えて突っ込んできた。怖い……が、好都合だ。

まっすぐ来るなら狙う必要が無い。

型も勢いもなく、ただそこに右足を俺は置いた。同時に衝撃が体を後ろに押し倒す。が、それはマヒルにも衝撃が届いたという事だ。

クッキリと足型のついた腹をさらして仰向けに倒れたマヒルを見てホッと息をついた。

「ほらな。殺さなくても何とかなっただろ」

「ええー」

呆れたような、脱力したような、何とも言えない声を朝は出した。

そりゃトンチにもならないような結果論だろう。でも結果として誰も死んでない……よな？

確認するようにマヒルを見ると呼吸と僅かな振動があった。よかった。

「何でも殺すか否かで判断すんなよ。ちよつと選択肢を増やせば価値観も変わるぞ」

という俺の言葉に、意外にも朝は真剣に悩み始めた。といっても表情豊かに二十面相しながら頭をひねっているのはいまいち伝わってこないのだが。

そんな朝に、少しためらいながらも俺は言った。

「こいつ俺が連れて言っただけか？」

「えっ」

指さしたのは倒れたままのマヒル。

目を丸くする朝に俺は続ける、

「いつもなら関係無えって言って放置すつとこだけど。今度ばかりは、な。放つとくわけにはいかねえからな」

「え、えつと……」

さつき以上に混乱した様子で、うつむきながら声を絞り出す。

「私は殺さなくちゃいけなくて……涼夜さんが殺したくなくて……。私と涼夜さんは友達で、同等で、一対一で同点で……」

「こいつは？」

「え」

うつむいていた顔を上げて俺の指すマヒルを見る。

「こいつも友達って事にすれば一対二で逆転だろ」

「おお！」

ポン……と手を叩きながら驚いた声を朝はあげた。

「あ、でも死にたがってオウンゴールしたらどうしますか？」

「そういうキャラにはならねえよコイツは。ま、融通はきかねえけど話くらいは聞くだろうからな。時間かけて話さーな」

なんて楽観視を俺はまだしていた。

先に気付いたのは朝。驚いた顔をするそれを見て俺もそれを見た。

ゆっくりと起き上がるマヒル。何を考えているか分からない目。しかし、それ以上に存在感を放ちながらそれは顔を出した。

ナイフならまだよかった。包丁や鉈も同位。

たとえ常用外の凶器としての使い方をされようが、それは普段日常で扱うものであり、間合いも危険性もある程度把握している。まして、女子供が振るうとなれば逃げる事もたやすいだろう。

でもアレは違う。

日常で……ましてや日本ではめったに出会う事など無いそれをマヒルは持っていた。

「これも親切なお医者様に貸していただきました」

無えよ。

何処の世界に拳銃を貸し出す医者がいるってんだよ。

「何で私ここまでやってるんですかね？」

「知らねえよ」

「ですよね」

揺れていた銃身がピタリと俺に定まった。刃物とは違う、射程と破壊力を持ったその出ず恐怖に思わず後ずさる。

普通に考えて 普通が何なのか忘れかけた俺が言うのもなんだが からかわれたか何かしてエアガンでもわたされたのかもしれない。今にもドツキリと書かれたフリップを持ってこられた方が現実的かもしれない。

それでも恐怖は晴れない。

「……でも、悪くないかもしれませんね」

たとえ本物だろうと偽物だろうと、ためらわずに撃つような奴が持っているのだから。

「好きな人を殺したりしたら……一生分の自責と後悔で、すんなり自殺とか出来そうですし」

僅かに笑ったように見えたのは気のせいだろうか？

いや、そもそもどっちが？

聞こえたのは二つ。

弾丸が発射される大きな音と、その反動で再びひっくり返ったマヒルの上げた小さな悲鳴。

ど素人が仰向けになりながら撃った弾はしかし外れる事は無く、スローモーションのように弾道が見える事も無いまま次の瞬間には肉体に食い込んでいた。

俺の前に割り込んだ朝の体へと。

「あ」

誰が呟いたのか。その声で我に返った俺は反射的に朝の体を掴んだ。

「ああ、本当……ですねえ」

俺に体をあずけながら、朝は言った。

「殺さなくても……涼夜さんを守れましたあ。でも、やっぱり私には……」

その言葉をどんな表情で言ったのか、俺は憶えていない。気付いた時には目を閉じて眠るようになっていた。

朝が……死んだ。

黒木の時とは違う、熱を持ったままの死体。その熱も流れる血とともに少しずつ消えていく。

「……違うんです」

耳障りな音がする。

「違うんです。そんな気なんて無かったんです。本物だって知らないくて……本当に違うんです。私……」

「黙れよ」

小さな声だった。しかし俺が言うのと同時に音は止んだ。

朝の命を奪ったのと同じ音にかき消されて。

「大丈夫ですか？」

映ったのは不自然な体勢で倒れているマヒル。捨てられた人形のようにつれて動かない体を侵食するように紅い血が服を染める。

視線を上げると綺麗な白衣と白い肌が映った。場違いなその人は細い身体に見合わない拳銃を握り、俺を見てホッとしたように息をついた。

「面白そうな少女がいたのでつい興味本位で観察してみたのですが、まさかこんな事になるとは」

この人は何を言っているのだろうか。前から何を考えているのか分からない人だとは思っていた、今度ばかりは唐突過ぎる。

独り言のように勝手に呟くその人に俺は聞いた。

「何が、どうなってんだよ白瀬さん」

何が原因だったのか。何が引き金だったのか。あるいは最初からこうなる事が決まっていたのか。

分からない事が多すぎる。

俺が悪いなら、せめて何か理由が欲しい。

「その事ですが……一つ謝らなければありません」

バツが悪そうに僅かに溜息をついて白瀬さんは言った。

「つい今朝方その褐色の少女と知り合ったのですが、思いがけず意気投合してしまいました」

「……………」

「中々興味深い思考回路を持っているようで、つい興味本位でアイテムを持たせて、どう行動するかを観察していたんです」

「……………」

「思いつきで始めてみるものではありませんね。あやうく涼夜君に傷が付く所でした。……おや、どうしました？」

「どう」って、

分かんねえよ何一つ。

何でマヒルと意気投合？

何で観察？

何で簡単に拳銃とか渡してんだ？

何で俺以外なら死んでもいいみたいな事言ってたんだ？

「何がしたいんですかあなた」

「ふむ、具体性に乏しい言葉で言うなら実用・非実用を問わない知識の探求。しいて挙げるなら……人間が壊れるまでを見るのが最近の密かな楽しみでしょうか」

俺はこの人の何を見てきたんだろうか？

美人で仕事が出来て、少し変わりもので、コーヒーを入れるのが上手くて、騒がしいのが苦手で、でもパーティーの準備とか雛人形を飾るのが好きで、正月にはおせち料理を持ってきてくれて……。

でも本当は人を観察の対象とか思ってた、勝手に洗脳とか記憶をいじるのが得意で、人を殺すのを何とも思ってた無い。

それでも、狂人だけと悪い人じゃ無かった……ってくらいで終われるんじゃないかって、思ってたんだけどな。

「ああ、いい機会なので報告があります」

思い出したように白瀬さんが口を開いた。

「涼夜君を使った実験を再開する事を決めました」

「……えっ」

頭が追いつかない、

「考えてみると超能力者を観察する機会というのも珍しいですから。シチュエーションを変えてやり直すのも一興かと思ひまして」

そんな俺を気にも留めずに続ける。

「この町にも名残りはありますが、新しい家も見つかりましたので後は家具と涼夜君を運送するだけです」

ゾクリと今更のように寒気が襲った。でも、そのおかげで今まで固まっていたのが嘘のように体が動き、俺は走り出した。

怖かった。

死ぬ事はない。たぶん今までのような、あるいは好転した日常が待っているのだろう。こんな血生臭い記憶を忘れてやり直せる。

でも、繰り返す。

きつと、繰り返す。

何らかの形で俺はまた繰り返してしまっただろう。泣かせて、苦しませて、傷つけて、最後には……。

この失敗を忘れたくない。この数日で起きた事を憶えていたい。

だから、怖かった。

気付いた時には目の前に地面があった。足が痛い。ぼやけた視界の中に誰かの顔が映った。

「意外に行動的な面があったんですね」

やめてくれ。

「もう少し穏やかな性格の方がいいですね。その方が私の好みです」
開いた口から出たのは、言葉にならないうめき声だった。

意識が遠のく。

嫌な夢を見た。悲しい夢。……嫌な目覚めだ。

びっしょりと掻いた汗を拭いながら僕はベットから降りた。

夢を見た時は母さんに報告するのが家のルールだ。気にした事は無かったけど、友達が言うには変わっているらしい。

母さんの明美さんは父さんの再婚相手で見た目にも分かる20代だ。

何であんな美人が父さんみたいなのと年の差夫婦になったのか謎だ。人に言えない事でもやらかしたんじゃないかと始めは心配だった。

そつえば僕はよく母さんの事を旧姓の白瀬さんと呼んでしまう。母親という認識が薄いんだろうか？

今日は母さんと父さんの誕生日プレゼントを買いに行く事になった。変な所で凝り症な母さんの事だから長くなる事を覚悟しないと廊下を曲がると不意に違和感が襲った。いつもなら母さんの淹れたコーヒーの匂いがする筈だが、今日はしない。それどころか生臭い嫌な臭いが鼻を刺した。

ズキリ　と頭が痛んだ。

頭を押さえてドアを開けると、そこは一面真っ赤に染まっていた。

ワックスが塗られた床も、新しく買った机も、よく父さんが眠っていたソファーも、母さんが悩みに悩んで買った薄型テレビも、休めばいいのに休暇を家族サービスに使う父さんも、そんな父さんと旅行の予定を立てるのが好きだった母さんも。

天井まで撒き散らされて視界を赤く染めたソレの中にその少女はいた。

長い黒髪を汚し、綺麗なワンピースも汚し、白い肌も汚しながら、部屋よりも紅い眼で僕を見た。

「大丈夫ですかあ、涼夜さん」

のぞきこんだ瞳に『俺』が映った。

形は変われど物語は続く。

I
F
E
N
D

ある いは あった かもしれない と ある 【I F E N D】（後書き）

【I F E N D】またの名を朝E N Dをご覧くださいありがとうございます。

実を言うと最初は夕月E N D（朝・マヒル両方死亡で日常回帰という超展開）でやるつもりだったんですけど、じっくりこないんで今に至りました。

ちなみにこの話は本来、真・B A D E N Dという主人公死亡E N Dとして考えていた話でした。

何はともあれ、最後までご覧いただきありがとうございました。

これからも精進していきますので応援してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5575n/>

ある少年の物語

2011年6月1日06時11分発行